910.8
K453
(20)
910.8-Ko453ウ
1200500754856

始

910.8
K0453
(20)

京都女子高等
專門學校教授
田中健三著

問題解說

全

(國文學講座) 20

株式會社 平凡社內
受驗講座刊行會

601-12

問題解説

目次

文法に關する解説……一
説問の解説……二五
文法に關する解説……六〇
源氏物語より出でたる問題の解説……七〇
枕草子より出でたる問題の解説……一〇四
增鏡より出でたる問題の解説……一二九
徒然草及び十訓抄問題の解説……一六二
設問の解説……一七四

問題解説

文法に關する解說

文法殊に文章法の解說は、數學の解き方によく似てゐる。解き得た結果その物はあまり價値が無い。結果に到達する道程が最も大切である。此の道程をば自分で考へ得る資料として、茲に問題の見方から入り、解說を爲して、言ひ足らぬところは備考として附け加へることにする。

【問題】左ノ歌ニツキテ文ノ構成ヲ說明シ歌中ニ於ケル用言ニツキテ文語口語兩樣ノ活用表ヲ作レ（昭和二年十月豫備）

かたちこそみ山がくれのくちきなれ
心は花になさばなりなむ

【問題の見方】　用言即ち動詞形容詞助動詞を考へて右に黑點を附ける。用言は述語になるもので、文中最も大切な

職能を有するからである。「なれ」は助動詞だから、上の名詞「くちき」に附隨して述語となる。「くちきなれ」といふ述語の主語を考へる。「かたち」が主語である。次に「なさ」といふ述語について考へる。終止形「なす」といふ他動詞は複對他動詞（大槻博士廣日本典六七頁參照）で、何ガ何ヲ何ニといふ三つの關係事物を要する。即ち主語と二つの客語とを要する。主語は何か、茲の考察が最も大切である。心を主語とすると誤だ。主語は省略されて歌に表れてゐない。「心をば」の「を」を省いて「心は」となつた、隨つて心は客語で主語でない。「我れ心をば花になす」と歸結すべきである。次に「なりなむ」を述語とする。「なり」の終止形「なる」は有對自動詞で、何ガ何ニと、主語と客語とを要する。「心は花になりなむ」と語を補へば良い。

【解説】

主語	我れ	主語	かたちこそ	形修語	み山がくれの	述語	くちきなれ　附屬句
主語	心は	客語	心をば	客語	花に	述語	なさば　附屬句
主語	心は	客語	花に	述語	なりなむ		

原形	未然	連用	終止	連體	已然　命令
なり	なら	なり	なり	なる	なれ　文語助動詞
である	であら	であつ	である	である	○　口語　同

複文

だ	だら	だつ	だ	だ	○	○　口語　同
です	でせ	でし	です	です	○	○　口語　同
なす	なさ	なし	なす	なす	なせ	なせ　文語口語動詞
なる	なら	なり	なる	なる	なれ	なれ　文語口語　同
ぬ	な	に	ぬ	ぬる	ぬれ	ね　文語　助動詞
た	たら	て	た	た	たれ	○　口語　同
む	○	○	む	む	め	○　文語　同
う	○	○	う	う	○	○　口語　同
よう	○	○	よう	○	○	○　口語　同

【備考】　一、客語補語は區別し難き場合もあるので、二者を合せて客語と總稱した。表中右に黒點のある語形は本文の活用形を示す。指定口語助動詞「だ」・「です」は對話に、「である」は筆記又は説明體の文につかはれる。これ等の連體形「だもの」「だこと」「ですこと」「ですもの」等は用法比較的少い。又文語「なり」から出來た語で、口語の「なら」「な」「なれ」未然・連體・已然の三つの形がある。

【備考】　二、豫備試驗には品詞、本試驗には文章法と、以前は大體略ぼ定まつてゐたが、大正十二年度から、文の構造と用言の活用とを説明する問題にかはつた。これは問題の一進歩である。元來品詞だの文章法だのとわけるの

は、便宜上の事で相互密接の關係がある。たゞ品詞は形體を主とし、文章法は意義を主とする迄で、常に相俟つて考へなくてはならぬ。

【問題】（昭和二年十月豫備）

ひさかたの月の桂も折るばかり
家の風をも吹かせてしがな

【見方】　用言を考へて右に黒點をつける。「折る」「吹かす」の主語を考へる。すると

汝（主）　久方の月の桂をも（述）折るばかり
汝（主）　家の風をも（述）吹かせてしがな

共同主語であるから、前の句をば修飾連語として取扱ふ。

【解説】

久方の（月にかゝる）（形修語）　月の桂も祈るばかり　副修連語
汝（主語）（省略、歌に表れない）　家の風をも（形修語　客語）　吹かせてしがな（述語）　單文
客　都

【備考】　句とは主語と述語とが結合してゐるが、更に大なる文の一部をなすもので、連語とは主述結合關係のないものをいふ。連語を句といひ、句を節と稱せる學者もあるから、念の爲に定義して置く。

原形	未然	連用	終止	連體	已然	命令
折る	をら	をり	をる	をる	をれ	をれ　文語口語動詞
吹く	ふか	ふき	ふく	ふく	ふけ	ふけ　語文口語同
す	せ	せ	す	する	すれ	せ（よ）　文語助動詞
せる	せ	せ	せる	せる	せれ	せ（よ）（ろ）　口語同
つ	て	て	つ	つる	つれ	て（よ）　文語同
た	たら	た	た	た	たれ	○　口語同
き	○	○	き	し	しか	○　文語同

【備考】　「き」の口語「た」の活用は、つの口語「た」の活用に同じい。「てしがな」は未來を豫て過去に言ひ做して願ふなり（廣日本文典二二〇頁參照）

【問題】　左ノ文章ニツキテ文ノ成分ヲ説明シ且文中ノ用言ヲ拔出シテソノ活用表ヲ作レ（大正十四年五月豫備）

行く川の流は絶えずしてしかももとの水にあらずよどみに浮ぶうたかたはかつ消えかつ結びて久しく止るこ

となし

【見方】　用言の右に黒點をつける。「行く」は「流」の形修ゆゑ述語にならぬ。「浮ぶ」も同樣。「久しく」は原形容詞だが、こゝでは副詞となつてゐる。故に用言拔出の際に省いてよろしい。此の外の用言は述語となるべき性質のものである。しかし「絶えず」と「あらず」とは、主語「流れ」を共同にもち、「消え」「結び」は「久しく止ることなし」といふ述句と主語「うたかた」を共同にもつてゐる。そこで上の方の述語をいづれも副修として取扱ふ。

【解説】

主部
- 形修語 行く（流にかゝる）　形修語 川の（流にかゝる）　主語 流は
- 副修連語 絶えずして（もとの水にあらずにかかる）　獨立語 しかも

述句
- 客部 もとの水に　形修語 客語
- 述語 あらず　單文
- 形修連語 よどみに浮ぶ
- 主語 うたかたは　副修連語 かつ消えかつ結びて
- 形修語 久しく止る
- 主語 こと　述語 なし　複文

原形	未然	連用	終止	連體	已然	命令	種類	品詞
行く	ゆか	ゆき	ゆく	ゆく	ゆけ	ゆけ	四段	動詞
絶ゆ	たえ	たえ	たゆ	たゆる	たゆれ	たえ(よ)	下二	動詞
ず	ず	ず	ず	ぬ	ね	○		助動詞
あり	あら	あり	あり	ある	あれ	あれ	良變	動詞
浮ぶ	浮ば	浮び	浮ぶ	浮ぶ	浮べ	浮べ	四段	動詞
消ゆ	きえ	きえ	きゆ	きゆる	きゆれ	きえ(よ)	下二	動詞
結ぶ	結ば	結び	結ぶ	結ぶ	結べ	結べ	四段	動詞
止る	止ら	止り	止る	止る	止れ	止れ	四段	動詞
なし	なく	なく	なし	なき	なけれ	○	第一種	形容詞

【備考】「絶えずして」の「して」は原佐三段（變格ともいふ）活用連用形に現在完了「つ」の連用形が重なり出來たのだが、慣用久しくて一の助詞と見做す（廣日本文典二〇七頁參照）

【問題】　左の文を文章法上より解剖せよ　（大正十三年本試驗）

やうやう天の下にもあぢきなう人のもて惱みぐさになりていとはしたなき事多かれど忝なき御心ばへの類な

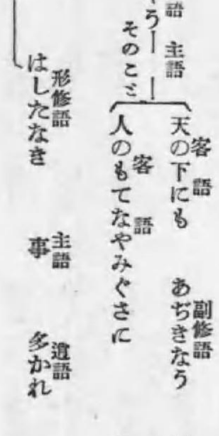
きを頼にて交らひたまふ

【見方】　略せられた語について考へる。古文はこれが大切だ。「あぢきなう」は下の「なりて」へかけて文意を考へると、意味がうまく通らぬ。「主語(その事―更衣を愛し給ふこと)がやう〳〵天の下にもあぢきなうなつて」これでは意味上都合がわるい。こゝの考方が主眼點である。

そのことやうやう天の下にもあぢきなう思はれ

と語を補ふ。次に「頼にて」を「頼にし奉りて」と補ふ。此の文の歸結は「桐壺更衣交らひたまふ」である。此の上に接續助詞「て」「ど」「て」の三つある中、上の「なりて」の「て」は「多かれ」にかかる所謂陪臣の格であるから。「ど」と下の「て」から別々に直接「交らひたまふ」にかゝる。一は條件の逆態を示す「ど」、一は理由即ち順態を示す「て」である。

【解説】



【問題】　現代文(文語體)の文法と中古文の文法との相違せる主要點を擧げよ　(大正十四年本試驗)

【見方】　文法上許容せる事項を說明せよといふ題を、裏から問うたのである。そこへ考がつくと何でもない易い題であるが、うつかり考へつかないで、しかも試驗場で作るとなると相當な難問題であらう。中古文法「めり」が盛に用ひられたことや、「だに」の意義が擴張して「すら」の領域までも占領したことや、なぞ禁止の助詞が用ひられ、やか疑問助詞が係詞として用ひられたこと等が現代文と相違はしてゐるものの、主要な文法といふことは疑はしい。やつぱり十六箇條――動詞一、形容詞一、助動詞六、助詞七、その外一つ――の許容例で說明すべきことと思ふ。解說は誰でも出來るから省略する。

【問題】　左の文章中の主語とそれに對する述語とを指示し次に動詞を拔出してその活用表をつくれ　(大正十

四年豫備）

年頃思ひつること果し侍りぬ聞きしにも過ぎて尊くこそおはしつれそも参りたる人毎に山へのぼりしは何事かありけむゆかしかりしかど神へ参るこそ本意なれと思ひて山までは見ず

【見方】　文章中の主語を指示するのだから、省略された主語は指示するに及ばぬ。文章中の述語とそれに對する主語とを指示せよといふ問題ならば省略の主語をも擧げねばならぬ。主語を見るには體言を搜せばよい。しかし動詞に右傍へ黒點をつけて、それから考へた方が脱落しなくて完全である。

【解説】　人毎に（主語）のぼる（述語）　何事か（主語）　ありけむ（述語）「われ（省略を補ふ）神へ参るこそ」、句で主語となる、即ち主句。それに對する述語は本意なれである。他は皆省略されてゐる。

原形	未然	連用	終止	連體	已然	命令	種類
思ふ	思は	思ひ	思ふ	思ふ	思へ	思へ	四段
果す	果さ	果し	果す	果す	果せ	果せ	四段
聞く	聞か	聞き	聞く	聞く	聞け	聞け	四段
過ぐ	過ぎ	過き	過ぐ	過ぐる	過ぐれ	過ぎ（よ）	上二段
おはす	おはせ	おはし	おはす	おはする	おはすれ	おはせ（よ）	サ行三段
参る	参ら	参り	参る	参る	参れ	参れ	四段
登る	登ら	登り	登る	登る	登れ	登れ	四段
あり	あら	あり	ある	あり	あれ	あれ	良變
ゆかしかり	―ら	―り	―る	―る	―れ	―れ	形容動詞
参る	参ら	参り	参る	参る	参れ	参れ	四段
思ふ	思は	思ひ	思ふ	思ふ	思へ	思へ	四段
見る	み	み	見る	見る	見れ	見（よ）	上一段

【備考】　「おはす」を佐行變格に定めたのは本居春庭で、その後義門は之に疑を抱きて、四段と下二段と二語あることを證明した。詳しく廣日本文典別記五十二頁にも說かれてある。そこの「おはすトイフ動詞ノ活用ハ佐行ノ變格ナリトイフコト、國語家ノ間ノ一定ノ論ニテモアリ云々」と大槻博士が言はれて居ますが、どうも根據が薄弱と思はれるから、私個人の意見としては義門の說に從ひ、四段と見たい。

【問題】　左の文中の動詞形容詞助動詞を摘出して其の活き方を法（段・形）に當てて示せ　（大正十三年豫備）

若し道のほとりに辱くも鳳輦を先立てゝ御旗をあげられ臨幸の嚴重なる事も侍らむに参りあへらばその時の進退いかが侍るべからむ

【見方】　動詞だけ纏めて先きに摘出し、次に形容詞次に助動詞と順次に拔出せばよい。文法書には法とも又段とも

形とも色々いつて、あるから括弧をして示したまでだ。動詞は自他をよく考へて活用を間違ぬやうにせねばならぬ。

【解説】

原形	未然	連用	終止	連體	已然	命令
先立つ	て	て・	つ	つる	つれ	て(よ)
あぐ	げ・	げ	ぐ	ぐる	ぐれ	げ(よ)
侍り	ら・	り・	り	る	れ	れ
参る	ら	り・	る	る	れ・	れ
あふ	は	ひ	ふ	ふ	へ・	へ
厳重なり	ら	り	る・	る	れ	れ
らる	れ	れ・	る	るる	るれ	れ(よ)
む	○	○	む	む・	めれ	○
り	ら・	り	り	る	れ	れ
べかり	ら・	り	り	る	れ	○

以上動詞
形容動詞

【備考】　「辱く」は原形形容詞であるが、こゝでは副詞と見る。

【問題】　左の文を文章法上より解剖せよ　（大正十三年本試驗）

昔は五たび譲りしあとをたづねて天日嗣の位にそなはり今は八隅知る名をのがれて藐姑射の山にすみかをしあたり

【見方】　昔はそなはり、今は占めたり。「昔は」「今は」主語で無くて副詞的修飾語であるから、主語を考へて補ふ事が最も大切な考へ方である。「我れ」とでも申上げて置く。これは共同の主語である。

【解説】

主語	副修語	主語（補足す）	副修語	述語	客語		述語	形修	客語	客語
我れ	昔は	古の帝の	五たび	譲りし	あと	を	たづねて	天つ日嗣の	藐姑射の山に	すみかを
客語	述語	副修	形修語	客語	述語		客語			
位に	そなはり	今は	八隅知る	名を	のがれて					
述語	複文									
しあたり										

古の帝の五たび譲りし……形修句「あと」といふ客文に係る。

【備考】　主語を「彼の帝」としてもよいやうだが、さうすると述語に敬語が無くては不都合だ。敬語の無いところから見ると、御自分の事を宣はれた文と見える。故に主語を我れとする。

【問題】 左の文中の動詞形容詞助動詞を摘出して其の活き方を法(段)に當てて示せ　(大正十三年豫備)

凡保元平治より以來の亂りがはしさに頼朝と云ふ人もなく泰時といふ人もなからましかば日本國の人民いかがなりなましこのいはれをよく知らぬ人は故もなく皇威の衰へ武備のかちにけると思へるは誤なり

【解説】

原形	未然	連用	終止	連體	已然	命令
云ふ	は	ひ	ふ	ふ	へ	へ
なかり	ら	り	り	る	れ	れ
なる	ら	り	る	る	れ	れ
知る	ら	り	る	る	れ	れ
衰ふ	へ	へ	ふ	ふる	ふれ	へ(よ)
かつ	た	ち	つ	つ	て	て
思ふ	は	ひ	ふ	ふ	へ	へ
なし	く	く	し	き	け	以上動詞及形容動詞
まし	○	○	まし	まし	○	形容詞文中二箇所にあり
					ましか	○

ぬ	な	に	ぬ	ぬる	ぬれ	ね		
ず	ず	ず	ず	ぬ	ね	○		
ぬ	な	に	ぬ	ぬる	ぬれ	ね		
けり	けら	○	けり	ける	けれ	○		
り	ら	り	り	る	れ	れ		
なり	ら	り	り	る	れ	れ	以上助動詞	

【備考】 「まし」の未然形「ませ」連用形「まく」と說く說あるが採らぬ。「けり」の連用形は先づないと定めてよろしい。未然形「けら」は今用法が少い。「り」の未然形「ら」連用形「り」已然形命令形の「れ」も用ひ方があまり多くない。

【備考】 左の文中の動詞形容詞助動詞を摘出し其の活用を法(段)に當てて示せ　(大正十二年豫備)

あないみじとて雪打拂はせ給へりし御もてなしこそいとめでたかりしか御袍は黑きに御單衣は紅の花やかなるあはひに雪の色ももてはやされてえもいはずおはしましししものかな

【解説】

原形	未然	連用	終止	連體	已然	命令

拂ふ	は	ひ	ふ
もてはやす	さ	し	す
いふ	は	ひ	ふ
おはします	さ	し	す
いみじ	じく	じく	じき
黒し	く	く	じけれ
めでたかり	ら	り	き
花やかなり	ら	り	る
す	せ	す	する
給ふ	は	ひ	ふ
り	ら	り	る
き	○	き	し
き	○	き	し
る	れ	る	るる
ず	ず	ず	ぬ

へ	○	
せ	○	
へ	○	
せ	○	以上動詞
じけれ	○	
け	○	以上形容詞
れ	○	
れ	○	以上形容動詞
すれ	せ(よ)	
へ	○	
れ	○	
しか	○	
しか	○	
るれ	れ(よ)	
ね	○	

き　○　○　き　し　しか　○　以上助動詞

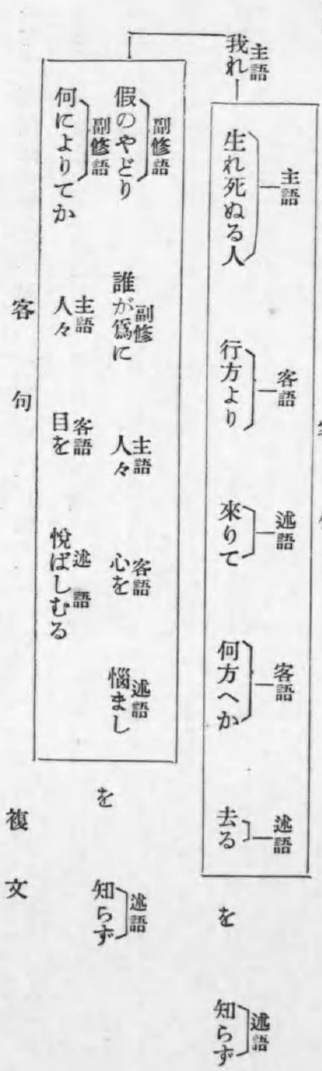
【問題】 左の文章の構造を説明し文中の用言の活用を表示せよ（大正十二年後期豫備）

知らず生れ死ぬる人何方より來りて何方へか去る知らず假のやどり誰が爲に人々心を惱まし何によりてか人々の目を悅ばしむる

【見方】 例置法の文ゆゑ、正しい順序に改め、主語の省略せるを補へばよろしい。

我れ　生れ死ぬる人　何方より來りて何方へか去るを知らず　我れ　假のやどりなるものを　誰が爲に心を惱ましし　何によりてか目を悅ばしむるかを知らず

【解説】



假のやとり（副修）は「惱まし」及び「悅ばしむる」に係る。

原形	未然	連用	終止	已然	連體	命令	
知る	ら	り	る	る	れ	れ	
生る	れ	れ	ら	るる	るれ	れ（よ）	
死ぬ	な	に	ぬ	ぬ・る	ぬれ	ね	
來る	ら	り・り	る	る・る	れれ	れ	
去る	ら	り・り	る	る・る	れれ	れ	
惱す	さ	し・り	す	す	せ	せ	
悅ぶ	ば・さ	び	ぶ	ぶ	べ	べ	以上動詞
す	す	す	す	ぬ	ね	○	
しむ	あ	あ	む	む・る・る	むれ	あ（よ）	以上助動詞

【問題】　左の文を品詞に區別せよ　（大正十一年淑徳）

ままをさんそんなにうちばかりゐないでちつとそとくおいでなさいいつしよにあそびませう

【解説】

まままをさん	名詞	そと	名詞	へ	助詞	そんなに	副詞	おいで	動詞	なさい	助動詞	いつしよに	副詞
うち	名詞	に	助詞	ばかり	助詞	ゐない	動詞	あそび	動詞	ませ	助動詞	ら	助動詞
で	助詞	ちつと	副詞										

【問題】　左の文を文章上より解剖せよ　（大正十一年本試驗）

未成年者が其の飲用に供する目的を以て所有し又は所持する酒類及其の器具は行政處分を以てこれを沒收し又は廢棄其の他の必要なる處置を爲さしむることを得

【見方】　政府は酒類及器具を沒收し廢棄其他の處置を官吏をして爲さしむることを得と縮める。

【解説】

未成年者が	主語	其の飲用に供する目的を以て	副修連語	又は	獨立語	所持する	連語	所有し	獨立語	又は	獨立語	其の器具を	客語
酒類	客語	及	獨立語										

形修句（客語に係る）と客語とを合せて客部とする提示格で、下に「之」でうけてある。

政府は（主語）　官吏をして（客語）　行政處分を以て（副修連語）　之を（客部に當る）（客語）　沒收せしむること（連語）（客語）　を　得（連語）

ことと（客語）の形修句

政府は（主語）　官吏をして（客語）　行政處分を以て（副修）　廢棄（客語）　其他の（獨立語）　必要なる（形修語）　處置（客語）

を　爲さしむる（連語）　ことと（客語）　を　得（連語）

「爲さしむる」までは、客語「こと」の形修句である。

【問題】　文章ノ上ヨリ左ノ歌ヲ解剖セヨ　（大正三年本試驗）

よと共に峰へ麓へおりのぼり行く雲の身は我にぞありける

【見方】　述語「おりのぼりゆく」の主語「雲」は下にある故に、述語とせずして、形容詞的修飾連語として取扱ふ。

【解説】

よと共に峰へ麓におりのぼり行く（形修連語（雲に係る））　雲（形修語）　の　身（主語）　は　我にぞ（客語）　ありける（連語）　單文

【問題】　左ノ文ヲ文章法上ヨリ解剖セヨ　（大正五年本試驗）

上も御涙の際なく流れおはします

優なりと覺ゆばかりすぐれたると取る方なく口惜しきは數とはひとしくこそ侍らあ

【解説】

上も（主語）　御涙の（主語）　際なく（副修句）　主述　流れ（述語）　おはします（述語）　複文

客句……おはしますの客語が句より成れるもの

我（主語）　優なりと（客語）　覺ゆ（述語）　ばかり　すぐれたるに係る副修句　すぐれたる（主語）　と

取る方（主語）　なく（述語）　副修句（口惜しきに係る）　口惜しき（主）　とは　數（主）　ひとしく（述語）　客句　こそ　あらあ（述語）

【備考】　「ある」「おはす」が述語になる時は、それだけでは意味不明で補ふ語は、總稱した廣い意味の客語とする。

【問題】　左ノ文中ノ用言ヲ抽出シソノ活用ヲ示セ　（大正四年豫備）

たとしくなくながめしをれさせ給へる夕ぐれに沖の方にいとちひさき木の葉の浮べると見えて漕ぎくるをあ

まの釣舟かと御覽ずるほどに都よりの御消息なりけり

【解説】

原形	未然	連用	終止	連體	已然	命令
ながむ	め	め	む	むる	むれ	め(よ)
しをる	れ	れ	る	るる	るれ	れ(よ)
浮ぶ	ば	び	ぶ	ぶ	べ	べ
見ゆ	え	え	ゆ	ゆる	ゆれ	え(よ)
漕ぐ	が	き	ぐ	ぐ	げ	げ
くる	こ	き	く	くる	くれ	こ(よ)
御覽ず	ぜ	じ	ず	ずる	ずれ	ぜ(よ)
小し	く	く	し	き	けれ	○
さす	せ	せ	す	する	すれ	せ(よ)
給ふ	は	ひ	ふ	ふ	へ	へ
り	ら	り	り	る	れ	れ

以上動詞　形容詞

なり　ら　り　り　る　れ　れ
けり　ら　○　り　る　れ　○

以上助動詞

【備考】「たとしへなく」は副詞である。

【問題】左の文中の動詞助動詞を摘出してその活用を示せ（大正六年豫備）

粟田殿の「いかにおぼしめしならせおはしましぬるぞ只今過ぎさせ給はばおのづから障りもいでまうできなむ」とそらなきし給ひしはこの時ぞかし

【解説】

原形	未然	連用	終止	連體	已然	命令
おぼしめす	さ	し	す	す	せ	せ
なる	ら	り	る	る	れ	れ
過ぐ	ぎ	ぎ	ぐ	ぐる	ぐれ	ぎ(よ)
いづ	で	で	づ	づる	づれ	で(よ)
まうづ	で	で	づ	づる	づれ	で(よ)
く	こ	き	く	くる	くれ	こ(よ)

す	せ	し	す
す	せ	せ	す
おはせます	さ	し	す
ぬ	な	に	ぬ
さす	せ	せ	す
給ふ	は	ひ	ふ
ぬ	な	に	ぬ
む	○	○	む
き	○	○	き

する	すれ	せ(よ)
する	すれ	せ(よ)
す	せ	せ
ぬる	ぬれ	ね
する	すれ	せ(よ)
ふ	へ	へ
ぬる	ぬれ	ね
む	め	○
し	しか	○

以上動詞

以上助動詞

【問題】 左の文に誤あらば之を正し且其の理由を略記せよ（同上）

孔子周に行き禮を老子に問ふて大ひに得る所ありしといふ

【解説】

問ふて……「問うて又は問ひて」と訂正す。

理由「て」は連用形よりうく。「問ひ」は連用形ゆゑ「問ひて」とするを正しとす。又音便にて「ひ」が「う」になるゆゑ問うてと訂正するも良し。

大ひに……「大いに」と訂正す。

理由「大きに」音便ゆゑ、「大いに」とす。

ありしといふ。許容である。中古文法ならば「ありきといふ」とすべきである。「と」は終止形をうく。時の助動詞の連體形を受けるのは許容第十二項にある。き（終止）し（連體）しか（已然）と活用する時稱過去の助動詞で、「と」につゞいたのである。

設問の解説

左ノ文ヲ鑑賞批評セヨ　（昭和二年十月豫備）

小諸なる古城のほとり雲白く遊子かなしむみどりなすはこべはもえずわかくさもしくによしなししろがねの
ふすまのをかべ日にとけてあは雪流るあたゝかき光はあれどのにみつゑかをりもしらずあさくのみ春はかす
みてむぎの色僅かに青し旅人のむれはいくつか畠中の道を急ぎぬ暮れゆけばあさまも見えずうたかなし佐久
の草笛千曲川いさよふ波の岸ちかきやどにのぼりつにごり酒にごれる飲みて草まくらしばしなぐさむ

【解説】　想の上から見ると、「遊子かなしむ」の一句が提綱で、主意を捉へて起し、末尾の「草枕しばしなぐさむ」

と首尾相應ずる。承句には草・雪・麥畠等早春の田園を描き、轉句として「旅人のむれ」を點出して全體を躍動させ、古戰場の背景、千曲川の夕暮に佐久の草笛が聞える。崑崙山南、月斜ならんとし、胡人月に向つて胡笳を吹くにも勝る悽愴の氣分がよく味はれる。總體地方色に富み、變化のある思想と見てよい。去國三巴遠とか、菱歌清唱不勝春とか、君不聞胡笳聲最悲とか、いくつもの漢詩をば包含してゐるほど變化に富んでゐる。

表現の上から見ると、「雲白く」の句はいかにもけ高い、そして又強い。古城を眼前に髣髴せしめる、實に良い表現である。「しろがねのふすまのをかべ」巧緻な隱喩も面白い。「雲白く」を萬葉赤人の典雅とすれば、これはまた新古今の趣がある。源氏須磨のをはりに「海のおもてはふすまを張りたらむやうに光滿ちて、神鳴りひらめく。」とあるが、同巧である。「日にとけて」と上にあつて、その下に「あたたかき光はあれど」と受けたところもよい。「あさくのみ春はかすみてむぎの色僅かに青し」とすべてを收めた筆致はなかなかうまい。かう收めて置いて「旅人の」と轉じた味も捨てにくいが、なんといつても「暮れゆけば」以下は全詩のクライマックスで、歌曲にするなら高調子。「うた悲し佐久の草笛」は最も強い情を表現するにふさはしい倒裝法を用ひてゐる。全詩の生命は此の一句に集る。悽愴又悽惻。そこで「もののふのやそうぢ河の網代木」のそれならで千曲川いさよふ波に、坐ろ人生の流轉を感じ、柏舟汎流、微我無酒以敖以遊といひけむやうに、草枕旅にしあれば憂あり、濁酒もて慰める。しかもほんのたゞしばし。「しばし」の副詞實によくきく。濁酒の語また地方色の一つか。

音韻の上から見ると、「こもろなるこ城のほとり、くもしろくいうしかなしむ」と「こ」の頭韻法よりはじめて「く」「し」といふ音を反複してある。同音反複はなほ「みどりなすはこべはもえず、わかくさもしくによしなしろがねの……あはゆき流るあたゝかき光はあれど」、殊に「にごり酒にごれる飲みて」は祝詞の調子である。かく同音を反復して不知不識のうちに調子をよくしてゐる。加行の音はかたい感じを起こす。「雲白く」の強いのは「く」の音に負ふ所が多い。「し」は淋しい感じを起こす音である。「遊子悲む」「しくによしなししろがねの」等の句が調その物が既に淋しい悲しい。樂器に合せて吟じたりうたつたりする歌詞や淨瑠璃では、一段と音韻關係にいつて微に入り細に入る必要があるが、新體詩は此の位で止めて置かう。

【備考】「みどりなすはこべはもえず」は「緣なしたりし紫は今萠えず」の意。過去を現在に言ふ例は韻文に多い。袖吹きかへすあすか風（萬葉集卷第一）もその一例である。なほこの詩の餘材として藤村集（現代日本文學全集第十六編島崎藤村集改造社發兌）三三頁から九二頁までに千曲川のスケッチと題する文がある。その麥畠（三九頁）や古城の初夏（四〇頁）等はいくらか參考になる。

【解釋】（昭和二年十月豫備）

やよひの十日あまりの頃同じ心なる友だちあまたいざなひて初瀨に詣で侍りしついでによきたよりは寺めぐりせむとて大和のかたに旅ありき日ごろするに路遠くて日もあつければ木蔭に立ちよりて休むとて群れゐる程にみづはさしたる女の杖にかゝりたるがめのわらはの花がたみにさわらび折りいれてひぢにかけたるひと

り具してその木の下にいたりぬ遠き程にはあらねど苦しく成りて侍ればおはしあへる所はゞからしけれど都のかたよりものし給ふにやむかしも戀しければしばしもなづさひたてまつらむといふけしきも口すげみわなゝくやうなれど年よりたる程よりも昔おぼえてにくげもせず此のわたりにおはするにやなど問へばもとは都に百とせあまり侍りてその後山城の狛のわたりにいそぢばかり侍りきさて後おもひもかけぬ草のゆかりに春日野わたりに住み侍るなりすみかのとなりかくなりし侍るもあはれにといふに年のつもり聞くほどに皆驚きてあさましくなりぬ

【問題の見方】　別にむつかしいところもないが、たゞをはりの方に「すみかのとなりかくなりし侍るも」とある其處の考方が大切である。催馬樂呂歌山城に「山城のこまのわたりの瓜つくり、瓜作り云々」や拾遺和歌集卷第九雜下「音にきくこまのわたりのうりつくりとなりかくなりなる心かな」（八代集抄六合館發行上卷百九頁）を知つてをれば、無論わけなく解釋できる。上文に「山城の狛のわたり」云々とある緣によつて拾遺の此の歌の詞をとつて書いたのである。しかし、こゝでは、一切何も知らぬものとして解釋する。應用の頭をつくる見方を説かう。「し侍る」といふ述語があつて「すみか」といふ主語がある以上、「となりかくなり」は副詞的修飾連語であることが明である。「の」は主語を示す格助詞。「とかく」はもと助詞「と」に副詞「かく」の連つたものであるから、二語の間に他話を挿み用ひる。「世の中はとてもかくてもすごしてむ」「とまれかくまれ」「とにもかくにも。」こゝへ考へつけばよろしい。もし「すみか野となり」といふ方へ頭の働が向いたなら「かくなり」が解けぬのみならず「野となり侍り」とつゞいて「し」（爲）といふ動詞が意味をなさぬ。又「住家の隣」といふ方へ頭が働いても同樣である。つまりはとかく二語相對立してゐるといふ潛在意識がふいと浮び出てくる所に價値がある。また上に都から狛へそれから春日野へと住家の轉じたことを言つてある、そのあとを受けて上文を總收した文中のクライマツクスで、普通に考へても、何か故事でもありさうなところである。

【問題の書方】　正確は第一に必要で、第二は撮要、第三は迅速である。解釋といふ中に或程度まで批評鑑賞が含まれてゐる。中學では純粹の解釋、高等學校では批評が加はり、大學では殆ど鑑賞所謂高等解釋が主になる。しかし鑑賞といつても正確に解釋し得て後の產物であらねばならぬ。たゞ遠方から空砲を發つやうな上に、しかも方向さへ間違つては笑止千萬だ。そこで鑑賞をいくらか加へることにして正確な解釋の生命であることを述べて置く。それから難語の摘解を初にするのが普通の順序であるが、時間の關係から終につける人もある。すらつと解けば良い。文法のことは解釋に書かないでよい。文法には文法の試驗がある。

【解説】　春の彌生の十日すぎごろ、氣のあつた友だち、多く誘つて、初瀨へまゐりましたついでに、よいたよりですから、寺めぐりをしようと思つて、都をでゝ大和の方へ旅行を幾日かすると、路が遠く、そのうへ日もあつく疲れたので、木かげによつて休むとして、群れ居るその時に、齒がぬけて稚齒がさしぐむと形容する老女の杖によりかゝつたのが、童女の花筐に芽出し頃のわらびを折り入れて、臂にかけたのを一人つれて、自分等の休んでゐる木かげにやつて來た。毛女「遠いほどではないが、苦しうなりましたので、お集りの所へは氣づかひで、さしひかへべきです

が、なつかしい都の方から、おこしなさつたのですか、私が都すまひの昔も戀しいので、しばらくでもおなじみ申上げませう」と言ふやうすも齒がぬけて、からだを震はすやうだが、年のよつた程に比べては、古風でわるい氣もちもいたしません。良「このお近くにお住みですか」など問ふと、孝「もとは都に百年あまり居りまして、その後山城の狛の邊に五十年程居りました。そして後思ひがけない緣で、なほ南へと進み、春日野の邊に住んでをります。かやうに住家が、いろ〳〵かはり〳〵しますのも、ほんに心細うございますといふので、年のつもりを聞くにつけて、皆驚き呆れかへりました。

【備考】　大鏡では單に「さいつ頃」とあつて季節がわからぬ。水鏡・增鏡では「二月中の五日」本文即ち今鏡は寺めぐりの旅ありきの關係から彌生十日すぎと定めたと見える。次に「日もあつければ」とある首尾で、やがて木かげの對話となる。初瀬は水鏡もさうなつてゐる。枕草子卷六「正月に寺に籠りたるは」の段、古本には清水とあり、流布本には初瀬となつてゐる。名高いことは源氏玉葛や椎本の卷さては貫之の「人はいさ」でもわかる。「都をでゝ」と補つたのは、下に「都のかたよりものし給ふにや」とある首尾を考へたからである。「あまたいざなひて」と初にあつて、中に「群れゐる」といひ、末に「皆驚きて」とよく首尾相應じてゐる。「みづはぐむ」は通說による。源氏夕顏有朋堂源氏物語一の百四十五頁六行にある。松井簡治先生は「自分としては伴信友の比古婆衣の說が良いと思ふ」とお敎へ下さつたのを、今も記憶してゐる。大日本國語辭典がその後お出來になりました。最高權威の辭書ですから、お互苟も國語にたづさはる者は、常にその恩惠に浴しなければなりません。相塲の語の多いことだけでも、いかに細心の注意をお拂ひになつたかゞわかります。「みづわさす」を見て下さい。こゝは通說でもよろしい。「杖にかゝつたのが」は增鏡を模す。「はゞからし」、又「はばからはし」は憚りひかへるべくある意。「なづさふ」古語の意は浮き漂ふこと、中古からは轉じて親しみなじむ意となる。狛は今、上狛（カミコマ）といふ。山城の南部、木津の西に當る。もと歸化した高麗人のゐたゆかりで出來た地名である。萬葉集卷第六に「狛山に鳴くほととぎす」の短歌がある。催馬樂山城に「やましろの狛のわたりの瓜つくり、我をほしといふ、いかにせん、なりやしなまし瓜たつまでに」とある。田園生活に芽生えた戀愛をいつた詩で、英國邊の牧歌に似てゐる。物語註釋十二種（國文註釋全書梁塵後抄四の一二二頁に、「狛は地名、山城國相樂郡瓜の名所とぞ。瓜作りは瓜を作る人にて男女共日毎に瓜畑にて出會ふをもて、此男其女に妻になれといふ也。萬葉に山城の久世のわく子がほしといふ、我あふさわに我をほしといふ、山城の久世とある同意也。さて是は女の歌にて我を妻にほしといふ。いかにせん。意に隨はんや、いかゞあらんと也。男女の中らひになるならぬと多くいへり。（中略）瓜立つまでは瓜の花落より漸く大く成るを瓜立つといひけんか。立つはものの成りたつ也。」とある。百五十歳は大鏡を模す。「春日野わたり」は野といふ緣で草といふ。「となりかくなりし侍るも」の用例に似たのは雅言集覽上四一〇頁「とかく」の條參照。「あはれに」の下「こそ侍れ」省略。「こそ」は「何よりも」と解す。意譯して「ほんに」とした。

うき世には門させりとも見えなくになどかわが身のいでがてにする（つかさとけて侍りける時よめる）（同上）

【問題の見方】　括弧内のつかさとけて云々を考へる。免官になつた時に自分の感想を告白した抒情詩と見て差支がない。次に歌の中心思想は「わが身のいでがてにする」といふにある。どこをでるのかと問ふ。すると一の句の「うき世」である。「わが身がうき世を出で難くするはなどか」と自らいぶかつたやうに述べてある。「うき世には」の「は」これ注意を要する助詞で、普通ならば「浮世に」だけでよいわけであるのを、特に「は」を加へたのはどういふわけか。「は」は對照する意味の助詞で、本義は區別する意である。例へば柳は綠、花は紅といふ風に用ひる。「うき世には」といへば、そこに何か門さしてある或物がある。その或物とうき世と區別しながら對照したのである。即ち反對的對照である。古今集雜歌下平貞文の歌であるが、拾遺集卷第八雜上にも出てゐる（八代集抄上九四頁）詞書の旁註に「解官とて罪ありて官をとられてこもりゐる事也」とある。即ち我が門は閉(とぢ)して籠居してゐるが、それに對して、うき世にはそのやうに門さしてあると思はれぬ意である。

【解説】　われは閉門籠居こそすれ、うき世にはそのやうに門をさして人の出るのを止めるとも思はれない。それにどうして我身が出家遁世しにくさうにすることぞいの、はて合點がゆかぬわいな。妻子などの羈絆のために世を捨てかねる心境を率直に告白したのである。「うき世には門させりとも」こゝが此の歌の味のある所、そのあどけないところ、その中に理窟めいたところが目のつけどころである。

【備考】　古來異說のある歌である。遠鏡には「オレハ門ヲサシテ出入セヌヤウニモ見セヌニ、ナゼニ我身ノタメニハウイ世ノ中デ、得世ニ出ヌ事ゾイ」と譯してあるが首肯し難い。「に出る」と解したのは合點できぬ。「うき世を出る」「うき世から出る」の意であるべきで、「出る」といふ動詞その物の意義から見ても當然さうあるべきである。遠鏡では「でる」でなくて「入る」ことになる。「入る」ことにすれば、「うき世」の「うき」が一向力のない語となるではないか。「智者も萬慮に一失あり」か。

香川景樹の古今和歌集正義では「此歌出家遁世を願ふの意と見れば論なし。されど司とけてと云ふ端書に叶はぬ心地す。又此歌再び拾遺に出でたるには、『司とられて侍りける時、妹の女御の御もとに遣しける』とあれば、猶ほ出身の道を失ひたるを歎きたると聞ゆ。されど次の歌後の世をかけたる意あれば、世にあはぬより遁世せん心ばへも計りがたし」云々（四の八九頁）次の歌とは

ありはてぬ命まつまの程ばかりうき事しげく思はずもがな

古今集でこの次にある同人の歌である。「同人の解官の時の述懷也」と正義に述べてある。二つ對比した考へつきは、なか〳〵よい。かうあるべきである。次の歌の「うき事しげく」の「うき」も相當深い意味をもつてゐる。流石大家の景樹も疑を存してゐるが、私は上のやうに解釋する。

山里に霧のまがきのへだてずばをちかた人のそでもみてまし（同上）

【問題の見方】　「まし」といふ助動詞が狙ひどころである。「まし」は未來や意志や希望にも用ひるが、本義は假定である。事實と相反對した事物を假定していふ時に用ひられる。秋霧が隔てゝゐるのは事實である。しかし其の反對の

場合、即ちもし霧が隔てないならばこれ〳〵であらうものをといふ意である。

【解説】　自分のすむこの山里に、秋霧がこのとほり垣をつくつて隔てないなら、あの遠くの下を行く人たちの袖を見て、わが心を慰めようものを、霧で見えぬが残念だ。「霧のまがき」はおもしろい表現である。隠喩法で、「落花の雪」「氷の刄」などと同じい。山里の秋霧を詠じたのであるが、客観詩でなくて、心中の無聊を表白した主観詩である。

【備考】　新古今集巻第五秋歌下、題しらず、曾禰好忠として此の歌がある。秋霧を詠じた歌が此の前後に出てゐる。寂蓮の「霧たちのぼる」の如く純客観のが、他にも一つ、「宇治の川霧」を歌つたのがある。その外のは情景兼備、否むしろ主観が主になつてゐる。この歌もその一つですから、山里の淋しさを味つた人でなくては、歌の詞こそ解けるが、眞意がわからぬ。詩即生活の境地でなければ歌はとけぬ。経験の無い人はせめて文學で讀んで、他人の経験の分配に預かつて貰ひたい。山里の淋しさ、人里戀しの心を表したのは、源氏椎本の巻有朋堂源氏三の五〇六頁宇治八宮逝去後二人の姫君の心と景とをよく述べてある。涙がこぼれさうである。「法師ばら竜などの登りゆくも、見えみ見えずみ、いと雪深きを、泣く泣く立ち出でて見送り給ふ。」とある。此の情があつてはじめて「霧のまがきの隔てずば」が活きて來るのである。「みてまし」は「見て慰めまし」の意。「まし」は動詞・形容動詞・助動詞の未然形を受ける語ゆゑ、「て」を受けたのは、ての下に動詞を省畧したのである。

國語科本試驗問題　【解釋】　（昭和二年度）

一、宮の御前に内の大臣の奉り給へりし御草子をこれに何を書かましうへの御前には史記といふ文を書かせ給へるなどのたまはせしを枕にこそはし侍らめと申ししかばさば得よとて賜はせたりしをあやしきを故事や何やと盡きせずおほかる紙の數を書きつくさむとせしにいと物覺えぬことぞおほかるや大かたこれは世の中のをかしき事人のめでたしなど思ふべき事なほえり出でて歌などをも木草鳥蟲をもいひ出したらばこそ思ふほどよりはわろし心見つなりともそしられめ只心ひとつにおのづから思ふことをたはぶれに書きつけたれば物に立ちまじり人なみなみなるべき耳をも聞くべきものかはと思ひしにはづかしなども見る人はのたまふなればいとめやすくぞあるやげにそれもことわり人のにくむをも善しといひ樂むるをも惡しといふは心のほどこそおし量らるれ只人に見えけむぞねたきや

【問題の見方】　「物覺えぬことぞおほかるや」までで切る。枕草子の出來たいはれと謙辭とである。徒然草のはじめによく似てゐる。次は「いとめやすくぞあるや」で切る。「かうもしたら」と反對の場合を假想して述べて、然るに實際は我が小主觀を、自然の儘、推敲もせでの戯書であると斷り、批評の豫想と或る相當な人からの評をいつて、皮肉に「いとめやすぞ」と出たところ。こゝに相當な人からと斷つたのは「見る人はのたまふ」とあるからである。枕草子でのたまふ」をつかつた所を考へると、彼が交友の男性齊信・行成や經房の中將に對してであつて、左衛門尉則光等には「言ふ」と用ひてある。次は終まで。「はづかしと宣ふ」の敷衍と「只人に見えけむぞ」の結びとである。注意すべきは「人のにくむをも善しといひ」とあつて宣ふとは書いてない。そこで此のうらうへの評ははづかしと宣うた人

でない。世間の評なるものは、概してさういふものだといつて、暗に自分も其の一人だとほのめかしたのである。隨つて「心のほど」をばはづかしと宣うた人の心と解せる武藤元信の枕草紙通釋(下八四二頁)は誤謬である。通釋を本として説いてゐる書も又それを參考した人もお氣の毒ながら誤である。一字一句の解もゆるかせにしてはならぬ。春曙抄頭註がよろしい。清少などの心である。校註枕草子(明治書院昭和二年十二月改訂)の七十一段九二頁九行涼仲忠のところ、「何かは。琴なども天人下るばかり彈きていとわろき人なり。帝の御女やは得たる。」と清少が側の女房へ言つた仲忠の評(これを涼の評とするは採らぬ)は人の譽むるをも惡しといふ證據。又有名な逢坂の歌のところ同書一六八頁五行、段は百十七段にめでたき事など人のいひ傳へぬは云々、見苦しければ御文は云々。行成の評の通り「かう物思ひ知りていふが、なほ人々には似ず思ゆる」である。この心のねぢけが彼の女性の生命であつた。次に「はづかし」の解が大切である。自分に何か或るすきのある時ハツと感ずる刹那の情が本義で、語原は擬聲と思はれる。恥づと同じ原であらう。故に恐れ憚る主觀の情をいふ。「きまりがわるい」に當る。それが中古になつてから、優りたる人にいふ、客觀化したのである。自分を面はゆくさする客觀の物をいふ時にもつかはれた。しかしこの場合は「はづかしきあたり」「はづかしきけはひ」「はづかしきありさま」「はづかしげ」「はづかしき人」「はづかしきさま」等多くは連體語となつてゐる。本文のやうなのは、その意味でない。そこで二樣に用ひられたが、恐れ憚る意味は共通して居る。百六段「恥しきもの」を見ると明瞭にわかる。みそか盗人の例は奇拔である。「清少を心にくし」と解くのはどうかと思ふ。此の草子を見る人の「はづかし」と宣ふその人は、一般の人でない。多分此の草子に出てゐる人で、清少にはわかつてゐようが、文に表はれて居ないから、斷言ができぬ。或は齊信・行成・經房などでなからうか。これはその人が此の草子を見て恐れ憚つた主觀の情を表した語と解くべきである。原意で轉意では無い。此の解が曖昧な爲に「心の程こそおし量らるれ」の解が誤る。わしの心がねぢけゆゑ、「はづかし」と恐れ憚りなさると卑下自慢の深意味ふべきである。

【解説】　定子中宮樣に内大臣(伊周。中宮の御兄)が獻上なされてあつた紙の綴ぢたのを、中宮樣がお指し遊して、「これに何を書かう、主上には史記といふ書をお書きなされた」などと仰せられたのを「頂いて、手ばなさずに常住持つてゐます枕の草子にこそはしませう」と言上したので「それなら取らするぞ」と仰せになつて下賜されてあつたのを、故事や何やと、へんな事を限りなく多くある紙のありたけ書きつくさうとして、ふりかへり見たところが、なんだい甚だつまらぬ、正氣の沙汰とも覺えぬ事が澤山あるよ。大體この草子には、世間の趣ある事や人の結構だなど思ふ事を書き、なほもよく撰んで歌や木草鳥蟲をも加へたならば、それこそ、「思ふよりはわるい、心の程もわかつた。」と批評の價値標準に上つて譏られもしようが、實はさうでなくて、只自分の心に自然と思ひ浮ぶ事をなぐさみに書きつけたのだから、書きものの仲間入をして、他の相當な作品なみの批評を受ける筈がないと思つてゐたに、これを見る人が「自分がはづかしい氣がする」と仰せられるので、甚だ見やすく安心なことよ。ほんに「はづかし」と仰せられるのもご尤だよ。人のにくむのをよいといひ、譽めるのをわるいと反對にいふのは、さういふ人の、心のさまが推察できる。私も邪な心の一人だから、よむ人が恥しと仰せられるのです。ともかく何といつても、かくすつもり

なのが、人に見られたのが残念だよ。

【備考】　春曙抄傍註「是より此草紙書きし紙の由來をいふ也」とある。「枕にこそは」枕が非常に尊い意味に聞える。「こそは」の語氣に注意を要する。「何よりも枕に」といふ意である。恩賜の御衣今こゝにありの感がある。枕とはつねに身を離さぬもの、つねにもてあつかふものの義である。貞丈が「枕とは閨中を出でざる義なり」と說けるは從ひ難い。なんぼ親しいからとはいへ、君臣ではないか。君よりの頂戴物を閨中を出でざるものに使ふとは考へられぬ。これは後の武家時代に變じた枕の意で原義で無い。「あやしきを」佐々博士枕草紙選釋二三二頁に「を」を接續助詞の意に解し、變な事柄や考であるけれども述べられてあるが、探らないが良からう。「盡きせず」の句はすぐ下に係る。「思ふべき事」より「いひ出したらば」に係る。「なほえり出でて」は上を受けたので無くて、下に係る。「歌木草鳥蟲をもいひ出したらば」に係る。精選して歌や木草のことをいひ出すのである。春曙抄頭註に「今此さうしに書出たる外に、猶もよく撰みて歌などをも何をも書きて、物めかしくもつくりたらばこそと也」とある。「只心ひとつに」云々、此の册子の特色が短い文句の中によく表現されてゐる。「いとめやすくぞあるや」古本も流布本も「いとあやしくぞあるや」となつてゐる。意味をとるに何れでもよろしい。味としては、「めやすく」の方が良い。「げにそれもことわり」春曙抄傍註かさねて卑下也頭註彼恥しといふ人に對して尤との心也。いかにとなれば清少のやうに世にひがみて其の好惡人にたがへる物は其心中のよこしまなる事おしはかられて、物むつかしき物なれば、かへりて恥かしといへるも道理ぞと也。序に加へて置く、枕草子は春曙抄を基として研究するのが良いと思ふ。昭和二年高等教員試驗問題解釋の一題に枕草子二百四十三段「わろきものは」が出た。他の書物で調べた人は却つて誤を傳へられていけなかつた事實もある。枕の本文が確でないために春曙抄にも訂正すべき所や誤もある。例へば前にいつた本の二〇頁二行「ほど遠き目も放ちつべし」は「殆ど繼目も」と古本になつてゐる。秘閣のことです。その方がすらつと解ける。九〇頁六行「うへに語らば」では意味がこじつけになる。「うへにか、さらば」と古本になつてゐる。「上の局に居て留守か、そんなら」といふ意。その他解釋の誤もあるが比較的少い。だからこれを基本として研究するがよからう。

二、あぢさはふいもがめしばみずてしきたへの枕もまかずかにはまきつくれる舟にまかぢぬきわがこぎ來れば
あはぢのぬじまもすぎいなみづまからにのしまの島のまゆわぎへをみればあをやまのそことも見えずしら雲
もちへになりきぬこぎたむる浦のことどゆきかくる島のさきざきくまもおかずおもひぞわが來るたびのけ
ながみ

反歌三首

たまもかるからにの島にあさりするうにしもあれや家もはざらむ
しまがくりわがこぎ來ればともしかもやまとへのぼるまくまぬのふね
風吹けばなみかたたむとさもらふにつたの細江にうらがくれをり（過辛荷島時山部宿禰赤人作歌一首竝短歌）

【問題の見方】　萬葉の長歌を見るに、(一)枕詞の多いこと。是は五音の句が不足する必要上から生じたのである。(二)對句になつてゐること。これは歌謠祝詞と同じく聽覺に訴へる餘波である。あをやまのそこも見えず、しら雲もちへになりきぬ」「こぎたむる浦のことごと、ゆきかくる島のさきざき」情緒纏綿たるところで、一句で言ひ切るには情が強すぎる故である。(三)反歌と長歌との關係を見ること。反歌の一は長歌の「わぎへをみれば見えず、海上の白雲もちへになりきぬ。」その時海岸の鵜を見た詩經の興に當る實感。二は浦のことごと島のさきざき漕ぎ廻り行き隱る時に熊野式の船を見た興に當る實感。長歌の「くまもおかずおもひぞわが來る」のクライマックスに響くのである。三は長歌の終「旅のけながみ」に關係する。風を恐れ、風和を俟つ間に旅の日がいとゞ長く感ずるところ。(四)は中心思想を捉へること。長歌の中心思想は述べた通りである。反歌一は「うにしもあれや」この強い語氣を味へ。二「ともしかも」同樣に強い表現。「や」「かも」眞に味ふべきである。三「うらがくれをり」いかにも殘念なやうな語氣である。(五)は古語を摘解すること。

【古語の摘解】　「あぢさはふ」は「め」の枕詞。鶴といふ鳥が多くむれにかゝり、むれの約めにかゝる。「しば」しげく、屢々。「しきたへの」「枕」「袖」「床」などの枕詞。ねどこにしく布ですから、夜の衣にかけ、轉じて以上の夜具にかける。「しき」は動詞の連用形が熟語を作る語法。「かには。」白樺のこと。皮を船底にまいて腐蝕を防いだのだらうと、井上通泰博士萬葉集新考にいつてゐる。「まきまかず」調子を調べる爲である。「ぬじま」淡路の北端、岩屋の西に當る。當時は往來の客船が泊てた要津で海岸に古松群れたちて目印となつた。こゝから明石高砂を見わたして景色が良かつた。風浪の爲に後世に殘らぬ(大日本地名辭書七六七頁參照)いなみづま　印南の南にあつた島の名。今の高砂邊に昔あつたと見える。つまと清んで訓んで印南津島の「し」略と見るが適當であらう。下に「島のまゆ」とある所から考へると、二つの島の間から、我家いづくと青山縹渺白雲漠々を眺めたものらしい。からにの島　印南の一段と南方にあつたのが、風浪の爲に、今は無くなつたらしい。臆說ですが、韓の荷のつく島が皆「からにの島」だから、室にもありこゝにもあつたと思はれる。韓の船の破損は室に限つたわけでもあるまい。野島が昔の面影が無いやうに、印南津島の南の辛荷島も無くなつたのであるまいか。自分は姫路に十年住んでゐて、この邊は知つてゐる。萬葉新考に「この次に二句おちたるにぞあらむ」とあるは從ひ難い。反歌の順を考へても、東から西へ行くとして、飾磨のつたの細江は末尾になつてゐる。飾磨から綱干・室・赤穗といふ順だから、室では物にならぬ。「ゆ」は從、ゆり、又はより。わぎへ、我が家。わぎへんは大君來ませ云々。「しら雲」新考に白浪の誤かといへるのは從ひ難い。雲でこそ味がある、浪は平凡、平家にも「雲の浪」とある。「たむる」は回・迂・くねりめぐる。「くまもおかず」くまゝ〳〵洩れなくにの意。「くまもおちず」ともいふ。「けながみ」日の經るのが長さに。「あさり」淺を活かせた語、求めるのは海濱の淺いところを選ぶ。すなどる。古義では「しまみ」と訓せてある。訓のことは備考に讓る。「家もはさらむ」は「家お。もはさらむ」の「お」の略音。ともしかも「うらやましいことよ」くやしかもこゝしかも、終止形につくは古格。「さもらふに」うかゞふ爲にと解して置く。古義は「さもらひに」とよんでゐる。うらがくれをり「かくれ」は四段は古く下二段は當時としては新しい方。兩方の活用がある。古義は「がくり」とよむ。「がくれ」にても差支が無い。「を

り」は終止形。（實際試驗の時は、時間の都合で摘解斟酌せられたい）

【解説】　妻に離れ、枕もともにせず、樺をまいて造つた舟にかぢを貫いて、自分が海上遙か西へ〳〵と、漕ぎ來ると、あれ淡路のぬじまの松原も過ぎ、印南津島と辛荷の島と二つの島の間から、戀し我家を見ると、天界遙か青山のうちのどこぞいの、海上はる〳〵白雲の浪も隔てに隔てた。漕きめぐる浦のありたけ、行き隱れる島のさきざき、隈ももれず、古里を戀ひ偲びて自分が來るよ。旅の日數の久しさに

玉藻をかる、辛荷の島に、魚を求める鵜でまあ、自分があつてほしや、かうまで、しんきに家を思ひ惱むまいものを。

島を隱れて、漕ぎ來ると、うらやましいなあ、あれ戀しい大和へ漕ぎのぼる眞熊野式の舟が通るよ。

風がこの通り吹くので、浪が立つだらうと恐れて、なぎるのをまつ爲に、つたの細江に、うらがくれてをる。しんきなことよ。

謠曲羽衣の天女が雲を羨み、千鳥鷗の沖つ波、行くかかへるか春風の、空に吹くまでうらやましがつたのに似てゐる。上品な歌である。

【備考】　問題の本文はなるべく、世に流布した方を採る事になつてゐるさうな。それは全く、受驗者の爲を思つて下さつた深切からである。そこで萬葉は重に略解の本文によられるさうである。說はいくつも覺えるよりも、略解なり古義なり。一つしつかりやる方が良しい。高等敎員の方はさうはいかぬ。これは平易な問題で、あらゆる說を書かせ、其の批判力をも見るのですが、中等敎員の方は却つて問題がむつかしいが、ひと道を確にやればよろしい。「うにしもあれや」の「や」について契沖は願ふ詞にあらずといひ、略解古義ともに「あれかし」と說く。語氣から考へても後の方が良い。「しばみず」はどうもをかしい。直譯すると、「度々見ない」といふことだが、ちと變です。宣長は「妹が目かれて」と訓み、千蔭は「みずて」と訓み、妹目不數見而の數の字衍文かといつて居る。そこで止を得ず、上のやうに譯して置いた。

【問題】　左の文の要旨を擧げて簡單に說明せよ。（大正十年豫備）

無限に自分は生を渴望する。自分は人生に興味を失ひたく無い。人生の諸現象に興味を失つた人間には至上の藝術も何も語らず何も示すまい。自然も彼等には冷たく人も彼等には胸を閉ぢるだらう。いかにその人の生涯は寂しく狹苦しく冷たく過ぎるだらう。自分はさういふ人を多く見る。希望も愛も要求も無く老衰してゆく人を。彼等の行手には只死と暗黑との深淵があるのみ。ああ哀れな人々よ。ああこれ等の此世を捨てて去る人にも今一度足を停めさせてこの人生をふり返らせそこに無限に盡さない生の豐かな惠を味はせ感じさせるのは詩人の力ではなからうか。（現代詩人選集）

【問題の見方】　最も大切な語句を考へなさい。末尾にある「詩人の力」でせう。次に大切なのを考へなさい。「生」「人生に興味」「生の豐かな惠」でせう。それは「希望・愛・要求」を意味してゐる。

【解説】　要旨は詩人の力を説いたのである。人生に倦み疲れ、自然の美景も社會の現象も何等興味なく窮窟な潤の無い心の持主、それはたゞ死と暗黒とに急ぐ。さういふ人にも希望・愛・要求卽ち生の豐かな恵を味はせるのは詩人の力であるまいか。

【問題】　左の文の要旨を擧げて簡單に説明せよ。（大正十一年豫備）

藝術の尊いところは、絶えず魂を深め行くところにある。絶えず人間性そのものを大きくして行くところにある。新しくして行くところにある。魂の更に深いすがたが發見せられない時、私たちの藝術に倦怠が生れる。魂の更に新しい力が創造せられない時、藝術が通俗的なものとなつて來る。藝術家にとつて最も恐ろしいことは世間の要求を知らないことでなくて、自分自身の魂のすがたを見失ふことである。魂を更に深くして行く創造の苦惱を忘れる事である。藝術はいつも藝術家自身の魂のために存在するものでなければならぬ。新しい藝術を造り出すといふことは、新しい魂を見出すといふことである。更に新しい魂を、更に新しい人間性を創造するといふことである。（小鳥の來る日）

【解説】　要旨は藝術家の修養を説いたものである。魂を深めるといふことは、謙虚な自己を見詰めることであり、人間性を大きくし、新しくするとは、向上の一路に精進することである。即ち魂を更に深くして行く創造の努力である。五十にして四十九の非なるを知る日新の修養によつてのみ、藝術は尊くなる。倦怠から救はれる。通俗的に墮することから免れる。

【備考】　前のは千家元麿氏の口語詩、後のは吉田絃二郎氏の文である。吉田氏はその著「草光る」の中に「自分の藝術に腰をかける」（一九九頁）といふ句を用ひられてある。それは向上しない狀態を意味する。又同書に（一二九頁）次の如く示されてある。參考の爲に引用する。

神といふ意識や或はほんたうに人間らしい感じを持つことができるのは、大抵はこの上もなく醜い自分を見せつけられた場合である。利己的な憎惡に滿ちた嘘つきな自分自身を見出した刹那に人生の深みといふものがほんたうに疑問的ではあるが感じられる氣がする。藝術を生むこと藝術を味ふこともこの刹那の人生の深みを感ずるといふことに過ぎないのでないだらうか。

【問題】【解釋】（大正三年本試驗）

速須佐之男命ヨサシタマヘル國ヲ知ラサズテ八拳鬚ムナサキニ至ルマデ泣キイサチキ其ノ泣キタマフサマハ青山ヲ枯山ナス泣キカラシ海河ハコトゴトニ泣キ乾シキ萬ノ物ノワザハヒコト〴〵ニオコリキ。（古事記）

【問題の見方】　「泣キカラシ」「泣キ乾シキ」に目をつける。これは上古の幼稚な類推法である。樽でも栓を抜くと、水なり酒なりが出て虛になる。速須佐之男命の目からズン〴〵涙となつて水が出るので山も海河も水が空虛になつ

た。いかにも上古人の想像しさうなことである。三國幽眠暑解古訓古事記には「泣き給ふ涙の方へ吸ひとられて也」と說いてある。實に簡にして要を得た說明である。

【解說】　(イ)語釋「よさす」はゆだね給ふ意。「す」は敬語助動詞で、動詞の未然形につき四段に活用する上古の語法。「知らさ」のさも同じ語。「八拳髭」やつかひげとよむ。長い鬚の意。齡の成長し給へるを鬚で表す。古代は手を單位として長さを度つた。四本の指を「つか」といふ。「やは」「いや」の意、概數を示す。書紀一書曰の第六に素盞嗚尊年已長矣。復生二八握鬚髯一とある。「いさつ」古語いたく泣く意。谷川士清の書紀通證に足摩して泣くといはむが如し、小兒の慾り泣く時此の狀ありといつてあるが、「あしずり」は從ひ難い。涙をさめ〳〵と出して泣くといふ方適切である。本文にも青山を枯山なす云々とあり、哭泣(垂仁紀五年冬十月)啼泣(雄略紀十四年)哀泣(同上)其他泣沸・血泣とも書紀にあつて、皆泣の字が共通してゐる。泣は名詞のときは「なみだ」とよむ。涙のありたけを流して、之につぐに血を以つてする意、血泣は適當な宛字と思ふ。「あらぶる神」亂暴する神、惡い神。「おとなひ」ひゞき。訪問の意となるは中古文で、上古は音の意。「さばへなす」五月頃の蠅のやうに。「さ」は五月の意を示す接頭語。「なす」は「の如く」の意を表す接尾語。「ことごとに」悉ぐの古語。「悉く」とよまず「悉に」と訓むは古訓である。

【解說】　(ロ)通釋　須佐之男命は父上の御委任遊ばした國なる海原をお統治にならずに、長いお鬚が胸前に伸びる程に、御成長なされても矢張り、しく〳〵泣を流して啼いた。命の涙を出される有樣といつたら、それは〳〵大變なもので、青々と樹木の茂つた山も涙となつて水が渴れたので、枯山のやうに變り、海や河も水が涙に出てしまつて、乾ききつてしまつた。そこでわるい神がこの機につけ込んで亂暴するそのさわがしい響は、恰も五月蠅のやうに盛んに皆わき出で、惡神の外萬物の釀す惡しき事變がすつかり發生した。(結の對句は遒勁で面白い)

【備考】　上古物の解釋には語釋が大切である。だから解說の中に語釋を入れることにした。

【問題】【解釋】(大正二年本試驗)

安ミシヽ吾ガ大王神ナガラ神サビセスト芳野川タギツ河内ニ高殿ヲ高知リマシテノボリ立チ國見ヲスレバタヽナハル青垣山ノ山ツミノマツルミツギト春ベハ花カザシモチ秋タテバモミヂカザセリユフ川ノ神モ大ミケニ仕ヘ奉ルト上ツ瀨ニ鵜川ヲ立テ下ツ瀨ニサデサシワタス山川モヨリテツカフル神ノ御世カモ　(萬葉集)

【問題の見方】　本講師武島先生の仰せられた通り、主眼を捕捉しなさい。對句にいつたところを總收して歸結したところはどこです。「山川もよりてつかふる神の御世かも」でせう。前回に擧げた赤人の辛荷島の長歌に似て居ませう。收結が主眼です。神の御世と末尾にあるのは、初に帝德を神に比し奉つた首尾相照應です。全體の結構は帝の御德を神樣に比し奉り、(初四句)芳野に殿づくりし給ひ、(次の四句)眺望し給へば、(次の二句)獻修レ貢兮、川效レ珍兮。百姓は云ふも更、山神河伯も帝德に歸して仕へ奉る御世を譽め奉つたので、出雲國造神賀詞と相通ふ所がある。(代匠記參照)

【解説】　(イ)語釋　「安みしし」大君にかゝる枕詞。安く治め給ふ意。知らすの略を「しす」といふ。(足らすをたす、借らすをかす其他へす・いたすなど此の例)「し」は「す」の連用形。安といふ語幹に接尾語の「み」がつきて副詞となり、「知らす」につゞいたのである。眞淵や宣長の説をとらず、古義(第一册三六頁)による。「神ながら」神そのままにての意、「ながら」は名詞につきて副詞をつくる接尾語。「神さび」神すさび。み心進みて慰み給ふ意、代匠記による。古義の説とらず。この下に「を」を略す。「せす」爲給ふ意。「す」の未然形「せ」より敬語助動詞「す」につゞく。「高知り」高く造る。(代匠記)「たたなはる」たゝまる。かさなる。「青垣山」垣はたゞへ詞。垣のやうにめぐりをとりまいた青い山。「山つみ」山の神。「やまつもち」といふ眞淵の説、信じ難し。「みつゞと」「ゞと」はとしての意。古文には「ゞ」「に」の下に「て」「して」を略する例多し。「春べ」「へ」又「べ」接尾語。(うはべ・あゞべ・ゆふべ・よるべ・いにしへ・かたへはその例)そのむき。「春ばえ」の約といふ本居説採らず。春むきの意。「ゆふ川」仙覺いふ川の名也。詳しく備考にいふ。大みけ、食を「け」といふ。帝の供御にまゐる物。敬語の接頭語の「大」と「み」と二つ重ねて最敬の意を表す。平安朝になり、音便發生し「おほん」となる。「鵜川を立て」此は人のするわざなれど、河伯の許して鮎などを多く取らしむるを云ふ也。(代匠記)。「よりてつかふ」此の「よる」てふ詞の解、最も大切、疎にせられぬ。古文を解くにかういふ所へ力を入れべきです。古事記大國主神の幸魂奇魂の條に「この時海原を光して依り來る神あり」歸依の歸と代匠記に説くは最も良い。畧解や木村博士萬葉集美夫君志に天皇の御德に靡き依りてゞ説けるも次に良い。近寄る。慕ひ寄る。此の一語で帝の神ながらの御德が强く表はれる。「神の御世」神の德おはする帝の御代。帝德を稱歎し奉る、奉仕の大精神、「草も木もわが大君のみ代なれば」の信念。我が國民のすべてが永久に抱く思想を道破した人麿の生命も亦永久である。

【解説】　(ロ)通釋　安らかに御代を治め給ふわが持統天皇は、神そのまゝの御德をもち、御慰み遊ばすとして、芳野川のたぎり流れる内側の川ぞひに、御殿をお造らせになつて、それへのぼり、あたりを御覽になると幾重にも疊まつてゐる青垣山の神樣の献上する御調として、春のをりは花をかざし、秋になるゞ紅葉をかざしてゐます。又ゆふ川の神樣も同樣に、供御を奉るゞして、上の瀨に鵜川を催させ、下の瀨に小網をわたして魚を奉ります。かく山の神も川の神も御德に歸依して奉仕する現人神の御世の尊さよ。

【備考】　(イ)　試驗問題の本文は「さでさしわたし」と略解にあるを「さでさしわたす」と變へた外は、全く略解の本文によつてある。これは前回にも申した通り、受驗者の便を考へて下さつたのである。但し「ゆふ川の神も」の所は、「たゝなはる青垣山の山つみの」と相對した所で、山の方は或形容的修飾語をもつた普通名詞であるから、川の方もそれと調和する上からは仙覺のよみ方は從ひ難い。矢張澤瀉講師の説に從ひたい。よく上の山ゞ形容が相調和して良い。かういふことは備考として答案に書くことはわるい事でない。しかし其の他の本文は、なるべく改めない方が良いと思ふ。

【備考】　(ロ)「神さびは」心すさび・手すさみ・即ち進む意にとりました。「乙女さび」の乙女ぶりの意は尙ほ一轉した意と思ふ。これについては和訓栞「さび」の部(中六二頁上欄)を見て下さい。かいこゞではあるが古義に「の

ぼりたちは山の上へ騰りたちなり。上舒明天皇の大御歌に云々」とあるは從ひ難い。舒明天皇の御製は天乃香具山騰立であるから山へのぼる。それは自明の理。これは「高殿を高知りまして。てのぼりたち」である。「て」を何と見るか。山へ登るならば、高殿云々の句は死んでしまふ。殊に「て」が利かぬ。古人の解釋に文法を輕視するのは遺憾である。しかし「國見をすれば」を敬語が無いと怪んだ古義は卓見である。この反歌「ふなです。るかも」と代匠記になつてゐるのを、略解・古義には「ふなでせ。すかも」とかへてある。敬語をつかつてゐる。そこで「國見せすれば」の古義説に贊成いたしたいが、「すれ」の活用は語法にあはぬ。敬語の助動詞は四段に「さしすせ」と活用するから「國見をせせば」といふべきであらうと思ふ。

【問題】 叙事詩抒情詩劇詩の區別並に其の關係を説明せよ。（大正七年本試驗設問）

【問題の見方】 こゝで詩といふのは廣い意味であつて、形式が必ずしも韻文でなくとも、その表現の態度が興味中心で、物語る爲に物語つたもの等は之を詩の中に含める。即ち記錄の如き純粹の事實を記載したもので創作的態度でないものは之には含めないが、幾らか想像があり興味があるもの所謂詩的なものは散文でも、こゝでは詩と認める。次に此の問題を見るに、出來るだけ日本文學を主として取扱ひたい。又お互が國文學を研究するにも常に此の頭を以て概括し新しい何かを發見したい。

【備考】 兎角問題の解説などの缺點は、智識が斷片になるといふ事である。色々の瑣細な事まで知つてゐるが、智識が纏らない。頭が出來ない事である。獨學者にも此の缺點がある。學校出の者は比較的細かい事を知らないが、頭が多少出來かけてゐる。此の點はその人達の武器である。そこで私はなるべく纏つた智識にしたい、部分は必ず全體に結付けたい。誰やらがいつた、「ほんたうの智識は概念まで進まねばならぬ」その通り概括したい。此の精神で此の筆を執つてゐます。そこでさきに解説した古事記を以て叙事詩を代表させ、萬葉もて抒情詩を代表させるつもりで、此の問題をこゝで解説することにいたします。

【解説】 古事記と萬葉集とを比較するに、表現の態度が著しく異る。恰も人形扱と役者とのやうなものである。人形芝居の人形扱は常に人形の後に隱れてゐて、自分といふものが表に現れない。古事記には最初王化の本・皇統の源より、諾册二神天照太神素盞嗚尊大國主命等の御事業の後に太安萬侶が隱れてゐる、出雲國造神賀詞の中には出雲の祖先をよく言ひ過ぎてゐるが、安萬侶は自分の考や好惡を雜へない。これを文藝では「個性を沒して對象物を生かす」といひ又客觀的態度ともいひ、作品を客觀詩といふ。萬葉集は之に反し雄略天皇の御製をはじめ奉り、皆それ〴〵の心中の告白である。人麿の歌は國民の聲である。一種の民謠とも見られる。浦島子の歌にしても「おそやこの君」といふ感じが主で、叙事は豫備、祝詞の叙事的部分が讃美祈願の豫備であると同じく客觀的傾向に富んだ浦島子の歌ですら、嘲笑の主觀を告白せんがための豫備で、中心はやはり作者の感情である。個性を活かすとはこの事である。萬葉集では其の各個性の活々したところが見られる。後世のやうに類型に囚はれ無いのが長所である。主觀詩とはこの事である。枕草子と源氏物語とも同樣な觀察が出來る。一は清少の主觀が至る所に表れ、一は式部が物語の後にかく

れて、稀にしか主觀が表れぬ。日本外史の論文は前者で、叙事の長いところは後者である。平家物語と方丈記。前者にも祇園精舍など冥想的な觀念抒情詩の部分もあるが大體から見て客觀詩であり、後者にも饑饉火災の記事や閑居の記述等客觀詩の部分もあるが、これ亦大體から見て主觀詩である。世人結レ交須レ黄金、黄金不レ多交不レ深、縱令然諾暫相許、終是悠悠行路心、これは客觀詩のやうにも見えるが、その實は張謂が長安で旅宿の主人への不平だから、貫之の「人はいさ」の深刻なもので主觀詩である。

抒情詩とは主觀詩の總稱である。感情の分子が少くて知的な冥想詩や又意志の歌（例へば後鳥羽院のおどろの下の御製の如き）でも苟も作者の主觀が閃く詩をすべて抒情詩といふ。然し原始は純抒情詩で樂器リラに合せて歌つた事實は「リリツク」といふ語となつて存在してゐる。これは文學の最初をなす我國では諸册二尊の唱和より「八雲たつ」や「天なるや。」希臘では西紀前二千年に既に頌神歌（ヒム）といふ抒情詩があつて文學の初をなしてゐる。上古人の本能は鬪爭と戀愛である、一は個人の生きる爲、一は種族の生きる爲である。前者からは勞作歌即ち勞働の拍子として唄ふ田植歌臼挽歌石曳歌木遣歌さては馬子歌船歌西洋でも野に働く一團の人々の中や、工場などで絲を紡ぐ一群の間に於てリズムの爲に唄ふ。其他祭の行列歌酒宴の時の舞踏歌。三十三間堂柳の由來の中にも殘つてゐる。これ等は生活への鬪爭であるが、事件が小いだけに殘らぬ、文献に殘れるのは何といつても戰爭詩である。次に戀愛歌が發達した。大國主命の歌などは露骨であるが、人間の羞恥心が發達するにつれ、又風俗習慣が或程度まで醇化し、女性を尊重するに伴つて、眞の戀愛歌が生ずる。故に勞作歌戰爭詩の後に發達したものである。その勞働と戀愛と結付いたものは「山城の狛のあたりの瓜つくり」である。

抒情詩の生命は大體作者の感情といつてよい。智識や意思もあるが、それはずつと後世のことである。感情の原始なものは、團體共通の感情である。統一した感情である。分裂しない以前の感情である。非個人的性質のものである。この感情が民謠といふ形をもつて表れてゐる。教育上大切なのは此の種類である。スパルタの抒情詩は國家的民族的なもので合唱の形であつた。競技で精神の統一を圖つた其半の力は讃歌歌合唱歌行列歌であらう。ピンダロスの作は崇高雄偉な詩風だが斷片しか殘らないといふ。歷山大王がテーベに入つて、其の市を壞つた際に、特に彼の家を保存せしめたといふ逸話は、我國の細川幽齋に似てゐる。風教上さうあるべきことである。翻つて我國の祝詞や人麿の歌は國民全體の聲である。團體感情の民謠である。平安朝の上代民謠なる朗詠に比して著しく團體的である。感情が個々に分裂して後に、個人的抒情詩が生ずる。その最も著名なものは愛の歌で、ギリシアではサツフオに始り、英國ではエリサベス朝のソネツトに表れ、我が萬葉の短歌古今以下の選集は多くそれを内容とする。近松の時代物は武士といふ特殊團體の感情を取扱つたものである。文學は體驗から出發する。團體が個人に分裂した後、再び團體へ復歸しようとする所に、憧憬があり、尊皇精神がある。つひ興に乘じて問題以外に走つたが、同年の問題（設問）に「尊皇精神を内容とせる我が國の文學に就いて知れる所を記せ。」とある。序に解説して置く。これは團體感情を取扱つた作品と團體への復歸の作品とに着眼すれば良い。前者では、萬葉の長歌（人麿赤人家持等）祝詞宣命古事記日本書紀、是等は尊王精神の淵源を伺ふことが出來る。後者からは神皇正統記太平記吉野拾遺。德川時代に至り大日本

史・日本外史・日本政記及山陽の詩賦、淺見絅齋の靖獻遺言幕末志士の和歌漢詩、新葉集國學四大人の著書等に著眼すれば良い。

抒情詩は感情の詩、叙事詩は事件の詩、劇詩は動作の詩といはれてゐる。抒情詩は主觀的態度で、他の二つは客觀的態度の詩である。客觀的態度の詩の二つが如何に區別するか。事件はあとへ連續する、時間的である。動作は瞬間的である。すぐ消える。隨つて刺激を強烈にし、集中的平面的、繪畫的である。幕がパツト開くとパツクがすぐ一目してわかる。平面的であり、繪畫的である。觀客によくわからす爲に、刺激を一時的に強烈にする。對話でも出來るだけ短くする。說明する地の文がない。結果の斷面を示して、その道程を示さないのは劇詩である。叙事詩は漸進的に事件や周圍を徐々として說き、展開の徑路を明にする。隨つて長篇で挿話もある。對話でも長い。立體的、彫刻的、音樂的で時間的に進んでゆく所に面白味がある。能の道行のやうに、だんだん展開してゆく。初に「九重の雲居を出でてゆく月の」と謠ひ出して輪廓を與へ、雲煙縹渺百里の旅を徐々と思ひ出させる。これは叙事詩に似てゐる。英雄を主人公とした國民叙事詩から近代小說に至るまで、叙事詩に長篇物が多い。劇詩は登場人物の獨語や對話のうちに事件と性格とを知らせる。脚本はそれである。謠曲や淨瑠璃は叙事的劇詩である。

神への憧憬から英雄崇拜に移る。そこに頌神歌からホメロスの叙事詩となる。祝詞が古事記に進む。抒情詩が初で叙事詩が次に、劇詩は最も後に生ずる。しかしこれは便宜上の分類で、實際は密に相關してゐる。日本の叙事詩に抒情詩的部分の多い事は、物語に和歌があり、朗詠があるのでわかる。源氏物語の絕頂と思はれる所に大抵和歌がある。和歌だけ分離して考へると抒情詩である。「霜の後の夢」と須磨で朗吟した光の君も、昭君を假つて自分の情を告白したのである。劇詩の中に抒情詩を入れて成功したのは籠の鳥である。其の他阿波鳴戸の順禮歌、三十三間堂の和歌の浦シエキスピアの劇詩や近代の氣分劇例へばメーテルリングが抒情詩を劇に入れてゐる。ワグネルのミュージック・ドラマ、希臘のコーラスを思ふと、二者の關係が益々密である。次に叙事詩がいかに抒情詩に密であるか。祝詞でも人麿の挽歌でも皆叙事的抒情詩である。英國十四五世紀の頃に流行したバラツドも、抒情詩と叙事詩と結付いてゐる。その他歐洲各地方の田舍で流行したバラツド、早いのは抒情詩で、後には叙事詩にかはつた。概ね二つの合さつたものが多い。劇詩の中に叙事詩を含めるのは、太功記十段目、十次郎の戰況報告、所謂御注進は最も古い希臘劇の使者に似てゐる。玉三の金藤次が腹を切つてから懺悔をする所は叙事詩である。映畫劇は大抵逆叙法をとる。十年前はかうだと溯つて說く。能の方で間の狂言といふのがある。前シテと後シテとの間に狂言師が出て話すのはそれで、劇中の叙事的部分である。しかしあまり度を過ごすと劇が不純になつてよろしくない。又叙事詩の中にて劇に近いのは源氏物語帚木の雨夜の品定や孟子牽牛の章で對話の形になつてゐる。

【問題】 叙事詩の起原發達種類を說明せよ。（大正十四年高等教員試驗問題設問）

【解說】 起原、すべての事物は其の起原を說明すれば、その內容の半以上は判明するものであるが、叙事詩に於て特に然りとする。叙事詩の起原は英雄傳說を吟誦するにある。英雄と吟誦とは實に叙事詩發生の二大要素である。英

雄崇拜によつて叙事詩の内容が出來、吟誦によつて韻文といふその形式が定まつたのである。

叙事詩を産んだ當時の社會狀態を觀るに、英雄の社會である。英雄の活動は社會活動の全部である。英雄といふ超人にすべてが統一され、各の自意識がまだ發達し無かつた社會である。隨つて内觀せず客觀に向つて働く。英雄に驚異し、其の功業に歎美する。かくて生じたものは英雄傳説である。

我が國に琵琶法師が居て、平家を吟誦した如く、希臘や印度や伊太利や英國や其他の國で上古巡遊伶人が居て、英雄傳説の斷片を吟誦したのが事實である。その吟誦がバラツドで、其のバラツドが自然に集つて成つたものは國民叙事詩である。

古詩三千の中、三百餘篇を選み、絃歌したのが毛詩である。すると支那に於ても吟誦した事實は確實である。ホメロスの詩も紀元前七百年頃までは口で語り繼ぎ、然る後に全詩を集めて、文學として殘したものらしく、唱歌者と作家と一人で兼ねて居たのが、ホメロスであらう。彼の後は唯ホメロスを吟誦するのみを以て滿足し、ホメーリデーと稱したといふ話は吟誦についての有力な證據である。甚しい事は、タツソオの詩でさへも民衆によつて吟誦されたと謂はれてゐる。タツソオは十六世紀伊太利詩人である。此の時代に至るまでも、讀まれなくて吟誦されたといふことは早くから韻文の形が成立ち、而かも長い〳〵後まで韻文の形を持續せしめた所以である。

要之、驚異心が英雄傳説を作り、伶人が吟誦してバラツドとなる。それが集り成したのが叙事詩である。個人として自意識の發達し無かつた時代、思想内觀の未だ萌さない時に生じた叙事詩は英雄詩であり、客觀詩であり、事件詩であることは自明の理である。我が國の古事記はどういふものか、散文の形である。口誦したが吟誦しなかつたと思はれる。

發達種類　狹義の叙事詩は英雄詩から牧歌詩・宗教詩・史詩といふ發達を示し、廣義の叙事詩は小説をも加へる小説はロマンスよりノベルへと進む。尙ほ英雄詩はその内容によつて退治詩・漂流詩・鬪爭詩戀愛詩の四種となり、この通りの順に發達したものと考へられる。

叙事詩の最も初のものは極て神秘的な荒唐無稽の退治詩である。英國の國民叙事詩なるビオウルフ物語はそれである。我が國では纏つたものが無いが、素盞嗚尊の大蛇退治、謠曲の紅葉狩の材料となつた平維茂や、羅生門の綱、又大江山の鬼退治等がある。英雄詩の第二次は冒險漂流の内容をもつたもの、ホメロスのオデイセイは之に屬する。浦島物語にも古事記の海幸山幸にも多少海の匂があるが、全體の基調を形成してゐない。第三次に發達したのは種族と種族との鬪爭を内容とする叙事詩である。古事記の黄泉軍物語はこの萠芽と目すべく、印度のマハーバーラタ、佛のローランド物語、獨のヒルデブラントの歌イリアツド皆之に屬する。平家物語等も鬪爭詩と宗教詩と戀愛詩とで織成したものである。第四次に發達したのは、英雄の私的一面としての戀愛詩である。アーサー王の物語。テニスンが四十餘年の心血を注いで、一篇十二卷の叙事詩に作りあげた王の牧歌はミルトン以後の大作といふ。以上は英雄詩であるが、戀愛は英雄のみの特權物で無い。英雄から離れて、戀愛其物を取扱ふやうになつた。古事記の秋山の下氷壯夫と春山の霞壯夫との話。カンタベリー物語の武士の語つた話。二人の若者と若い麗人、風日和かな日本の話は藤の花の

やう、北歐のは凄味がある。一は決勝を麗人の審美心に訴へる點などどこまでも優美であり、初から闘はない、且つ婦人の意思を尊んでゐる。一は決闘をやり斃れて死ぬる際に敵の幸福を祈るなどは基督教的である。萬葉十六少女櫻兒の話、卷九うなゐ處女や手兒名の話。總稱して牧歌といふ。牧歌とは田園の牧羊者の戀愛を描き、そこには純な牧羊者や田園の風光の中から古代の理想的生活が髣髴する。希臘のテオクリトスは最古の牧歌詩人として名高い。

牧歌詩に次いで出現したのは宗教詩で、神曲と失樂園とはその代表作品である。史詩は東洋に多い。諷刺詩寓意詩は狹義叙事詩の殿をなし、抒情詩への橋である。

狹義の叙事詩エポスの外に、小說をも加へて、廣義の叙事詩とする。小說は散文である。この區別は主な點であるが、尙ほ內容の相違をいへば、エポスは傳說口碑より材料をとる。人生を叙するにしても傳說口碑の霧を隔てた人生である。今一つ事件を主としてゐる。外的描寫とでもいへよう。小說は內的描寫をなすこれにロマンスとノベルとの二つがある。又人によりては短篇を加へて三つとする向もある。

作爲空想異常冒險の代名詞なるロマンスは、もと古いフランス語やプロバンス語、換言すればローマ支配下の地方語で書いた散文をいつたものである。當時ラテン語が流行したので、ラテンゴに對して唱へたのが、抑ものはじまりであつた。それがナイトの生活を寫してから傳奇小說の意味となつた。その特徵は主人公の性格の發展を描くと共に、時代相が反映してゐるから、當時の文化がわかる。筋が大きくて長篇である。スコツトの歷史小說は其の例で最近代のスチブンソンに脈を引いてゐる。

ノベルはエリサベス時代の文學者例へばシドニーなどが伊太利のボツカシオ及びその派を模倣し始めた時に、英文學史上に表れた名で、新といふ意味である。デカメロンを模型とする。特徵は筋が小く中心を鮮明に描く焦點を作つて結末まで緩みを見せない。興味のある塊合だけを描いて枝葉は略する。集注的で寫實的で劇詩に似た點がある。人情のデリケートな描寫が見られるが、時代精神などがとても見られない。英國ではバメラからトムジョンと世人もこれらに飽いたと見えて、スコツトのアイバンホーなるロマンスが歡迎された。日本では反對に坪內逍遙博士によつてロマンスを排してノベルを唱へる說が起つた。世はいろいろ。源氏物語はノベルだなど說く人があるが、ロマンスに近いやうに思はれる。第一長篇である。第二時代の文化は反映してゐる。源氏の寫實小說たる疑點は第一作中の人物に親の無い子が多い。實際あゝも親を亡くした子があるものでない。第二に印象の筆致が大分ある。例へば葵の卷の齋院御禊の行列にしても、寫實ならば、今少し大納言中納言などの勅使を說明せねばならぬ。「かん達部など數定りて」云々僅一行だけで、源氏の立派なことを强く描く爲に他のすべてを犧牲にしてゐる。第三に類型なことが多い。「かきのぞき」は帚木にも若紫にも野分にも橋姬にもある。夕顏の卷と總角の卷の匂宮が中君をつれて緣近へ出る所は、同じ型である。夕霧を避ける落葉と薫から遠ざからうとする大君とが似てゐる。第四に作爲のあとが見える。頭中將の愛してゐた夕顏に源氏がひつかゝる。しかも品定に話まで聽いてゐたその夕顏に關係する　は作爲でなくて何であらう。明石の伏線に若紫に明石の話を良淸にさせてゐる。首尾とか伏線とかいふものは、寫實で無い證據、西鶴などにこんな用意が無い。第五に傳說や說話を頭に置いて書いたと思はれる所がかなり多い。夕顏の卷の物怪は古事談にあ

る所を見ると、當時さういふ話があつたものと見える。須磨の巻の菅公や周公旦。桐壺その他の白樂天や楊貴妃は言はずもがな。此の外世間話をきいて書く態度を裝ひながら、相當主觀を所々に句はせてゐるところなど、ロマンスに近いと思ふ。しかしこれは源氏物語のよいわるいとは別である。

文法に關する解説（續）

文章法の解剖

夕さり大納言斬られ候はんに於ては、成經生きても何にかし候ふべきなれば唯一所で如何にもなるやうに申してたばせ給ふべうもや候ふらん

（二十七回大正二年本試驗）

【見方】　動詞形容詞で述語となり得る語を求める。(イ)斬られ候はん(ロ)生きても(ハ)し候ふべき(ニ)なる(ホ)申してたばせ給ふべうもや候ふらん。以上五箇である。次に各の主語を考へる。(イ)大納言(ロ)(ハ)(ニ)は共同主語で成經。(ホ)の主語を誤らないことが大切である。文中に表れて居ないから、之を補つて「御身」とする。次に省略が此の外に無いかを調べる。「申す」といふ語は、意味上何を何にと二つの客語を要するから、此の場合一つの客語が省かれてゐる。補へば「清盛公」にとすべきである。

【解説】

副修語 夕さり　主語 大納言　述語 斬られ候はん　副修句

「に於て」を従へて「生きても何にかし候ふべき」に係る

主語 成經　副修語 生きても　副修連語 何にかし候ふべきなれ　ば

副修語 唯　副修連語 (父と)一所で　客語 如何にも　述語 なる　形修句

「やう」といふ客語に係る

主語 御身　客語 やうに　客語 清盛公に　申してたばせ給ふべうもや候ふらん　述語　複文

【備考】　従屬的地位に立つ助詞「ば」は原因又は理由を述べる意味で、多く副修語又は同樣の連語・句の下に來る。「に於ては」は「には」の少しく強いだけの意味だから従屬的地位に置いた。

此の者さして猛き者とは見えず思ふに狐狸のしわざにてぞあるらんこれを射も殺し斬りも止めたらんはむげに念なからまし同じくは生擒にせん

（二十九回大正四年本試驗）

【方見】　「念なし」は一語で形容詞。故に「念」は主語「なし」は述語として取扱はずに置く。例によつて、述語を調べる。(イ)見えず(ロ)思ふ(ハ)あらん(ニ)射も殺し斬りも止めたらん(ホ)念なからまし(ヘ)せん以上六箇。それ等の主語を考へる(イ)此の者(ロ)我(ハ)省略文中に表れず「これ」を補ふ。(ニ)我省略を補ふ。(ホ)「我之を射も殺し斬りも止めたらん」といふ

句は主語となる。（へ）我省略を補ふ。

【解説】

此の者〔主語〕　さして〔副修語〕　猛き者とは〔客語〕　見えず〔述語〕　副修句

「狐狸のしわざにてぞあるらん」に係る。

我〔主語〕　之を〔客語〕　思ふに〔述語〕　副修句　狐狸云々に係る。

これ〔主語〕　形修語〔狐狸〕の〔客語〕〔しわざ〕にぞあるらん〔述語〕

意味はなほ下に續くが、形式はこれで、ひと先づ切れるから、以上を以て文とし、複文と定める。

我〔主語〕　これ〔客語〕を　射も殺し斬りも止めたらん〔述語〕　主語となる句

「は」を從へて　述語「念なからまし」の主語。　複文

同じく〔副修語〕は　我〔主語〕　之〔客語〕を　生擒〔客語〕に　せん〔述語〕　單文

【備考】　助詞の觀察は文章篇では極て肝要である。一つは意味を考へ、一つは助詞を觀察して、主格、客格、形修、副修格を決定するのである。これについて、次の注意を示して置く。

一、口語「が」の意味になる助詞は主語の下に立つ。又「が」を省略する場合が多いから、主語をきめるには「が」の上にその語を置いて考へよ。意味に無理が無いなら、主語と定めてよい。句の中では特に、「の」が多く使はれ、其他一般に

は　も　ぞ　こそ　のみ　ばかり　だに　すら

等の助詞で「が」の意味に使はれた場合は、其の上を主語と見て良い。

二、格助詞中左のものは客語につく場合が多い。

を　に　く　と　より　から　まで

勿論補語・客語を總稱して客語と見たのである。

三、接續助詞のついた語・連語・句は副修と定めて大過が無い。但し「て」は他につく場合もある。其のことは適例の出たところで述べよう。

て　つつ　ながら　ど　ども　と　とも　を　に　が　も

及び副詞の語尾として用ひられた「に」「と」例へば「靜に」「嵯々と」であるが、最も多いのは「は」である。

五月雨の短夜に寢さめをしていかで人より先に聞かんと待たれて夜深く打出でたる郭公の聲のらう〳〵じう愛敬づきたるいみじう心あくがれせんかたなし　（三十一回大正六年本試驗）

【見方】　述語を調べる。(イ)し(ロ)聞かん(ハ)待たれ(ニ)深く(ホ)打出でたる(ヘ)愛敬づきたる(ト)あくがれ(チ)せんかたなし。以上八箇。主語は(イ)(ロ)(ハ)共同主語「我」。(ニ)夜(ホ)この主語は下に来てゐる「郭公の聲」であるから、「打出でたる」は主語になり得ずして、形修となる。(ヘ)郭公の聲(ト)心(チ)「五月雨の短夜に」より「愛敬づきたる」までを主語とする。

【解説】

我〕主語　〔五月雨の短夜に寝さめし〕で。副修連語

〔いかで人より先に聞かん〕と。客語(連語より成る)　〔待たれ〕で。連語　副修句

「夜深く打出でたる」に係る。

〔夜深く〕副修句　主語　連語　〔打出でたる〕形修語

〔郭公の〕主語　形修語　聲の主語

〔らうらうとう〕副修語　〔愛敬づきたる〕連語

以上句よりなる主語でその述語「はせんかたなし」である。

〔いみじう〕副修語　〔心あくがれ〕副修句　主語　連語　〔せん方なし〕連語　複文

【備考】　句の中で主語の下に特に「の」が多く使はれると前にいつた。その例は、「郭公の聲」の下にある「の」を見よ。

接續助詞「て」二つ副修の下についた例。格助詞「と」が客語の下についた例もある。「愛敬づきたる」の下に、口語「のが」文語「は」を省いたのである。故に其の「は」の上は、主語である。

「らうらうとう」と「愛敬づきたる」とは中古文の解としては並列に見て「郭公の聲が美樣であつて、しかも愛敬づいたのは」と解き、「らうらうとう」を述語に見ても良い。せんかたなしは一語であるから、「せんかた」は主語「なし」は述語として取扱はない。

> 乳母のうまの命婦「翁丸」いづら命婦のおもと来すばくゝ」といふにまことかとてしれもの走りかゝりたればおびえまどひて御簾のうちに入りぬ　(三十二回大正七年本試驗)

【見方】　述語(イ)「いづら」の下述語省略「ある」を補ふ。(ロ)来す(ハ)くゝ(ニ)いふ(ホ)「ニて」の間に述語省略「思ひ」を補ふ。(ヘ)走りかゝりたれ(ト)おびえまどひ(チ)入りぬ。以上八箇の中で、(イ)翁丸(ロ)命婦のおもと(ハ)汝(主語)之(客語)省略(ニ)うまの命婦(ホ)「思ひ」の主語は下の「しれもの」。客語の省略「之」。「しれものこれを誠かと思ひて走りかゝり」の意「まことかとて」を強くする必要上、先にいふそれ故「思ひ」は省略の儘、副修語として取扱ふ。(ヘ)しれもの(ト)(チ)共同主語命婦のおもと。

【解説】

乳母の〔形修語〕　うまの命婦〔主語〕　いふ〔述語〕　に　副修句「まことかと」に係る

翁丸〔主語〕　いづら〔客語〕　に　ある〔述語〕　「食へ」に係る副修句。

命婦のおもと（主語）　こゝ〔客語〕　に　来ず〔述語〕ば　「食へ」に係る副修句。

汝〔主語〕　これ〔客語〕　を　食へ〔述語〕と　客語（句より成る）述語は「いふ」で、主語は「うまの命婦」である。

まことかと（副修語）　て　しれもの〔主語〕　走りかゝりたれ（述語）　ば　副修句

「おびえまどひて御簾の中に入りぬ」に係る。

命婦のおもと（主語）　おびえまどひ（副修連語）　て　御簾のうち（客語）　に　入りぬ〔述語〕

なき跡まで人の胸あくまにかりける人の御おぼえかなとぞ弘徽殿などには猶ゆるしなうのたまひける（三十三回大正八年本試験）

【見方】　述語（イ）あくまにかりける（ロ）御おぼえかな（ハ）のたまひける。主語（イ）胸（ロ）主語省略、之を補へば、この前文「御方々の御宿直なども絶えてし給はず、たゞ涙にひぢて明し暮させ給へば、見奉る人さへ露けき秋なり」を受く。桐壺の帝をかく悲ませ奉ることで、「それ」として置く。（ハ）弘徽殿など。

【解説】　複文

なき跡〔副修語〕　まで　人の胸〔主部〕（形修語―主語）　あくまにかりける（述語）　形修句「人の御おぼえ」に係る。

それ〔主語〕　は　人の御おぼえかな（述語）　こそ、客語（句より成る）

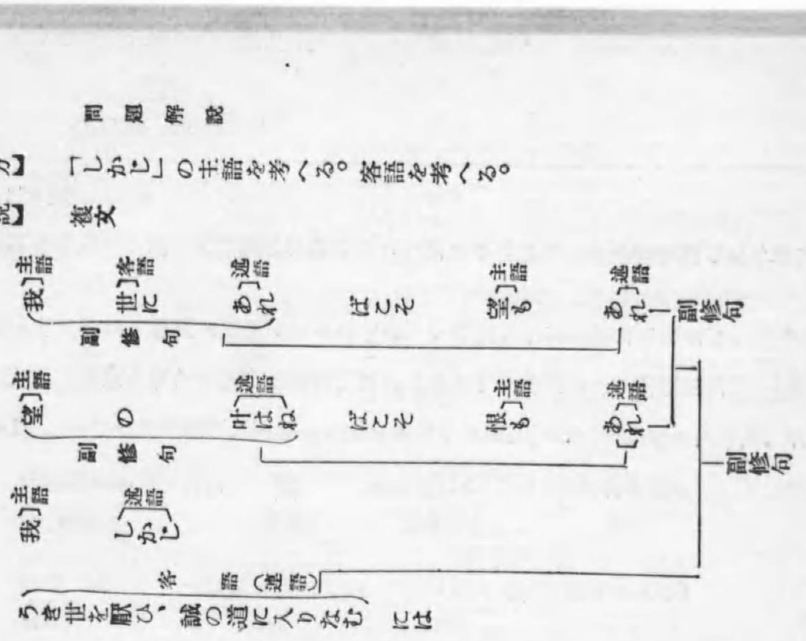
弘徽殿など（主語）　には　猶〔副修語〕　ゆるしなう（副修語）　のたまひける（述語）

【備考】　上の人は弘徽殿、下の人は桐壺更衣である。「なき」を述語とすれば、その主語は「人の御おぼえ」の人であるから、（桐壺に対する帝の御寵愛の意）、「なき」を述語として取扱はない。「御おぼえ」の下「なる」を省けるが、「なるかな」は助動詞と助詞とであるから、それだけでは述語になれない。上の名詞と合せて述語とする。

世にあればこそ望もあれ望の叶はねばこそ恨もあれしからき世を厭ひ誠の道に入りなむには（三十八回大正十二年本）

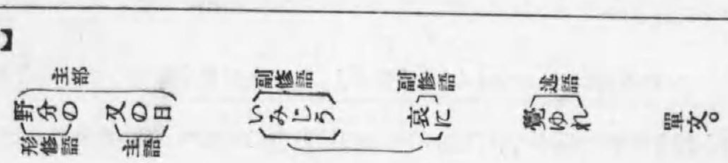
【見方】　「しかと」の主語を考へる。客語を考へる。

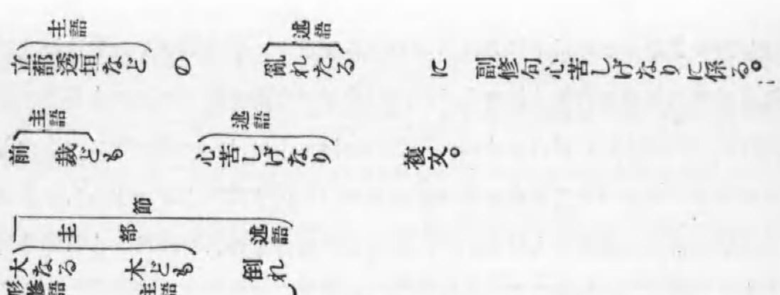
【解説】　複文



野分の又の日こそいみじう哀に覺ゆれ立蔀透垣などの亂れたるに前栽ども心苦しげなり大なる木ども倒れ、枝など吹き折られたるが萩女郎花などの上によろぼひはひ伏せるいと思はずなり　（四十五回大正十五年度講習）

【解説】





【演習題】　試に左に二三示しますから、御自分で解説して下さい。

（一）、見しはなくあるは悲しき世のはてを

そむきしかひもなく〳〵ぞふる　（源氏須磨藤壺の歌）

（二）、ひきつれて葵かざししそのかみを
思へばつらしかものみづがき　（同上右近の歌）

（三）、夕されば野べの秋風身にしみて
鶉なくなり深草の里

（四）、君もかくうらなくたゆめて、はひかくれなば、いづくをはかりと、われもたづねむと、思しよる。（博文館源氏八〇頁夕顔巻）

（五）、三日といふに歸るに雨のいみじう降りしかば菖蒲刈るとて笠のいと小さきを着て、脛いと高き男童などのあるも、屏風の繪にいとよく似たり　（枕九十七段）

源氏物語より出でたる問題の解説

大方の世につけて見るには咎なきも我が物とうち頼むべきを選ばむに多かる中にもえなむ思ひ定むまじかりける男の公につかうまつりはかばかしき世のかためとなるべきも誠のうつはものとなるべきを取出さむには難かるべしかしされど賢しとても一人二人世の中をまつりごちしるべきならねば上は下に助けられ下は上に靡きて事廣きにゆづらふらむ狹き家のうちの主人とすべき人一人を思ひめぐらすに足らはで惡かるべき大事どもなむかたがた多かるとあればかゝりあふさきるさにて斜にさてもありぬべき人の少きをすきずきしき心のすさびにて人の有樣をあまた見合せむのこのみならねど偏に思ひ定むべきよるべこすばかりに同じくは我が力いりをし直しひきつくろふべき所なく心に叶ふやうもやと選りそめつる人の定り難きなるべし　（明治二十六年即ち第六回檢定試驗問題）

【問題の見方】　本文の初に「思ひ定むまじかりけるとあつて次には男の事をいつてある。即ち事柄はそこで變つてをることに氣がつくであらう。主意は大概さういふ終の所にある。纏めていつた所に主意がある。それから最後の「人の定り難きなるべし」と首尾相應じてゐる。そこで「妻とすべき人を定めにくい」といふ主意になる。主意がわかつたから、次に文脈を考へる。「大方の世につけて見る」は客で、「我が物とうち頼むべきを」は主で主客法を用ひたのである。主を強く腦裡に印象せしめんが爲に、豫備こして客を使つたのである。男の話はやはり客で「狹き家のうち」云々は主である。「足らはで惡しかるべき大事どもなむかたがた多かる」や「斜にさてもありぬべき人の少き」は大切なところである。國の政をするよりも家の務の方がむつかしいといふことをいつて、主婦の人物難に論鋒を進めたのである。「偏に思ひ定むべきよるべと、すばかりに心に叶ふやうもやと選る」となか〳〵人がない。これが文の脈で、帚木雨夜の品定、馬の頭の詞として紫式部の主觀を示したところである。（萩原廣道評釋一四四頁博文館源氏二六頁有朋堂源氏一の四一頁九行より四二頁七行まで。）主意や文脈を明かに胸に描いて口譯するのと、たゞ漫然と口譯するのと結果に於て、餘程ちがふ。叙事文でもさうである。まして議論文はなほ更である。

【解説】　ひと通りの交際をするには、難の無い女でも、それをいよいよ我が妻と頼まうとするその人を選ぶには、

澤山な女の中からも、思ひきめられないものですよ。男も同樣で、朝廷に仕官し、しつかりした、國の柱石となる人も、ほんたうの人物とならうのを、選り出すのはむつかしからうさ。ですが、賢いからとて一人や二人で天下を治めることができないから、上は下に助けられ、下は上の差圖に從つて、事務が廣大な故に、一人が出來なくても、他に讓つて融通がつかう。だから至難でも無い。之に比べて、狹い一家の主婦とすべき女一人をいろ〳〵考へるに、これは他に讓つて濟すわけにゆかぬ。主婦が必ずしなければならぬ。だから具備しなくては都合のわるい大切な條件が、あれやこれやと澤山ある。その條件の兎角揃つたのがないもので、一方があゝあれば、一方はかう、左がよければ右はわるくて、まあ、ゆがみなりに我慢のできさうな女が少いものですから、この人ならと一づに思ひきめたるたよりどころにする位に、氣に入る女もあればよいがと、實はその、うはき心のなぐさみで、女の有樣をあまた見較べるものずきではないが、できることなら、自分の力で撓め直す缺點もなく、氣に入る女をと選り始めたのが、きまりにくいのでございませう。

【備考】　「大方」關係の淺い意につかふ。雅言集覽には三頁に亘つて用例を示してある。（千四百頁參照）込み入つた關係のあるのに對照して、普通とほりいつぺんの意味と心得てよい。　○世　男女の間。　○見る　觀察の意味でない交る意である。　○咎なきも　「咎はない」がといふ意味でない。「も」を接續助詞につかふのは後世のことで、平安朝では上に名詞を省いたと見るべきで、「女も」の意と解いた。　○べし　必然の意の時は省いて譯した。　○「思ひ定むまじかりける」ける　は詠歎の助動詞で過去の意味がない。○人の少きを「を」は接續助詞。逆接の意味につかふ場合が多いけれども、必ずしも皆さうとも限らぬ。こゝは順接「少いので」の意。「すくないものですから」と譯した。こゝより「同じくは」へかゝる。（玉の小櫛の說）。　○心に叶ふやうもや　この下「あらん」を省く。○挿入句が多いので、順序を換へて譯した方が、わかりよからうと思つて、さうしました。又補足して譯した部分は右側に黑點をつけて置きましたから、そのつもりで御覽下さい。

歌よむと思へる人のやがて歌にまつはれをかしきふるごとをも初よりとりこみつゝすさまじきをり〳〵詠みかけたるこそ物しきことなれ返しせねばなさけなしえせざらむ人ははしたなからむさるべき節會などさつきの節に急ぎ參るあした何のあやめも思ひしづめられぬにえならぬ根をひきかけ九日の宴にまづ難き詩の心を思ひめぐらし暇なき折に菊の露をかこちよせなどやうのつきなきいとなみに合せさならでもおのづからげに後に思へばをかしくもあはれにもあんべかりけることのその折につきなく目にもとまらぬなどを推し量らず詠み出でたるなか〳〵心おくれて見ゆ　（明治四十四年即ち第二十五回本試驗。明治二十九年即ち第九回。明治二十四年即ち第五回試驗問題）

【問題の見方】　本居翁が「これは歌の事をいふにはあらず、消息文の事をいへるなれば、消息文の敎とはいひもすべし」といつて、細流の說を改めたのは良くない。消息文のことは此の前でをはり、こゝから歌のことである。「物しきことなれ」は主意で、その前は「物しきこと」の內容を說明し、氣障りな不自然な歌を不調和な折に詠みかけ

るのはよくないといふことである。つきづきし卽ち調和といふことは王朝趣味の基調で、歌といふよい物でも、その折が似合しくないと却つてわるいといふ意味である。「返しせねば」以下は「ものしきことなれ」の理由を說明し、「節會など」以下はつきなき折を主として述べて、「つきなきいとなみにあはせ」又「その折につきなく」と字眼「つきなく」を二回點出して、結末「心おくれて見ゆ」に導いたのである。

【解說】　歌をよくよむと自分で思つてゐる人が、すぐにその自負せる歌に囚はれ、おもしろい古歌をも初句からよみこんで、似つかはしからぬ折に詠みかけたのは、何よりもいかゞはしい氣ざはりなものである。その返歌をしなければ風情がない。又得しない人は手持無沙汰で不都合だらう。相當な節會、例へば五月五日、あやめの節に、急ぎ參內する朝、何の分別もなく、心の落付かない時に、ひと通りならぬあやめの根によそへた歌をよみかけ、九月九日の宴に、何物もさて置き、まづ歌よりもむつかしいその日の詩の趣向に、考を凝らして暇の無い折に、菊の露に託した歌をよこすなど、そのやうな似合しくない骨折をさせ、（詩を考へてゐる折で、他へは心を散らしにくいのに、返歌をしなければならぬ。つきなき營みとは此の事で、前の「返しせねば」云々の首尾。五月五日あやめの根をひきかけにもかゝる。）さやうにせつかちにその日でなくても、おのづから靜かに後に思ふと、なるほどと感じ深くもある筈の歌が、忙しい折には、その場合似合しくなくて、目にもとまらぬことを、慮らないで詠み出したのは、氣が利いたどころか否かへつてまがぬけたやうに思はれる。

【備考】　「ふるごと」は古歌の意。枕草子二十段「月も日もかはりゆけどもひさにふる三室の山の」といふ古言をゆるらかにうち詠み出たし云々。　○あやめ・菊　その日のゆかり。　○さならでもおのづから　後に思へばと二つを合せて各から「をかしくもあはれにも」に係ると說く玉の小櫛の說を採らぬ。　○こと　歌。　○本問題は帚木雨夜の品定をはりの方。評釋一九〇頁博文館源氏四三頁。有朋堂源氏六九頁。第九回の問題は

> 萬の事になどかはさてもと覺ゆる折から時々思ひわかぬばかりの心にてはよしばみなさけ立たざらむなむめやすかるべき

といふ文がこの次についてある。これは前の結（むすび）であるから、問題のをはりにある方一層、受驗者からいふと、好都合である。

【解說】　萬事に於て、どうしてかういふことをしようか、そのままにしなくてよいと思はれる折からや時機を分別できない程の、機轉の利かない心の持主では、樣子ぶつたり情知り顏をしないのが見安からう。歌などを詠まない方が無難だらう。十訓抄第一の四十二（校註十訓抄五一頁）に反對の話がある。大二條殿（敎通）が急參し給ふ時、ある女房の心なく呼びよせて、歌をよみかけたるに、近利といふ舍人が機轉を利かしたる話。これは良い例で「さやうにいそがしげならむ時には、人に歌などよみかくまじきなり」と十訓抄には結んである。第五回の問題はずつと長くて、「すべて男も女もわろものは僅に知れる方の事を殘なく」云々より「すべて心に知れらむ事をも、知らず顏にもてなし、言はまほしからむ事をも一つ二つのふしは過（すぐ）すべくなむあんべかりけるまで出てゐる。試みに御自分で解說して見なさい。

御車もいたうやつし給へり前もおはせ給はず誰とか知らむとうち解けて少しさしのぞき給へれば門は蔀のやうなるを押しあけたる見いれの程なく物はかなき住居をあはれにいづこかさしてと思ほしなせば玉のうてなも同じことなりきりかけだつ物にいと青やかなる葛の心地よげにはひかかれるに白き花ぞおのれひとり笑の眉ひらけたるをちかた人に物申すとひとりごち給ふを御隨身つい居てかの白くさけるをなむ夕顔と申し侍る花の名は人めきてかう怪しき垣根になむ咲き侍りけると申すげにいと小家がちにむつかしげなるわたりのこのもかのもあやしう打ちよろぼひてむねむねしからぬ軒のつまごとにはひまつはれたるをくちをしの花のちぎりや一房折りて參れとのたまへばこのおしあけたる門に入りて折る　（明治四十一年第二十二回本試驗）

【問題の見方】　「物はかなきすまひを――玉のうてなも同じことなり」これは常に金殿玉樓の住居せられる光君が、微行の途次、夕顔の上の寓居を見て生じた感想である。次に「口惜しの花の契や、一房折りて參れ」は夕顔の花に對する感想で、此の二つの主觀の所をしつかり解説すれば良い。その他は客觀の叙事で平易な問題である。（評釋二五一頁博文館源氏六九頁、有朋堂源氏一一〇頁）

【解説】　御微行のこととて、源氏の君は、御車もひどく粗末なのに召して居なされた。（女房等も乘る網代車をお用ひと見える。）三位中將であるから普通なら御先驅もあるべきだが今日は至極の御微行とて先拂もおさせなさらない。で誰とも知るまいと氣を許されて、車の物見から一寸のぞいて見られた。すると門は蔀のやうな戸をあけてある。そこを見通しの奥も淺く、お粗末なあはれ果敢ない住居を御覽になつて、無差別の感想に打たれ、あゝ世の中はどことといつてわが物ときめようか、一切平等だ、宮もわらやも同じことだと觀ぜられると、此の住居も玉の臺も同じことだ。板圍に大層青々とした蔓草が氣持よく匍ひかゝつて、それに眞白な花が、周圍の荒廢を知らず顔に自分だけ咲き誇つてゐる。「そこに白く咲けるは何の花ぞも」と古歌を利用して口吟されるのを、御隨身がお前に跪いて、「あの白く咲いてゐるのを、まあ、夕顔と申します。花の名は人めいて、御覽の通りのみすぼらしい・へんな垣根に咲くものでございます」と申上げる。なるほど「あやしい垣根」と御隨身の言つた通り、小家がちで、大層むさくろしさうな塲末の、あちもこちも、へんにひよろついて、しつかりしない軒の端毎に、はひついて居るのを御覽になつて「薄運の花だな、一房折つて來い」と仰せられるので、隨身は直前の開いてゐる門に入つて折る。

【備考】　眞淵新釋三位已上の人は必ず先おはする也とある。源氏の君は紅葉賀で十八歳の十月に正三位と見えるから、この時は從三位の中將と思はれる。河海抄に「昔は内々のありきにも先を追ひけりといふ、用心のためなり。變化のものも先の聲に恐るるなどいへり。西宮左大臣神泉苑の長角にて變化のものに、あはれけるにも、さきの聲する時は、ひき入りけるとあり。これはことさらしのびやつしたればさきもおはずと云ふ也（國文註釋全書河海抄五五頁）凡そ前を追ふ事は出門の時は、車副警蹕し、辻々は隨身警蹕すと或記にみえたり。今世には此儀絶えたり（國文註釋全書源氏官職故實祕抄六六〇頁）　○いづこかさして　古今集雜下題しらず、よみ人しらず。「世の中はいづれかさして、わがならぬ行きとまるをぞ宿と定むる」とあるを、「いづこ」と變へて引用したのである。意味は假の世はどれ一つとして、きまつて我が物であらうぞ、自分の物としてはない。住居も不定ぢや、行きとまつた所を

自分の宿ときめる。　○思ほしなす　思ひ傾く、さう思ひきめる。　○きりかけ　古へ板を横にして柱にきりかけ上よりめんどり羽に重ねて造り外より見すかぬやうに立てたる物。（大日本國語辭典）有朋堂源氏や博文館源氏に繪がある。　○をちかたびとに　古今集旋頭歌題しらず、よみ人しらず、「うちわたすをちかた人に物まをすわれ　そのそこに白く咲けるは何の花ぞも」意はもし〳〵その遙か向ふの人に物を伺ひます、それそこに白く咲いてる花は何の花ですぞい、まあ綺麗なこと。河海抄にいふ。此の本歌は梅花也されども白く咲けるはといふにつきて、今は夕顔の花に思ひよそへられたる也。（五六頁）。　○御隨身ついゐて　源氏の君の遠かた人に物申すと口すさみ給ふは何の花ぞもと問ひ給ふ心也。さて御隨身夕顔とはこたへ奉るなり。（國文註釋全書花鳥餘情三三頁）。　○御隨身品はさぶらひ分際の者なり。六位までなる也。（箋）源氏の當官中將也。小隨身たるべき也。（湖月抄頭註）みずゐじんとよむ。近衛府の官人で、弓箭帶劍して供奉する、將曹府生番長及び近衛がなる。上皇には、十四人卽ち將曹府生番長各二人近衛八人。四人以下を小隨身といふ。中將や衛門督兵衛督は四人、近衛少將と衛門兵衛の佐は二人である。重々しい行幸になると近衛將監もつとめる。これは近衛府の三等官で、正六位上が相當である。藏人を兼ねるのを、殿上のぞうといふ。湖月抄「六位までなる」とはこのことである。葵の卷に源氏の大將のかりの隨身に右近のぞうがなつたとあるのも、この事である。

【問題】　大貳の乳母のいたくわづらひて尼になりにけるとぶらはむとて五條わたりなる家たづねておはしたり惟光が兄の阿闍梨婿の三河守むすめなどわたりつどひたるほどにてかくおはしましたるよろこびをまたなきことにかしこまる尼君もおきあがりて惜しげなき身なれどすてがたく思ひたまへつることはたゞかく御前に侍ひ御覽ぜらるることのかはり侍りなむことをくちをしう思ひたまへたゆたひしかど忌むことのしるしによみがへりてなむかくわたりおはしますを見給へはべりぬれば今なむ阿彌陀佛の御光も心淸く待たれ侍るべきなど聞えてよわげに泣く日どろおこたり難くものせらるるを安からず歎き渡りつるにかく世を離るるさまに物し給へばいと哀にくちをしうなむ命長くてなほ位高くなども見なし給へさてこそ九品の上にもさはりなく生れ給はめこの世に少しうらみのこるはわろきわざとなむ聞くなど涙ぐみてのたまふ（大正十一年、三十七回本試驗）

【問題の見方】「たづねておはしたり」の主語を考へる。本文に省略されてゐるが、大貳の乳母は源氏の乳母であるから、主語は源氏である。次に「かしこまる」の主語を考へる。これも省かれてゐるが、上に「ほどにて」とあるから、補へば「皆々」である。卽ち惟光とその兄の阿闍梨、それから尼君の娘と娘の夫三河守等皆々源氏に對して神の如く畏敬してゐる狀態が目の前に髣髴する。「かしこまる」の動詞は實によく活躍してゐる。その次は「など聞えてよわげに泣く」の主語を見る。上にある「尼君」が主語である。なほその次は「涙ぐみてのたまふ」の主語を考へる。省かれ

てゐる源氏が主語である。要するに劇詩に近い情趣の文で、尼君と源氏との對話が主である。その對話によつて若君と御乳の人との間の情を見る。これが即ち主眼點で「涙ぐみて」は實に切なる心を表はした語である。隨つてどこからどこまでは對話であり、どこからが地の文であるかを誤らぬやうにするのが肝要である。試驗の問題には對話や獨語に括弧をつけてゐないから、「侍り」「給ふ」等の語によつて考へる。「給ふ」は四段と下二段との二種あつて、四段の「給ふ」は地の文にもつかふが、下二段の「給ふ」は對話に於て自卑敬語として使はれるだけである。「侍り」は「候ふ」の前身で、これも對話に於て使はれる。

【解說】　源氏の君は、乳母の大貳のめのとがひどう病んで命乞の爲尼になつてゐたのを見舞はうと思つて、五條邊にあるその住家を尋ねてお出でになつた。惟光の兄の兄の阿闍梨、尼君の娘（即ち惟光の妹）の婚三河守や娘など病氣見舞に來て集つてゐる折柄で、かやうに源氏の御こし下された御禮を皆々がこの上なく有難がつて恐懼措く所を知らずといふ樣である。尼君も病苦を悼へ身を起して「世をすてるに惜しいとも思はぬ身でございますが、尼になりにくゝ思ひましたことは、わたくし一身のことでなくたゞかやうに御前に出て、御目通りを賜はることが、尼になりますと、もう出來なくなならうかと、それを殘念に思ひためらうてゐました。（御目通りがかなへば死んでも厭はぬ意。朝に道を聞いて夕に死すとも可なりの精神）ところが、佛戒をうけた功德で、命をとりとめましてまあ、かう御出で下さつたのを拜しまして、何といふ有りがたい事でございませう。ですから今はもう（御姿を拜した今はの意）彌陀の來迎も思ひ殘すことなうお待ち申されませう」などと申上げて弱々しさうに泣く。すると君は「日頃はか〳〵しからぬ御樣子を心配して、常に歎いてゐたのに添へて今又、こんなに姿をかへて居られるので、大層悲しく殘念に思ふ。長生をなさつて私がもつと位が高く昇るのを見て下さい。それでこそ上品上生にも障りたう、なりなさるでせう。現世に少しでも、心のこりのあることは、往生の妨になつて、わるいことと聞いてをるよ」と涙ぐみながら仰せられる。（對話の外に說明を加へないで、味ははすところが面白い）。

【備考】　「大貳のめのと」湖月抄の頭註參照。「かの尼君などの聞かむにおどろおどろしく言ふな。かゝるありき許さぬ人なり。」有朋堂源氏一四二頁四行。夕顏の死を尼君に秘し給ふ源氏の心を察すると、乳母は愛のみで無く、權威ある訓戒もしたと見える。　○「尼になりにける」　この下に「を」を省く。　○「家たづねて」　家の下に「を」を省く。　○惟光が兄のあざり　湖月抄頭註及び評釋二五四頁の註參照。或僧に聞く比叡山に十二年山籠りしてその卒業したのを阿闍梨といふ。　○「たゆたひしかど」評釋の說從ひ難い。尼になることをためらうた意である。湖月抄の引ける細流よろしい。　○「いむこと」　細流「尼になりては齋戒をたもつ也。」かい（戒）は制禁の義、梵語にて尸羅といふ防非止惡の力ありて、萬善發生の根本たり藤井宣正著佛教辭林。明治書院發行。九四頁參照。　○「思ひたまへたゆたひ」「たまへ」を勸詞の中に挾んだところ注意を要す。四段の「給ふ」にはこんなことが無い。　○「こゝの品のかみ」　湖月參照。

【補充】　詞と地との考察を序に補充したい。桐壺の卷のはじめ

人のそしりをもえはゞからせ給はず、世のためしにもなりぬべき御もてなしなり。上達部上人などもあいなく目をそばめつついとまばゆき人の御おぼえなり。（以上地の文）以下獨思「もろこしにも、かゝることのおこりにこそ世もみだれあしかりけれ」とやう〳〵あめのしたにもあぢきなう、「　」は天の下の人があぢきなう思ふその獨思で、上達部上人の獨思でない。自分は此の解を正しと信じてゐる。ところが人によつては、「めをそばめつつ」の下「いとまばゆき人の御おぼえなり」からを詞として括弧の中に入れる向もあるが、自分は贊成し兼ねる。成程源氏の文中

「つゝ」や「て」からすぐ對話や獨語になる場合が多い。しかしここは「御もてなしなり」「御おぼえなり」は對句になつてゐる地の文と見たい。又同じ巻の「宮城野の」歌より少し奥に「宮はおほとのごもりにけり」の一句がある。古註では地の文とし「見奉りて」よりを詞とせるを本居翁は「宮は」からを命婦の詞と解してより後、誰も玉の小櫛の説に從つてゐるが、「にけり」の語氣から考へると、自分は古註を採りたいのである。とにかく地と詞との識別は大切なことであるから、輕視してはならぬ。次の文について詞の部分を試に括弧の中に入れて見給へ。

もとより荒れたりし宮のうち、いとゞ狐の住處になりて疎ましうけ遠き木立に梟の聲を朝夕に耳ならしつゝ、人げにこそさやうの物もせかれて影かくしけれ木精などけしからぬ物ども所を得て、やう〳〵形を顯し、物わびしき事のみ數知らぬに、まれ〳〵殘りて侍ふ人はなほいとわりなし、この頃受領どものおもしろき家づくり好むが、この宮の木立を心につけて放ち賜はせてむやとほとりにつきて案内し申さするを、さやうにせさせ給ひて、いとかう物怖しからぬ御住居に思し移ろはなむ、立ちとまり侍ふ人もいと堪へ難しなど聞ゆ。（蓬生の巻）

叙事を豫備として對話に入り、叙述する以上に對話によつて人物の性格なり情誼なりを躍如たらしめる型が次の文によつても察せられる。

【問題】 惟光入りて廻る〳〵人の音する方やと見るにいさゝか人氣もせずされば（略）こそ往來の道に見入るれど人住みげも無きものをと思ひてかへり參る程に月明くさし出でたるに見れば（略）格子二間ばかりあげて簾動く氣色なり僅に（略）見つけたる心地怖ろしくさへ覺ゆれど寄りて聲づくれば（略）いと物古りたる聲にてまづ咳をさきだて〻彼は誰ぞ何人ぞと問ふ名のり（略）して侍從の君と聞えし人に對面賜はらむといふそれは（略）外になむ物し給ふされど思しわくまじき女なむ侍るといふ聲いたうねび過ぎたれど聞きし（略）老人と聞き知りたり（略）内には思ひ寄らず狩衣姿なる（略）男の忍びやかにもてなしてなどやかなれば見習はずなりにける目にてもし（略）狐などの變化にやと覺ゆれど近う寄りてたしかになむ承らまほしき變らぬ御有樣ならば尋ね聞えさせ給ふべき御志も絶えずなむおはしますめるかし今宵も行き過ぎがてに留らせ給へるをいかゞ聞えさせむ後やすくをといへば（略）女どもうち笑ひて變らせ給ふ御有樣ならばかゝる淺茅が原をうつろひ給はで侍りなむや唯推し量りて聞えさせ給へかし年經たる人の心にも類あらじとのみ珍らかなる世をこそは見奉り過し侍れとやゝくづし出でゝ問はずがたりもしつべきがむつかしければよし〳〵まづかくなむと聞えさせむとて參りぬ。（蓬生の巻）（大正十四年高等教員試驗問題解釋）

【問題の見方】 この文で大きな誤に陷りさうな所は「内には思ひ寄らず狩衣姿なる男の」とつゞけて考へて、簾の内に惟光以外別な狩衣姿の男がも一人居るやうに見る。かういふ誤れる解釋は文脈を疎かにするから起るのである。そこで文脈を考へることは最も大切である。

主語　述語

主語　内には狩衣姿なる男の忍びやかにもてなしてなどやかなれば（覺ゆに係る副修句）（惟光のこと）
　　それを見習はずなりにける目にて（副修連語覺ゆに係る）もし狐などの變化にやと（客語）覺ゆ　述語
　　思ひ寄らず（副修連語覺ゆに係る）

そこで讀む際にも、「内には」で切つて「覺ゆれば」にかけて考へる。この文を陰陽の兩舞臺に觀察し、惟光を陽とし、老女の方を陰として本文に陰陽の記號を附けて見ると以上の通りである。全く劇的場面で老女の「變らせ給ふ御有樣」云々の答を以て末摘花の性格を表したところは主意である。陽の場面は皆「惟光」といふ最初の主語がかゝつてゐる。小い誤としては「思しわくまじきをんな」を不十分に解する位で、別に困難な問題で無い。

【解說】　惟光が源氏の命を受けてその邸内に入つて廻り〳〵人の音する方がないかしらと見ると、邸内は荒廢しきつて少しも人の住んでゐさうな樣子もない。そこで惟光の心のうちで「だからこそこの家の前をゆききした道から、こゝを見入るが人の住むやうすもないものを、なんで尋ねて來いと君が仰せられたのだらう」と思つて表通りに待つてゐられる源氏の君の方へかへり參る折柄、月があかく出たその光で見ると、格子ふたまほど上へあげて、その中にすだれが動くやうすである。やつと見つけた惟光の心地、氣味のわるい程にまでも思はれるが、簾の方へ近う寄つて案内を乞ふと、ひどく古びた聲で、まづせきをしながら「そこに居るは誰れです、何人ぞ」と問ふ。惟光と名乘をあげて「侍從の君と仰しやつた方へおあひ申したい」といふ。「その人は餘所に居ります。しかしその人同樣にお思ひ下さる女が居ります」といふ聲は、甚だ老人じみてゐるが、かね〴〵聞き知れる老女の聲と感づいた。一方簾の内では思ひがけなく、この廢邸に狩衣姿をした男卽ち惟光がこそ〳〵と動作をして、物ごしやさしいから、日頃さういふ男の姿などを見慣れずなつた老女達の目には、少なからず驚異を感じて或は狐などの魔障のものぢや無いかしらと、おそろしがる樣子だが、それに頓着なく、こなた惟光の方は近うよつて、「たしかに御主人樣(末摘花)の御心を承りたうございます。以前とおかはりなく私の主人(源氏の君)をお思ひ下さる御有樣ならば(廢邸で心變りなく住み給ふならばの意)わが君に於ても訪ね申上げてお世話をする御志も以前同樣にあられるやうに察します。今晩もお邸の前を素通りに仕にくゝて、あそこで御車を留めなさつてゐるが、どう御返事を申しませうか。わが君を信じて御安心下さいよ(うちすてるやうな薄情な源氏で無い意。「尋ね聞えさせ給ふべき御志」云々に應ず)といふと、簾の内の老女どもが笑つて(變化と思つたのが惟光であつたから、案外なことに笑つて)「變心遊した末摘さまなら、かういふ荒れ果てた邸(淺茅が原の語は廢園のすべてを總收す)を移らないで、このまゝ居りませうかい。とくの昔に他所へうつゝたわけです。たゞその一點だけでも推量して御主人に申上げたまはれ。私共のやうな老人の心にまでも、世にまたと類例のあるまいと思はれるほど、珍らかな堪へがたいみぢめなおくらしを永い間拜し奉つて來ました」とぼつ〳〵日頃心で思ひ結ぼほれることを話しだして、問はずがたりも爲さうなのが、うるさくて「よし〳〵、ではその趣通り、君へ申上げませう」と惟光が言ひすてゝ源氏の方へ來た。

【備考】　源氏二十九歲の四月、花散る里を訪ひ給ふ途次、末摘花の邸の前を通行せられた折のことで、末摘花の堅實な人格を想せる所である。　○「侍從の君」　末摘花の女房である。侍從もかの大貳のをひだつ人にかたらひつきてとゞむべくもあらざりければ(有朋堂源氏六〇四頁十行)筑紫へ下つて此の邸に居らぬのである。　○「思しわくまじき女」「侍從が伯母の少將といひ侍りし老人なむ變らぬ屋にて侍りつる」同六一六頁二行。惟光が源氏への御報告。　○「うしろやすくを」　湖月頭註ありのまゝにいへと云ふ也。うしろやすきとは心やすきといふ心也。本居翁いふ。上にもし狐などの云々とあるごとく、惟光を危みたるさまなる故に我をあやぶみ給ふな、うしろやすく思ひ給へといふなり。鈴木朗云。我らがうしろやすかる樣にたしかに返事し給へといふことなるべし。以上三說。本居說うがち過ぎて曲解。鈴木說も、向つていふ語氣から考へると首肯し難い。古註は最も穩當のやうに思ふが、自分の考としては解說の所のやうに定めてゐる。

【問題】　近き所には播磨の明石の浦こそなほことに侍れ何のいたり深き限はなけれど唯海の面を見渡したるほどなむ怪しくこと所に似ずゆほびかなる所に侍るかの國の前の守新發意の女かしづきたる家いといたしかし大臣の後にて出でたちもすべかりける人の世のひがものにて交らひもせず近衛の中將を捨てゝ申したまはれりける司なれどかの國の人にも少し慢られて何の面目にてか又都にも還らむと言ひて頭もおろし侍りにけるを少し奥まりたる山住もせでさる海面に出てゐたるひが〳〵しきやうなれどげにかの國の中にさも人の籠り居ぬべき所々はありながら深き里は人ばなれ心すごく若き妻子の思ひ侘びぬべきによりかつは心を遣れる住居になむ侍る先つ頃罷り下りて侍りし序に有樣見給へに寄りて侍りしかば京にてこそ所得ぬやうなりけれそこら遙にいかめしうしめて造れる樣さはいへど國の司にてし置きける事なれば殘の齡ゆたかに經べき心がまへも二なくしたりけり後の世の勤もいとよくしてなか〳〵法師まさりしたる人になむ侍りける。（若紫の巻）（大正八年三十三回本試驗問題解釋）

【問題の見方】　「侍り」といふ語が七つある。貴人に向つて申上げる詞であることがわかる。先づ明石の浦の格別によいことを言つて、「明石入道の娘かしづきたる家いたしかし」これが主眼である。「かつは心をやれる住居」といひ、「そこら遙にいかめしう占めて造れるさま」といふ、皆家のことである。そして法師まさりしたる人と入道をほめて結んだのである。

【解說】　近國では播州明石の浦が、どこよりもやはり格別でございます。何のゆき屆いた趣がないけれど、たゞ海面を見渡したあんばいは、妙に他の所に見られないゆつたりとした處でございます。かの播磨の前司新發意が娘を大切に住せてゐる家は、素晴しいものです。前司は大臣の子孫で出世もする筈の人が世のかはりもので人交りもせず、近衛中將の官を捨てゝ奏上して頂いた國司ですが、その任地の人にも多少侮られて「何の面目があつて、今更都に還らうかい」といつて剃髪しましたが、世間の僧並に少し奥まつた山ずみもしないで、あんな海岸に出て暮してるのは、心がねぢけたやうですが、播磨の國中に人の隱れるにさも適した所はありますが、げに深い里は人氣がなく物凄くて、若い妻子がつらからうから、それを思うて山深くも隱れず、又一つは得意にあかぬことのない住居でございます。先年下向の序に樣子見に立寄りましたところが、京でこそ彼は不遇のやうでしたが、明石では廣大な場所を占めて、莊嚴に造り構へた樣は、侮られたなどいつたが何といつても國司の力でし置いた事ですから、餘命をゆたかに送る準備も十分にしてございます。それに又後生の勤も大層よくして、法師となつて却つて人物をあげた人でございますよ。

【備考】　湖月頭註に花鳥餘情を引いて「是よりは藏人大夫良淸が物語也。良淸は播磨守が子なるによりて、國の名所よく知れる也。師の說（箕形如庵の說）として「これ須磨明石をかくべき張本也」。　○「ゆほびか」　河海抄の說による。評釋の說を採らぬ。　○「しぼち」　しんぼち　新に佛の道に入れる人の稱。三位以上の人を入道といひ、以下は新發意と稱す。　○「心をやれる」　本居翁云「みづからあかぬことなしと、ほこりたるやうの意也。」奈良朝の意は氣をはらす。平安朝の物語にある用例は、得意にその方へ力を注きこむ積極の意と解すべきである。枕草子三段除目のほどなど云々に「おのが身のかしこきよしなど心をやりて說き聞かするを若き人々は笑へど、いかでか知らむ」も同じ用例である。　○「法師まさり」　法師になりてより人がらのま

きりて見ゆる事をいふ。鈴木朗の說による。

會員諸君が自分で力試しをする爲に補充問題を提供する。

【問題】 かたほなるをだにめのとなどやうのおもふべき人はあさましうまほに見なすものをまして いと面だゝしうなづさひ仕うまつりけむ身もいたはしく辱くおもほゆべかんめればすゞろに涙がちなり。（夕顏の卷）

【問題】 明方も近うなりにけりとりの聲などは聞えでみたけさうじにやあらむ唯おきなびたる聲にぬかづくぞ聞ゆる起居のけはひ堪へがたげに行ふいとあはれに朝の露に異ならぬ世を何を貪る身の祈にかと聞き給ふに南無當來導師とぞ拜むなるかれ聞き給へこの世とのみは思はざりけりとあはれがり給ひて

うばそくがおこなふみちをしるべにて
來む世もふかきちぎりたがふな

長生殿のふるきためしはゆゝしくて翼をかはさむとは引きかへて彌勒の世をぞかね給ふ行先の御たのめいとこちたし

さきの世のちぎり知らるる身のうさに
ゆくすゑかねてたのみがたさよ

かやうの筋などもさるは心もとなかんめり。（夕顏の卷）

【問題】 朱雀院の行幸は神無月の十日あまりなりよのつねならず面白かるべき度の事なりければ御かたゞ〳〵物見給はぬ事をくちをしがり給ふ上も藤壺の見給はざらむを飽かずおぼさるれば試樂を御前にてせさせ給ふ源氏の中將は青海波をぞ舞ひ給ひける片手には大殿の頭中將容貌用意人には異なるを立並びては花のかたはらの深山木なり入りがたの日影さやかにさしたるに樂の聲まさり物のおもしろき程に同じ舞の足蹈おもゝちゝ世に見えぬ樣なり詠などし給へるこれや佛の御迦陵頻伽の聲ならむと聞ゆ面白くあはれなるに帝涙おとし給ふ上達部皇子たちも皆泣き給ひぬ詠はてゝ袖うちなほし給へるに待ちとりたる樂の賑しきに顏の色合まさりて常よりも光ると見え給ふ春宮の女御かくめでたきにつけてもたゞならず思して神など空にめでつべき容貌かなうたてゆゝしと宣ふを若き女房などは心うしと耳とゞめけり。（紅葉賀の卷）（大正四年二十九回本試驗問題解釋）

【解說】 源氏の父帝（桐壺帝）は三條朱雀に造られた朱雀院へ先帝の御賀を遊ばす爲に行幸せられることは十月十日（源氏この年十八歲）過ぎである。世間並でなく、特に面白からう此の度の事であるから、禁中以外で催されるゆゑ、女御などの御方々は御見物のかなはぬことを殘念がりなされる。帝も龍妃藤壺（この翌年二月十餘日冷泉院を產み奉り、その七月中宮に立たれた。此の時は女御であらせられた。）の御覽にならぬことを遺憾に思召すので、特別に藤壺に御見せする爲に、舞樂を前に試みる催を主上の御前で行はせられる。「おもしろかるべき度」「藤壺の見給はさらむをあかず」の「べき」「む」は未來の助動詞。まだ當日にならない以前に於て、かねて當日を未來として言

ふゆゑこの助動詞を用ひたのである。)その試樂で源氏の中將は「せいがいは」といふ舞をなさつた。その片方の相手には「おほいどの」の頭の中將容貌心がまへ世の人に比べては格別であるが、源氏の君と立並んでは、恰も花の傍の深山木のやうに見榮がしなかつた。それほどまでに源氏の君が御立派であつた。(一方をほめる爲に相手を貶す方法をとる事の例である。「春の夜のやみはあやなし、梅の花色こそ見えね香やかくるる」もこの例である)西山に入らうとする日の光が一段とかゞやいてさして來るその美しさに添へて、囃子十二人のはやす樂の聲が高く響きのぼりすべての物皆感興酣なる時分に、二人揃うての相舞の、その足拍子その表情、この世には類のない有樣である。(官能美。目に映ずる視覺美、耳に入る聽覺美について相當重きを置いてゐる。そのつもりで讀む要がある。)舞の中で源氏が「えい」といつて、詩を朗詠なされる、その時は奏樂も中止して、すべてがその詠に集注するのである、その詠の御聲のよいこと、これはあの極樂に居る好聲鳥に喩へられるお釋迦樣の法を說き給ふ御聲であらうかと聞える。(評釋にいふ。御の字は聲の上にある意也)。この光景の面白く感に堪へないので、主上が御落涙になる。陪觀の上達部や親王たちも皆感泣された。詠がすんで再び舞ひ出さうとて袖を直される時に、その一刻を待ち受けて、さつと始めた奏樂の賑しい旋律につれて、源氏のお顏の色合が、一段と美しく紅に染つて、不斷よりも光るやうにお見えになる。東宮の御母弘徽殿女御(藤壺と競爭の地位にある方である。桐壺の卷に「坊にもようせずばこの御子の居給ふべきなんめりと一の御子の女御は思し疑へり。人より先に參り給ひて、やむごとなき御思なべてならず、御子たちなどもおはしませば、この御方の御いさめをのみぞ、なほ煩しく心ぐるしく思ひ聞えさせ給ひける。」とある。後から女御になられた藤壺に壓倒され、いつも藤壺や源氏に對して不快の念を抱いて居られた方である。)光源氏がかやうに立派であるにつけても、ひと通りならずねたくお思ひになつて、「神などが空から愛でゝ魅入りさうな御容貌であるよ。あんまり氣味わるい程うつくしい。」とおつしやるのを、そばで聽いた若い女房などは、その嫉み言をなさけないことゝ小耳にはさんだ。(源氏の立派なことをいふのが主意である。)

【備考】　評釋の頭註は、このところ諸說の粹をとり要を得てゐるから、參考すべきである。なほ同じやうなのを次に、補充問題として提供する。

【問題】　御息所又なう人わろく悔しう何に來つらむと思ふにかひなし物も見で歸らむとし給へど通り出でむ際もなきに事なりぬといへばさすがにつらき人の御前わたりの待たるるも心弱しや笹の隈にだにあらねばにやつれなく過ぎ給ふにつけてもなか〳〵御心づくしなり(中略)

かげをのみみたらし川のつれなきに
身のうきほどぞいとゞ知らるゝ

と涙のこぼるゝを人の見るもはしたなけれど目もあやなる御樣かたちのいとゞしう出でばえを見ざらましかばと思さる。程々につけて裝束人のありさまいみじう整へたりと見ゆる中にも上達部はいと殊なるを一所の御光には押消たれたんめり大將のかりの隨身に殿上の尉などのすることは常のことにもあらず珍しき行幸などの折のわざなるを今日は右近の藏人の尉仕う奉れりさらぬ御隨身どもゝ容貌姿まばゆく整へて世にもてかしづかれ給へるさま木草も靡かぬはあるまじげなり。(葵の卷)

【問題】　月まち出でゝ出で給ふ御供に唯五六人ばかり下人もむつましき限して御馬にてぞおはする更なる事なれどありし世の御ありきに異なり皆いと悲しう思ふ中にかの御禊の日假の御隨身にて仕うまつりし右近の尉の藏人得べきかうぶりも程すぎつるを終に御簡けづられてつかさも取られてはしたなければ御供に參るうちなり賀茂の下の御社をかれと見渡すほどふと思ひ出でられて下りて御馬の口をとる

ひきつれて葵かざししそのかみを
　おもへばつらし賀茂のみづがき

といふをげにいかゞ思ふらむ人よりけに花やかなりしものをと思すも心ぐるし君も御馬より下り給ひて御社の方を拜み給ふとて神にまかり申し給ふ

うき世をば今ぞわかるるとどまらむ
　名をばただすの神にまかせて　（大正十三年四十一回本試驗）

【解說】　月の出を待つて源氏の君がお出なされる。（須磨へ行かれるお暇乞のために桐壺の故院の御墓詣）御供にはたつた五六人ほど、召使も親しい者だけで、御馬で御出になる。今更言うて甲斐無き事ながら、全盛時の御行裝とはかはつてゐる。誰も悲しう思ふ中でも、特別に悲哀を感じたのは、かの賀茂齋院御禊の日に、假の御隨身（花鳥にいふ。かりの隨身といふは一員とも名づくる也。近衛の將監・將曹・府生を一人づゝかりそめに召しわたしてつゝことをいふ也。職によりて隨身を賜ふは限ありて出仕のたびによのつね召し具す也。その外、時に隨うて一人づゝ召しわたすを假の隨身といふ。）として奉仕した右近衛の將監である。彼は藏人をも勤めてゐた。空蟬の夫伊豫介の子。正六位上が相當で、當然從五位下に叙せられる筈のところ、期限も過ぎたのに、その沙汰なく、おまけに源のゆかりの者であるために、藏人として殿上してゐたのが、日給簡を削られ官職も取りあげられて、世間體がわるいので、今日の御供のうちに參加してゐる。その途の次に、賀茂の下の御社が「あれだなあ」と眺めやる時に、ふと御禊の日の事が思ひ出されて、ありしみ禊の所作事として、自分は馬から下りて、君の御馬の口をとつて、感慨無量次の歌をよんだ。

あれあそこに、御社の端垣が見えます。それにつけても、行列をつくつて葵を頭に挿し練りあるいたその日のことを思ふと、今のわが身が……賀茂の神樣も……つらい、うらめしい。

（孟津抄そのかみ（當時）にて神をもたせたり）君はなるほど「思へばつらし」と詠める通り、どんなに悲しく思ふことであらう、彼はあの時、他の人よりはすぐれて立派であつたものをたあと、思召すにつけても氣の毒にお感じになる。そして御自身もお馬からお下りになつて、御社の方を拜し、御祖の神にお暇乞の御挨拶を遊ばした。

周圍がわたくしに對してつらく當る此の都から今離れて須磨へ行きます。あとにのこる名の正否は、下賀茂社の神のお正し下さるに御任かせして。

【備考】　「月まち出でて」「細流」曉かけて月出る頃なれば也。湘月抄傍註。「むつましきかぎり」書紀聖德太子薨去の條に今太子既薨之、我雖二異國一心在二斷金一。とあつて、斷金をムツマシと訓んでゐる。朋友間のみならず君臣の關係にも用ひてゐる。恩親の字はこれに適してゐる。紀に日神恩親之意不レ慍不レ恨と素戔嗚尊を容しなされてゐる。いづれもシは淸音である。いつ頃か

らシを濁つたか、確かに知らぬが源氏物語では清音が適當だと思ふ。高砂の謠にも「むつましと君はしらずやみづがきの久しきよゝの神かぐら」とやはりシを清音に謠つてゐる。○「うべきかうぶり」　湖月抄頭註の「抄」六位藏人のうち第一を極臈といふ、それが毎年の叙位に一人づつ叙爵するを巡爵さいふ也。　○みふだけづられ　「抄」是を除籍といふ。籍はふだ也。殿上人は四位五位六位まで。昇殿するほどの者を日給の簡といふ物に書きつくる也。「孟」叙爵すべきに源除名に依て結局みふだをけづられたり。　○「ひきつれて」「細」神もうらめしきと也。「師」おもへばつらしとはその世をおもへば今かゝる世にあひぬる事神もうきとにや。　○うき世をばいまぞ　「抄」身は只今都をはなるれども、止まらむ名を明かに正し給へと也。神の御名によせたり。萩原廣道の源氏物語評釋は花の宴までしか無いから、葵の卷以後は湖月抄がよろしい。湖月抄の頭註や傍註を利用せられることを希望します。

訂正　第四册七七頁左より二行「わがならぬ」は「わがならむ」の誤

「小隨身についての補遺」廣文庫十册九六一頁、新野問答二四（小隨身とはいかゞ、答、小隨身は中少將にある事なり、中少將隨身つるゝはずなれども隨身のあき無之とき役儀にてつれで叶はぬ時、手前の人にても隨身に仕立つるを小隨身と申候）註、新野問答寫本一卷藤原定基著正德年中新井白石が著者に問ひて得たる答なりといふ。佐村八郎國書解題、上（一一一二頁參照）

【問題】　渚に寄る浪のかつかへるを見給ひてうらやましくもとうち誦じ給へる樣さる世のふるごとなれども珍しく聞きなされ悲しとのみ御供の人々おもへりうちかへりみ給へるに來しかたの山は霞はるかにてまことに三千里の外の心地するに權の雫も堪へがたし

ふる里を峰のかすみは隔つれど
　　ながむる空はおなじ雲居か

つらからぬものなくなむおはすべきところは行平の中納言のもしほたれつゝわびける家居ちかきわたりなりけり海面はやゝ入りてあはれに心すごげなる山中なり垣のさまよりはじめて珍らかに見給ふ葺屋ども葦ふける廊めく屋などをかしうしつらひなしたり所につけたる御住居やう變りてかかる折ならずばをかしうもありなましと昔の御心のすさび思しいづ。（須磨の卷）（大正十年度第三十五回本試驗）

【問題の見方】　「つらからぬものなくなむ」までは岸に船が着いた時の、供の人及び源氏の感想で、故事二つは確實に解かねばならぬ。その以下は、いよ〳〵上陸されて配所へ着いた際の景と情で、「昔のみ心のすさび」とは、ちと皮肉な筆致である。字眼は「悲しとのみ」「權の雫たへがたし」「つらからぬ」云々「心すごげなる」「をかしう」二回等である。

【解説】船が申の時ばかりに、かの浦に著き給ひぬと前の文にある。それを受けて……渚に近寄る浪がまた再びもとへかへる。そのさまを源氏が御覽なされて、「あゝあの浪でさへかへるのに、われはかへれないのかなあ、……」とお感じになつたのだらう。在原業平が「うらやましくもかへる浪かな」と詠んだその歌を、源氏が今ちよつと吟誦せられてゐる御樣子が、さういふ名高い古歌で、耳新しくもないのであるが、この際御供の人々は、珍しく聞きとつて、ほんに悲しいと思うた。源氏も船から上陸しようとなされて、過ぎ來し方の戀しさに、あとを見なさると、過ぎて來たあの戀しい山は遠い〳〵霞の奥に包まれて、かの白樂天が「三千里外遠行の人」と自分の身の上を歎いたやうに、われも亦白樂天と同じくほんとに都を遠く離れたなあといふ悲しい心地がするにつけて、涙……船人の櫂の雫……もこらへ難い。

あのなつかしのわが古里を、意地わるの峰の霞は、あの通り隔ててはゐるが、流石の霞も相思の情は隔て得ない、都の戀人もわれも共に〳〵眺める空は同じ空であらうか。

よせてはかへす浪といひ、又霞といひ、さても〳〵見るもの聞くもの皆、われにうらみつらみを感ぜさせないものがない。（以上は悲しい感じを述ぶ。「つらからぬ云々」は浪と霞とを總收する。）さて御着きにならうとする場所は、その昔在原行平の中納言がわが、身の上を詠んだ歌にある通り、藻鹽を垂れながら佗住居した家の近所であつた。そこは海面からはやゝ這入つて行くと、あゝと思ふほど物凄い感のする山の中である。先づ垣の作りやうを始として、御着きになつた源氏が珍しく御目とまる。萱屋や葦ぶきの廻廊めいた家など趣のあるやうに拵へてある。田舍相應な御住居は、都でのそれと樣子が變つて、「かういふ愁の旅でないなら面白からうものを、殘念なことだ」と昔空蟬の中川の里や夕顔や花散里、さては六條御息所の野宮と浮かれ廻つた御心のあこがれを思ひだし遊ばされる。

【問題】御前にいと人ずくなにてうちやすみわたれるに一人目をさまして枕をそばだてゝ四方の嵐を聞きたまふに浪たゞこゝもとに立ちくる心地して涙おつとも覺えぬに枕うくばかりになりにけり琴をすこしかき鳴し給へるがわれながらいとすごう聞ゆればひきさし給ひて

戀ひわびてなく音にまがふうらなみは
　おもふかたより風や吹くらむ

と諧ひ給へるに人々おどろきてめでたう覺ゆるに忍ばれてあいなう起きゐつゝ鼻を忍びやかにかみわたすげにいかに思ふらむわが身ひとつにより親はらからかたとき立ち離れがたく程につけつゝ思ふらむ家を別れかく惑ひあへると思すにいみじくていとかく思ひ沈むさまを心細しと思ふらむこおぼせば畫は何くれと戯事うちのたまひ紛しつれ〴〵なるまゝにいろ〳〵の紙をつぎつゝ手習をしたまふ珍しきさまなる唐の綾などにさま〴〵の繪どもをかきすさび給へる屏風のおもてどもなどいとめでたく見所あり人々の語り聞えし海山の有樣　逸におぼしやりしを御目に近くてはげに及ばぬ磯のたゝずまひになくかき集め給へり。（須磨の巻）

（大正二年第二十七回本試驗）

【解説】謫居地須磨に於ける源氏の君の御前に、甚だ人ずくなで、皆が寢て居るのに、君獨り目をさまして、枕を欹てゝ、四方の嵐を聞かれると、浪がたゞもう、枕元に立ち寄せる心地がして、涙おちるとも思はぬに、枕が浮く程

に床を濕すのであつた。きんを少しかき鳴らしなされたが、自分ながら甚だ物凄く聞きなされるので、彈きさしなされて

都人を戀ひ惱んでなくわが聲に似たる須磨の浦浪の音よ、そは定めしわが思ひ慕ふ都の方からも亦、われを思うて泣くその音を風が浪に吹きおくるのであらう。（湖月抄　師の說に據る）

とお謠になると、お前に睡つてゐた人々は目をさまして、美しう感ずるにつけて、京のことが坐ろ思ひ出され、何となう起きゐて、皆ずつと、涙を含んだ鼻をこつそりかむ。それを御覽になつて、君は御心になるほど彼等はどんなに悲しう思ふことだらう。われ一人の爲に親兄弟片時も離れ難く、身分相應に思ひ慕うてゐる家を別れて、このやうにさすらひあつてゐるとお思になると、ひどく氣の毒で、自分がこの通り甚だ思ひ沈み歎いてゐる樣子を彼等が見たなら、心細い感を起すであらうと思し召すので、畫は何やかやと戲事を仰つて紛はし、退屈まかせに、いろ〳〵な紙をつぎ合せて、手習をせられた。又珍しい有樣なる唐の綾などに、色々な繪を書き慰まれた屏風の面など、大層結構で趣がある。以前都では人々が語りきかせ申した海や山の有樣を遠くから想像したのだが、今御目に近く御覽になると、なるほど思ひも及ばぬその樣子を比類なく立派に書き集めなされた。

【問題】　この頃の上手にすめる千枝常則など召して作繪仕う奉らせばやと心もとながりあへり懷しうめでたき御有樣に世の物思忘れて近う馴れ仕う奉るを嬉しきことにて四五人ばかりぞつと侍けひる前栽の花いろ〳〵咲き亂れおもしろき夕暮に海見やらるゝ廊に出でたまひて佇み給ふ御さまのゆゝしう清らなることところからはましてこの世のものとは見え給はず。（須磨の卷）（大正六年第三十一回本試驗）

【備考】　問題は「つれ〴〵なるまゝにいろ〳〵の紙をつぎつゝ」よりなれど、前の問題の中に解說したれば、省略せり。

【解說】　この頃の上手と世間が認めたと思はれる千枝（ちえだ）や又常則などをお前に召しよせて、君の書かれた畫繪に、彩色を施させたいと皆が望んでゐた。（それほど立派な畫繪が出來た。）源氏の君の懷しう結構な御有樣をお側の人が拜して浮世の物思をも忘れ、近う仕へ奉るを嬉しいことと思つて、四人五人ほどが、つとお側離れず侍うて居た。お庭の植ゑ込みの花がいろ〳〵に咲きみだれて趣のある夕暮どき、海を見はるかすことの出來る歩み殿に出でなされて、佇み遊す源氏の君の御樣子の、いみじく美しいこと、田舍の場所がらでは一入立派で、都でさへ……ましてこの淒閑な所では此の世のものとはお見にならない。天上の神佛の一時下界へ降られたもののやうにお見えになつた。

【問題】　雲間もなく明け暮るる日數にそへて京の方もいとどおぼつかなくかくながら身をはふらかしつるにやと心ぼそうおぼせど頭さし出づべくもあらぬ空のみだれに出で立ち參る人もなし二條院よりぞあながちにあやしき姿にてそぼち參れる道かひにてだに人か何ぞとだに御覽じわくべくもあらずまづ追ひ拂ひつべき賤夫のあはれにむつましう思さるるも我ながらかたじけなく屈しにける心のほど思ひ知らる御文にはあさましくをやみなき頃の氣色にいとど空さへ閉づる心地してながめやるかたなくなむ

うら風やいかに吹くらむ思ひやる
　袖うちぬらしなみまなきころ

あはれに悲しきことども書き集めたまへりひき開くるよりいとゞみぎはまさりぬべくかきくらす心地し給ふ。（明石の巻）（大正十三年四十回本試驗）

【解説】　雲の晴間もなく明けては暮れる日の經つにつれて、京の方の事も一層氣がかりで、このまゝ身を滅して了ふかと、源氏の君は心細うお思ひになるが、何分頭をさし出されさうにもない大風雨の爲に、出かけて御機嫌伺に參上する人もない。二條院の紫の上からの使は變な蓑笠姿で無理にずぶ濡れで參上した。（紫の上の誠のあついのを表す。）道で行きあつても、人か何かとさへ御見わけのつきさうもなく、眞先に追ひ拂ひさうな下賤の者が、此の時は都の使といふので趣深く親しうお感じになるのも、自分ながら恐れ多く勿體ない氣がいたして、（尊い御身の側、間近く下賤の者の參ることは都では無い）意氣地のなくなつた我が心のさまが、思ひ知られる。紫の上からの御文には「あきれかへるほどふりつゞく今日此頃の氣色に心が結ぼれ、一入空まで閉ぢ塞がる心地がして、懐しい須磨も眺めやる方法もございません。

あなたの御住み遊ばすその須磨の浦風が、どんなに激しく吹くことでせうか。それを思ひやる私の袖をうちぬらして、涙の浪がやみまの無いけふ此の頃は。

と感慨深く悲しい事を多く書かれてあつた。君は手紙をひきあけるなり、一入涙がはふり落ちて、汀の水も増りさうで心も眞暗になるお心地をなされる。

【問題】　廣陵といふ手をある限り彈きすまし給へるにかの岡邊の家も松の響波の音にあひて心ばせある若き人は身にしみて思ふべかんめり何とも聞きわくまじきこのもかのものしわぶる人どももすゞろはしくて濱風を引きありく入道もえ堪へで供養法たゆみていそぎ參れりさらに背きにし世の中も取返し思ひ出でぬべく侍る後の世に願ひ侍る所の有樣も思う給へやらるる夜のさまかなと泣く〳〵めで聞ゆ我が御心にも折々の御遊その人彼の人の琴笛もしは聲の出でしさま時々につけて世にめでられ給ひし有樣帝よりはじめ奉りてもてかしづきあがめられ奉り給ひしを人の上もわが御身の有樣も思ひ出でられて夢の心地し給ふままに搔き鳴らし給へる聲も心すごく聞ゆ古人は涙もとどめあへず岡邊に琵琶箏の琴取りにやりて入道琵琶の法師になりていさをかしう珍らしき手一つ二つ彈きいでたり箏の御琴まゐりたればすこし彈き給ふもさま〴〵いみじうのみ思ひ聞えたりいとさしも聞えぬ物のねだに折からこそはまさるものなるをはる〴〵と物のとゞこほりなき海づらなるになか〳〵春秋の花紅葉のさかりなるよりはたゞそこはかとなう繁れる蔭どもなまめかしきに水鷄のうちたゝきたるは誰が門さしてと哀に覺ゆ（明石の巻）（大正十四年第四十三回本試驗）

【解説】　源氏の君、須磨から明石へ浦づたひされて、或るのどやかな五月の夕、月が海面を照し、淡路島もたゞ目の前に見やられるので、都の二條院の池水を聯想され、轉た旅愁のやる方なさに、久しう手も觸れ遊されない琴を

袋からお取りだしになつて、廣陵といふ琴の曲を（花鳥にいふ。廣陵散琴祕曲也。稽康が神人に逢ひて傳へたる曲也。此の神人は昔の伶倫の變化也。伶倫は堯の時の樂士也。悉皆ありたけ澄みきつた音色で彈きなされたので、此の濱の館（博文館本源氏上三二九頁七行「女などは岡邊の宿に移して住ませければ、この濱の館に心安くおはします」とある。）で遊ばされたのあるが、あの岡邊の家へも松の響や浪の音に琵琶の音が相和して聞えて來るので、趣味心のある物めでする若い女房達は明石の上を中心として、しみ〴〵と感に打たれるやうである。又何とも物の音を聞きわけるまい彼方此方の下賤の人どもまでも、（しわぶる人。皺といふ名詞に「ぶ」といふ接尾語をつけて動詞とせる語老人又は賤夫をいふ。）この妙音にそはそはと浮かれ出ては、風邪をひくまで濱邊をさまよふ。（音の妙なのを極論するところに諧謔の筆を弄んだのである。）入道も我慢しきれずに、勤行中の供養法（花鳥いふ。三密六度の行法也。註、三密とは密敎の修行で、手に印を結ぶを身密といひ、口に眞言を誦するを口密といひ、心に本尊を觀ずるを意密といふ。六度は布施持戒忍辱精進禪定智慧の六波羅密である。平安佛敎から觀た花鳥の說面白い。）を怠つて急いで參上した。「この音を承りますと捨てて了つた俗世も、更に再びとりかへし、ありし昔、都での管絃の遊が思ひ出しさうにございます。又朝夕欣求いたしますあの極樂淨土の有樣、そこの歌舞菩薩の妙音が思ひやられずに居られませぬ今夜の有樣でございますよ」と、涙を流しておほめ申上げる。君も御思は過去に遡り、折々の管絃の御遊、その人あの人の琴笛の趣のあつたこと、又は歌聲の美しかつた思出、又自身が折節毎に世間から賞められた御遊の有樣、畏き帝を始として人々から大切にされ、尊ばれなされたものをと、かく人の身の上もわが御身の上の御有樣も、それからそれへと自然と思ひ出でて、追憶の絲を辿るにつけて、今の境遇と對照すると、まるで夢のやうな心地がなさるので、お彈きになる琵琶の音も凄味を帶びて聞える。年老いた入道は感涙滂沱禁じ得ず、娘の住む岡邊の家に琵琶や箏の琴をとりにやつて、入道はそのまゝ琵琶法師となり變つて、甚だ趣があり珍しい曲を一つ二つ彈き出した。使のもて來た箏の御琴（ことは和琴・琵琶・箏・きんを總稱す）を君に奉つたので、すこしお彈きになる、その音をも、入道奇特の思をして、その御堪能をさま〴〵甚しう賞で奉つた。さ程格別面白くもない樂の音でも、その折柄や場面の感じにつれては、よく聞えるものであるのを、まして入神の妙技に、こゝの場面は適々と見渡す限り何の障もない明石の海面であるに相添へて、却つて春の花や秋の紅葉の盛なる時よりは、五月の夜、唯何處ともなしに茂つてゐる木蔭の上品に艶に感ずる上に、をりから「くひな」がほと〳〵と門を叩くやうな聲で啼くのは、「誰が門を戸さして入れぬのであらうか」と古歌の趣が思ひ出されて感深くおもはれる。（細流抄に「まだ宵に打ちきてたゝく水鷄かな誰が門さしていれぬなるらむ」と古歌を引く、出所不明）

【問題】 その頃世に數まへられ給はぬ古宮おはしけり母方などもやむごとなくものし給ひて筋異なるべきおぼえなどおはしけるを時移りて世の中にはしたなめられ給ひけるまぎれになかなかいとなごりなく御後見なども物怨めしき心々にてかたがたにつけて世を背き去りつゝ公私によりどころなくさし放たれ給へる樣なり北の方も昔の大臣の御女なりけるあはれに心細く親だちのおぼしおきてたりし樣など思ひ出で給ふにたとしへなきこと多かれど深き御契のふたつなきばかりを憂き世の慰にてかたみにまたなく賴みかはし給へり（橋姫の卷）（大正十五年第四十四回本試驗）

【解説】　その頃に（桐壺・朱雀・冷泉・當代と御代がつゞく話をうけていふ。今上御即位頃である。）世間から皇子の數にかぞへられない、まるで世に忘れられてゐる年老いた親王があらせられた。（宇治八宮の御ことである。）その宮の母方など（即桐壺の帝の女御の里を指す）も尊貴にあらせられたので、ふる宮は、その當時春宮にならう世の人望もあられたが、時勢が一變して、（古宮を後援する弘徽殿大后が朱雀院の春宮なる冷泉院を廢して、古宮を春宮にしようと目論見を立てたが、朱雀院御讓位、冷泉院御即位によりて大后の勢力失墜せるをいふ。）世の中から工合のわるい破目にあはされなされるどさくさに、なまなか皇太子にならうといふ以前の勢力の僞に却つてそのなごりなく御零落になり、御後見の人達も世を恨む心を持たれて、それぞれと世を離れ背き去り〳〵して、今は古宮も上朝廷に對しても又下個人としても、いづれも何等後援なく、孤影悄然たるあはれな有樣である。奥方も以前大臣を勤めた方の御息女であつた。その奥方が、夫の零落に感慨無量に心細く、我兩親が春宮妃より皇后への未來を思ひ定めてゐた有樣などを思ひ出でなされるにつけて、譬へやうもなく悲しいことが多いけれども、八の宮御夫婦は深い御緣の無雙の愛をつらい世の慰として、互にこの上なく頼みかはして世を送られた。

枕草子より出でたる問題の解説

文檢第一回明治十八年頃から現今に至るまで枕草子から出た問題を統計して見るに、（書物の前後の順による）

1、二十一段　すさまじきもの　明治二十年及び同三十八年
2、七十段　草のいほり　明治四十二年
3、八十段　中宮御琵琶　大正十一年
4、八十三段　かたはらいたきもの　明治十九年
5、八十六段　ほととぎすたづねに　大正五年
6、八十七段　一にてをあらむ　大正十二年
7、百十二段　七日の若菜　明治三十二年
8、百十七段　鳥のそらね　明治二十一年
9、百十八段　この君　明治三十年及び大正九年
10、百十九段　圓融院の御はての年　明治三十六年
11、百二十三段　八幡の臨時祭　大正三年
12、百四十一段　心もとなきもの　明治三十四年及び大正元年及び大正七年
13、百六十段　宮にはじめて　大正十四年
14、三百段　枕にこそは　昭和二年

以上十八回で、いづれも本試驗問題である。

【問題】　すさまじきもの　晝吠ゆる犬春の網代三四月の紅梅の衣乳兒のなくなりたる產屋火おこさぬ火桶炭櫃牛にくみたる牛飼博士のうちつゞきにより子生ませたる方たがへに往きたるにあるじせぬところまして節

分はすさまじひとの國よりおこせたる文の物なき京のをもさこそは思ふらめされどそれはゆかしき事をも書き集め世にある事を聞けばよし人の許にわざと清げに書き立てて遣りつる文の返りごと見む今は來ぬらむかし怪しく遲きと待つほどにありつる文の結びたるも立文もいときたなげに持ちなしふくだめてうへに引きたりつる墨さへ消えたるをおはしまささりけりとももしは物忌とて取り入れずなどいひてもて歸りたるいとわびしくすさまじ又必ず來べき人の許に車をやりて待つに入りくる音すればさなりと人人出でて見るに車宿に入りて轅ほうとうちおろすをいかなるぞと問へば今日はおはしまさず渡り給はずとて牛のかぎりひき出でいぬる(二十一段)

【解說】　興のさめるもの(題目)時のあはぬものと、中心生命の失せたものと、期待の報いられないものと三いろあげてある。うつりめに味がある。俳諧の連句を味ふ心持でよむとよい。晝吠える犬。九月から十二月までが網代の季節であるのを春の網代。紅梅(表紅裏紫)のきぬは十一月から二月梅の咲く頃までがせいぜい終であるのを三月四月の紅梅のきぬ。いづれも時がつきづきしくない。ちごの死んだ產屋。(この觀察は奇拔だ)火おこさない圓火鉢や園爐裏(炭櫃はあて字、方一尺四寸、內方九寸六分茶湯を沸かし又間ぬくめに用ひる。之に對して長炭櫃といふがある。)牛を憎んでゐる牛飼。男子のみ學問で世に立ち得る當時、學問を生命とする博士がつぎつぎついて女子のみ生ませたのは、中心生命の失せたもの、天一神等の方へ行くのを避ける爲に、わざわざ迂回し、方向を違へに他で一泊する、これを方違といふ。その時に、一向あるじ設けをしないところ、いつはあれど節分の方違に饗應せぬのは興がない。地方からよこした手紙に進物の附いて居ない。(今日切手を貼る手紙と異つて、使がわざわざ遠い地方から持參するのだもの手紙だけでは、なる程興味が無からう。)京からやる手紙をも同樣にさう思ふであらう。けれど京のは聞きたいことも書き集め、新聞紙の無い當時として、この手紙によつて世間の出來事を聞くから手紙だけで進物のないのもよい。人の許へ特別に立派に書き立ててやつた手紙の返事を見よう、もう來るだらう、變に遲いことよと待つうちに、以前の手紙、それは結文でも又立文でも(立文等大日本國語辭典參照)其だきたなく持ちあつかひ、ブク〳〵にして表に引いた封じ目の墨までもが消えてあるのを「お留守でした」とも、又「物忌で受取りません」とかいつて、持つて歸つたのは、甚だつらくすさまじい。又きつと來るにちがひない人の許へ車を迎へにやつて待つてゐると、入り來る音がするので、「さあ、あの人であるわい」と思つて人々が出て見るに、使の者は車部屋(中門の外にある建物)に輓き込んで、轅をほうとおろすのを、「どうであるぞい」と問ふと、「今日はお留守でございます」とか又「こちらにお越しになりません」と言つて牛だけひいて出て行く。

【問題】　二月つごもりがた雨いみじう降りてつれづれなるに御物忌にこもりてさすがにさうざうしくこそあれ物やいひにやらましとなむのたまふと人々語れどよにあらじなどいらへてあるに一日しもに暮して參りたれば夜のおとどに入らせ給ひにけりなげしの下に火近く取りよせてさし集ひて扇をぞつぐあな嬉しや疾くおはせなど見つけていへどすさまじき心地して何しにのぼりつらむと覺えて炭櫃の許に居たれば又そこに集り居て物などいふに何がしさぶらふといと花やかにいふ怪しくいつの間に何事のあるぞと問はすれば主殿司な

りたゞここに人傳ならで申すべき事なむといへばさし出でて問ふ。（七十段）

【解說】　二月の末頃、雨がひどくふつて退屈であるに、禁中の御物忌に齊信が籠つて（女房詞）『清少とは絶交したものゝほんに淋しい。何か言うてやらうか』と頭の中將が仰しやる」と女房の人達が私にいふが、「よもやさやうなことがあるまい」などと答へてゐると、ある日終日下の局に暮して、夜出仕すると、中宮樣は御寢所に入らせられてゐた。次の間で火を近く引き寄せて、女房達は集つて扇つぎの遊を（扇つぎ大日本國語辭典參照。ぎは濁る）してゐる。「あゝうれしい、早くこゝへいらつしやい」など、私を見つけていふけれど、お上のおはさぬので、興のない氣がして、何しにのぼつたのだらうと張合なく思はれて、圍爐裏の側にゐると、又そこに女房達が集つて來て、話などをしてゐると、（清少の人望あるさまがうかゞはれる。）使が來て（使）「何がし（使者の名）がこゝに參りました。」と甚だはれやかにいふ。（清）「不思議だ。自分はほんの今、上つたばかりだのに、いつの間に用事が出來たのだらう。何事であるか」と問はせると、その使はさのもりづかさである。（使）「たゞここで人づてでなく、直接申上げる事がございます。」（「なむ」の下「侍る」を省く）といふので、清少は立ち出でてたづねる。

【備考】　「御物忌に籠りて」の一句を地の文とする說と女房達の詞とする說と二つの說がある。後の說は武藤元信之を唱へ、永井一孝氏も之によられたが、自分は前の說を良いと信ずる。頭の中將のことをいふ女房達の詞ならば「こもりて」と敬語の無い筈があるまい。このところ抄は大誤謬（四二六頁）旁註「御物いみ」の傍に「禁中の」と註のある外確かでない（一〇六頁）

【問題】　うへの御局の御簾の前にて殿上人日ひと日琴笛吹き遊び暮してまかんで別るるほどまだ格子をまゐらぬに、大殿油をさし出でたれば外のあきたるがあらはなれば琵琶の御琴をたてざまに持たせ給へり紅の御衣のいふもよのつねなる打ちも又張りたるもあまた奉りていと黑く艶やかなる御琵琶に御衣の袖を打ち掛けてとらへさせ給へるめでたきにそばより御額のほど白くけざやかにて僅に見えさせ給へるは譬ふべき方なくめでたし近く居給へる人にさし寄りて半ば隱したりけむもえかうはあらざりけむかしそれはたゞ人にこそありけめといふを聞きて路もなきをわりなく分け入りて啓すれば笑はせ給ひてわれは知りたりやとなむ仰せらるると傳ふるもをかし（八十段）

【問題の見方】　「それはたゞ人にこそありけめの「故事を確實に答へることが肝要である。

【解說】　弘徽殿のうへの御局の御簾の前で、殿上人が一日中琴をひき、笛を吹いて遊び暮して、退出する時分、まだ御局の格子も下さないのに、御燈臺を差し出したので、外のあいてゐるのが（格子を下さぬ故）むきだしであるから、中宮樣は琵琶の御琴（琴は絃樂器の總稱）を縱樣にお持ちになつてお顏をおかくしでした。紅の御衣の御立派なことなど言ふのも尋常の言ひ方であるやうなのを、打つたのや又張つたのも、たくさんお召し遊して、大層黑く光澤のある御琵琶に御衣の袖をうちかけて、持つていらつしやるのが、立派であるに、琵琶の側から御額のほど白くくつきりと僅にお見えになつてゐるのは、譬へやうがない程立派である。私は自分の傍に近く居られる女房にさし寄つて（清）「（あの白樂天の琵琶行に）半ば隱したであらうのも、こんなに立派ではあり得なかつたでせうよ。その人は

たゞの人(平人・臣下)であつたらう」(千呼百喚始出來、猶抱ニ琵琶一。半遮レ面。琵琶行)といふのを聞いて、その女房は、通り路もないのに、無理に押分けて中宮の御前へ參つて、清少の詞を申上げると、中宮樣はお笑になつて、「お前は清少のいつた詞の意味を知つてゐるか」と仰せられると、その女房が御側から引きかへし來て、私にそれを傳へきかせるのも面白い。

【問題】　かたはら痛きもの　客人などにあひて物いふに奥の方にうち解け言人のいふを制せで聞く心地思ふ人のいたく醉ひて同じことしたる聞き居たるをも知らで人の上いひたるそれは何ばかりならぬ使人なれどかたはらいたし旅立ちたる所近き所などにて下衆どものされかはしたる憎げなる乳兒をおのれが心地にかなしと思ふままにうつくしみ遊ばしこれが聲のまねにていひける事など語りたる才ある人の前にて才なき人の物おぼえ顔に人の名などいひたる殊によしとも覺えぬわが歌を人に語り聞かせて人の譽めし事などいふもかたはらいたし人の起きて物語などする傍にあさましう打ち解けて寢たる人まだ音も彈きととのへぬ琴を心一つやりてさやうの方知りたる人の前にて彈くいと疾う住まぬ聟のさるべき所にて舅に逢ひたる。(八十三段)

【解說】　笑止なもの　客人などにあつて話をしてゐる時に、奥の方で無遠慮な(不謹慎な話で極親しい人に聽かせるのは兎も角、客人にきかれると顏が赤くなるやうな話)事を人の言ふのを、來客の手前、制し兼ねて聞いてゐる心地。わが愛する男が、ひどく酒に醉つて、同じ言を繰かへし言つたのや。又その人が聽いてゐるのをも知らないで、噂をしたも、きまりがわるい。それはどれ程でもない召使人ではあるが、氣の毒に感ずる。旅した所や自分の傍近い所などで、下衆どもが戯れあつたのや、醜い幼兒を親なる自分の心地に、可愛いと思ふにつれ、可愛がり遊ばし幼兒の聲の眞似で幼兒の言つた事などを話つたも、(笑止である。)學問のある人の前で、學問のない人が物知り顏に、古人の名などをいつたのも。格別によいとも思はれぬ自分の作つた歌を、他人に話し聞かせて人の譽めた事などをいふのも、きゝ苦しい。人が起きてゐて物語などする側で、あきれるばかり打解けて寢てゐる人も、そば恥しい。まだ調子もろくに整へない琴を、得意になつて(心をやる。萬葉時代の意は慰めること、平安朝では得意の意に用ひる例が多い)その方面に精通してゐる人の前で彈くのも。又ずつと以前から娘の許へ來なくなつた聟が、晴れの場所で、舅に行きあつたのも(笑止である)。(最後の例など奇拔である。)

【問題】　五日のあした宮司に車のこといひて北の陣より五月雨は咎めなきものぞとてさし寄せて四人ばかりぞ乘りて行く羨しがりて今一つして同じくはなどいへといなと仰せらるれば聞きも入れず情なきさまにて行くに馬場といふ所にて人多く騷ぐ何事するぞと問へば手番にて眞弓射るなりしばし御覽じておはしませとて車とゞめたり左近の中少將皆着き給へるといへどさる人も見えず六位などの立ちさまよへばゆかしからぬ事ぞはやく過ぎよとて行きもてゆけば道も祭の頃思ひ出でられてをかし(八十六段)(大正五年第三十回本試驗)

【解說】　五月五日の朝、中宮職の役人に、清少は牛車の支度をいひつけて、五月雨の折に限つては、いつもとちがつ

て裝束も濡れることだから、差支が無いものぞといつて、車をば職の御曹司の階際にさし寄せさせて、女房四人ほど、その車に乘つて、朔平門から出かける。他の女房が郭公聽にゆくのを羨しがつて、も一つ車を仕立てゝ、同じ行くのならばいつしよに行きたいなどいふが、中宮は否と仰せられるので、清少等は他の女房達の懇望を耳にも入れず、同情の無い風で行くと、ウマバといふ所で、人がたくさんさわぐ。「何事をするのか」と問ふと、「てつがひで大弓を射るのです。暫く御覽なされてお出でなさいませ」と車副ひの男が言つて車をとゞめた。「左近の中將や少將が皆着座なされてゐるよ」といふが、見るとさういふ人もなくて、六位などの者が徘徊するから、「見たくもないことよ。早く通り過ぎよ」と清少が言つて、ずん〳〵行くと、途中も賀茂祭の頃が自然に想ひ出されて面白い。

【備考】　故事は確に說明すべきである。此の問題は故事有職を除いては平易である。(イ)馬場　ウマバ。左近の馬場は一條西洞院右近のは一條大宮と河海抄にある。五月五日は左近の眞手結だから左近の馬場である。(ロ)手つがひ　手は弓を射る人のこと。左と右に番ひ分つて爭はすからかくいふ。騎射賭射(のりゆみ)の式日前に行ふ演習で、荒手番(下げいこ)と眞手番(眞剣勝負)との二種がある。五月三日左近の荒手番、四日は右近のそれ。五日左近の眞手番、六日右近のそれ。(大日本國語辭典及び廣文庫六册五二頁參照)

【問題】　七日の若菜を人の六日にもてさわぎ取り散しなどするに見も知らぬ草を兒どものもて來たるを何とかこれをばいふといへどとみにもいはずいさなどこれかれ見合はせて耳無草となむいふといふ者のあればうべなりけり聞かぬ顏なるはなど笑ふに又をかしげなる菊の生ひたるをもてきたれば

つめどなほみゝなし草こそつれなけれ

あまたしあればきくもまじれり

といはまほしけれど聞き入るべくもあらず(百十二段)(明治三十二年第十二回豫備試驗)

【問題の見方】　耳無草と耳が無いとの言ひかけ、菊と聞くとの言ひかけ。

【解說】　正月七日に用ひる若菜を、或る人が六日にもてはやして、取りちらしなどするに、兒等は眞似て、若菜で無い見知らぬ草を清少の所へもて來たのを、清「これは何といふか」と尋ねるが、兒等は急にも返事をしないで、「サア何といひますか知らん」といつて、あれこれ顏見合せて「耳無草とまあいひます」といふ者のあるから清「聞かない顏でゐるのは尤であるわい、耳がないのだもの」と笑ふに、又趣ある菊の生えたのを持つて來たので、

いくら抓つても(摘むに言ひかける)やはり耳無草の名のやうに耳のない子は平氣でゐる。しかし多數の中には、わたしのいふことを聞くその菊もまじつてゐる。

といひたいが子供で聞いてもわかりさうもないからやめた。

【問題】　頭の辨の職にまゐり給ひて物語などし給ふに夜いと更けぬあす御物忌なるに籠るべければ丑になりなば惡しかりなむとてまゐり給ひぬつとめて藏人所の紙屋紙ひきかさねて後のあしたは殘り多かる心ちなむする夜をとほして昔物語も聞え明さむとせしを鷄の聲に催されてといといみじう清げにうらうへにこと多く書き給へるいとめでたし御かへり事にいと夜ふかく侍りける鷄のこゑは孟嘗君のにやと聞えたれば立ちかへり孟嘗君の鷄は函谷關を開きて三千の客わづかに去れりとあれどもこれは逢坂の關の事なりとあれば

夜をこめてとりのそらねははかるとも
　　世にあふ坂の關はゆるさじ

心かしこき關守侍るめりと聞ゆ立ちかへり
　あふ坂は人こえやすき關なれば
　　とりも鳴かねどあけて待つとか

とありし文どもをはじめのは僧都の君の額をさへつきて取り給ひてきのち〳〵のは御前にさて逢坂の歌は詠みへされて返しもせずなりにたるいとわろしと笑はせ給ふさてその文は殿上人皆見てしはとのたまへばまことにおぼしけりとはこれにてこそ知りぬれめでたき事など人のいひ傳へぬはかひなき業ぞかし又見苦しければ御文はいみじく隠して人につゆ見せ侍らず志のほどをくらぶるにひとしうこそはといへばかう物思ひ知りていふがなほ人々には似ずおぼゆる思ひぐまなくあしうしたりなど例の女のやうにいはむとこそ思ひつるにとていみじう笑ひ給ふ（百十七段）（明治二十一年第四回）

【解說】　藤原行成朝臣が職の御曹司に參られて私（清少）と話などをなさるうちに、夜がたいさう更けた。頭の辨が「明日は主上の御物忌であるから、自分は殿上に籠らねばならぬので、丑の刻（午前二時から四時まで）になつたらわるからう」といつて禁中に參られた。（たゞ十二時頃まで話をしただけ、他に何事も無かつた意である。）翌朝藏人所でつかふかうや紙（京の北、平野神社前に紙屋川がある。そこに紙屋院を置いて漉いた紙をいふ。薄黑色で薄墨紙とも綸旨紙とも宣旨紙ともいつて、詔勅宣旨を書くに用ひた紙である。「藏人所のかうやがみ」に清少の得意さが偲ばれる。）を幾枚もかさねて、頭辨「きぬ〴〵の朝はうしろがみの引かれる心地がします。終夜昔話でも申上げて明さうとしたのを、鷄の聲に別をせきたてられて歸りました」と非常に立派に、全く無い事をあるやうに反對に、色々な事柄をつくつて多く書きなさつてある、それが甚だ見事である。それで私からその返事に「大層夜ふけに鳴きました鷄の聲で、をしい別をしたと、あなたが言はれましたのは、それはつくりごとなので、齊の孟嘗君の食客のした似せどりでせう」と使で申上げました。すると折りかへしに、頭辨「孟嘗君の鷄は函谷關を開いて三千の客（この時食客三千人皆悉く伴うたのでない。行成の記憶の誤）がやつとのこと逃れ去つたと支那の書物にあるが、それはそれ。これはほんとに、おん身と交つた逢坂の關のことです」と消息があるので、

夜深く鷄の聲に催されて歸りましたなどと僞の鳥にかこつけて私をたばかつて、逢ひもしないのに逢つたやうにいはれますが、その手は函谷の關守の方はいざ知らず、私と逢つたといふことは決して私が許しません

逢坂には函谷とちがつて、心のすぐれた關守が居ります。（私には良心があります）と申上げる。すると折りかへして、

貴女がそれほどエラサウニいふ逢坂は、人の通り易い關だから（貴女は相手かまはず浮氣なさるので。）夜明けの鷄が鳴かなくても、常に開放して來る人を待つとか聞いてゐます。

とあつた手紙どもを、最初のは僧都の君、隆圓樣（中宮の御弟、道隆の四男、正暦四年年十五にて權少僧都となる。）が禮拜までしてお取りになつた。（行成の筆蹟の如何に價値あるかを示す。）のち〳〵の手紙（孟嘗君の鷄は云々と

あふ坂は人こえやすき云々との手紙)は中宮樣にお取りあげになつた。

さて頭の辨は「逢坂の歌は私に詠み負けして、返歌もせずなつてゐる、それは甚だいけない」といつてお笑ひになる。又頭の辨は「さてあなたの手紙(いと夜深く侍りける云々と夜をこめて云々との二つ)は殿上人が皆見てしまつたよ」(自分が皆に見せた意)と仰しやるので、清少「お身が私をほんたうに愛してゐて下さつたとは(反對に皮肉つた言)私の手紙を殿上人に見せたことで知りました。立派なことなどを世人が言ひ傳へないのは、努力もむだなことですぞよ。又お身の御消息は見苦しいから、ひどう隱して、他人に少しも見せません。(すべて反對にいふ。)お互の志の程度を比べますと、同等でありませう」といふと、頭辨が「かう物事を辨へ知つていふのが、やはり普通の人達には似ない(行成からこの評語を得た清少の得意思ふべしだ。)と思はれるよ。(連體形どまりは餘情を籠む。)思ひやりなくわるうしたなど、世間並の女のやうに、言ふことだらうとほんに思つたのに」といつてひどくお笑ひなさる。

【備考】　武藤元信枕草紙通釋は、このところ本文も解釋もともに甚しい誤謬があるやうに見受ける。參考するならそのつもりで見よ。

夜をこめての歌については、「はかる」の主語を行成とした。諸註「食客が函谷の關守をたばかる」とあるが、自分はそれを採らぬ。文意のつゞき工合から考へると、八代集抄の師說云がよく見てゐると思ふから引用する。「夜ふかきに僞の鳥をなかせてたばかり給ふとも此の逢坂は函谷の如くにはゆるさじと也。彼の行成の夜深く歸りたるを陳じて鳥の聲に催されてと僞り宣ふを、さやうの僞にはかられては逢はじとの心也」(六合館八代集抄上二百十一頁)「よに」迄旨の說は助字と見る。「許さじ」にかゝる副詞と解した。「あふ坂の關は」の「は」は對照の意。函谷の關と逢坂とを比べて、函谷の關は許すともこの逢坂の關の方は許さじの意である。「はかるとも」の「とも」は假定の意、鳥のそら音を孟嘗君の故事と見ては「とも」は輕すぎる。「鳥のそらね」は行成の甘言「鷄の聲に催されて」を受けたものと解する方正しからう。「夜をこめて」の副詞的修飾連語は「はかる」にはかゝらぬ。「そらねをした」即ち「そらね」の下に省かれた動詞にかゝる。行成が「鷄の聲に催されて」といつた心中には、まだ函谷の鷄明のことを思ひ浮ばなかつたさらう。それを聯想して故事をもち出したのは清少である。私はかう解きたいのである。春曙抄頭註遣遙軒云の說に據りたいと思ふ。

【問題】　五月ばかりに月もなくいとくらき夜女房やさぶらひ給ふと聲々していへば出でゝ見よ例ならずいふは誰ぞと仰せらるれば出でてこは誰ぞおどろおどろしうきはやかなるはといふに物もいはで御簾をもたげてそよろとさし入るるは呉竹の枝なりけりおいこの君にこそといひたるを聞きていざやこれ殿上にゆきて語らむとて中將新中將六位ともなどありけるはいぬ　(明治三十六年第十回豫備)

頭の辨はとまり給ひて怪しくいぬる者どもかな御前の竹を折りて歌よまむとしつるを職にまゐりて同じくは女房など呼び出でてをといひてきつるを呉竹の名をいととくいはれていぬるこそをかしけれたれが敎をしりて人のなべて知るべくもあらぬ事をばいふぞなどのたまへば竹の名とも知らぬものをなまねたしとやおぼしつらむといへばまことぞえ知らじなどのたまふ(百十八段)(初より大正九年第三十四回本試驗)

【解説】　五月頃曇りがちで月光も見えずに甚だ暗い晩「女房が伺候してゐられますか」と大勢の聲々でいふので、中宮が「出て見よ常とかはつていふのは誰か」と仰せられるから、私(清少)が出て、「これは誰ぞい、仰山に際立つていはれるのは」といふと、何も言はないで殿上人が御簾を持上げて、そろつとさし入れるのは呉竹(葉が細長く節の繁い竹の一種)の枝であつたわい。「おや、この君でしたか」と自分がいつたのを、かの大勢が聞いて「さあこのことを殿上にいつて話さう」といつて中將や新中將外に六人の藏人などゐたのは去つた。

頭の辨藤原行成だけがとまりなされて、「けしからず去つた人達であるよ。清涼殿のお前の呉竹を折つて、それを題で歌をよまうとしたのを、同じよむのなら、職に參つて女房などを呼び出してまあ、歌をよまうといつて來たものを、呉竹の異名をすばやく言はれて、あなたの頓才に閉口して往つたのが面白い。貴女は一體誰の教を覺えてゐて、「この君」などいふ人が普通に知りさうもない事をいふのか」など仰しやるから、「この君といふこと、それは竹の名とも存じませんでいつたのですのに、生意氣な小憎らしいと思召したでせう」と自分がいふと、頭の辨が「知らないといふのは、そりや本當ぞよう知るまい」など仰しやる。

【備考】　春曙抄頭註此君は竹の名也。晉の王子猷空宅の中に寄居して竹を植ゑて、嘯詠して曰く「何可二一日無一此君一」この故事にていふ也。又和漢朗詠集雜の竹部にも晉騎兵參軍王子猷栽稱二此君一唐太子賓客白樂天愛爲二吾友一。翁竹冬青序藤篤茂とある。

【問題】　圓融院の御はての年皆人御服(ぐ)ぬぎなどしてあはれなる事をおほやけより始めて院の人も花の衣になどいひけむ世の御事など思ひ出づるに雨いたく降る日藤三位の局に蓑蟲のやうなる童の大きなる木のしろきにたて文をつけてこれ奉らむといひければいづこよりぞけふあす御物忌なれば御都もまゐらぬぞとてしもは立てたる蔀のかみより取り入れてさなむと聞かせ奉れど物忌なればえ見ずとてかみについさして置きたるをつとめて手洗ひてその卷數とこひて伏し拜みてあけたれば胡桃(くるみ)色といふ色紙の厚肥えたるをあやしと見てあけもてゆけば老法師のいみじげなる手にて

これをだにかたみと思ふに都には
葉がへやしつる椎柴の袖

(百十九段)(明治三十六年第十六回豫備)

【解説】　十三歳の一條帝と十七歳の中宮とお二方で主上の御乳母藤三位をからかひ遊ばした話。父帝圓融院樣の諒闇の御果ての年、皆の人が御喪服を脱ぎなどして、(君の喪ゆゑ御ぶくといふ)最早これが故院御名殘の果かと、事新しく悲哀を感ずる事であるので、(「事を」は「ことなるを」の意。「を」は接續助詞普通は逆態なれど、こゝは順態の意。)禁中から始めて院に奉仕の人達も、遍昭が仁明帝を慕ひ奉つて詠んだ「花の衣」などいつた昔の御事、(それはこの際最も似合しい床しい事)など思ひ出すに、雨のひどう降る日主上の御乳母藤三位(名は繁子藤原師輔の四女)の局に、蓑を着た樣がまるで蓑蟲のやうな童が、大きな木の白いのに、(春曙抄の傍註に「椎の葉の白きにや」とあるによる。)立文をつけて(結び文は當時艶書に用ひ、立文は正式の場合に用ひた。)「これを奉りませう」といつたので、取次の女房が、「どこからの御消息ですか、今日明日は主人の御物忌だから、御都も上げないでゐるぞ」といつ

て、下の方は立てたまゝの部の上から受取つて、かやうに御消息が參りました(さなむの下侍るを省く)とお知らせ申すが、三位が「物忌だからよう見ない」といつて、長押の上にさして置いたのを、翌朝手を洗ひ清めて「昨日受取つたその卷數(物忌だから祈禱をさせに遣したと見える。その祈禱のお札が來たと早合點なされたらしい。春曙抄の旁註に歌とは知らで、祈念の卷數と思ふ也とある。經文陀羅尼等をどれだけよんだか、その卷の數を記して願主におくる文書)を」と乞ひ取つて、伏し拜んであけて見ると、クルミ色をした色紙の厚いのを、卷數にしては變だなあこれは怪しいと見てあけて行くと、年老いた法師の甚だ力のない筆跡で、

せめてこの喪服だけでも故院の御かたみと思ひ奉つて、この山里では脱ぎかねるのに、都では最早お脱ぎなされて、花の衣になられたか知らん。(椎柴は椎のこと、喪服の染料だから、椎柴の袖は喪服のこと。薬がへは喪服を脱いで花の衣にかへることを、椎柴といつた縁でかくいつたのである。)

【備考】　一、古今集哀傷の部に「みな人は花の衣になりぬなりこけの袂よかわきだにせよ」とある。苔の袂は隠者の服のこと。

二、春曙抄に椎柴の袖とは八雲御抄に四位の異名云々、服をだに故院の形見と思召すに、藤三位は服ぬき加階せしよと也。藤三位四位より加階せしなるべし。山僧のせしやうに麁と都にはと也とある。參考の價値がある。

【問題】　八幡の臨時の祭のなどりこそいとつれ〴〵なれなどて還りてまた舞ふわざをせざりけむさらばをかしからまし祿を得てうしろよりまかづるこそくちをしけれなどいふを上の御前に聞し召してあす還りたらむ召して舞はせむなど仰せらるるまことにやさぶらふらむさらばいかにめでたからむなど申すうれしがりて宮の御前にもなほそれ舞はせさせ給へと集りて申しまどひしかばそのたび還りて舞ひしは嬉しかりしものかなさしもやあらさらむとうちたゆみつるに舞人お前に召すを聞きつけたる心ち物にあたるばかり騒ぐもいと物ぐるほしく下にある人々惑ひのぼるさまこそ人の從者殿上人などの見るらむも知らず裳を頭にうちかづきてのぼるを笑ふもことわりなり(百二十三段)(大正三年第二十八回本試驗)

【解說】　三月中の午の日に行はれる男山石清水の臨時の祭のあとが何よりも實に淋しいものである。宮から禁中へ還つて、も一度舞ふこと卽ち還立をどうしてしなかつたのだらう。それをするなら面白からうものを、しないで纏頭(かづけもの、賞)を頂いて、後の者から退出するのがあきたりない」など女房達がいふのを主上がお聞き遊ばされて、「明日舞人等が歸つたらそれを召して舞はせよう」など仰になるよ。(連體形どまりは流布本によつたのである。餘情籠ると見る。)それを承つて女房達は「ほんたうでございませうか。お舞はせになるならどんなに結構でございませう」など申上げる。うれしがつて又中宮樣に對つても「やはりそれをお舞はせ遊ばせ」と女房達が多く集つて申しさわいだので、その時還立をしたのは嬉しかつたことよ。あゝは仰せになつても、先例のないことですから、舞はせることもなからうかと、氣を弛めてゐたのに、舞人をお前にお召しになるのを聞きつけた時の心地、それはどんなでせう。物にぶつかる程にあわて騒ぐさまも、甚だ狂氣じみて、自分の部屋に下つてゐる女達のあわてて上る樣子が大變だ。人の從者や殿上人などの見るのをも知らず、腰につける裳を頭に被つて(そんなにあわてて)上るのを、傍で笑ふのも道理である。

【備考】　賀茂の臨時祭(十一月下の酉の日)の還立の樣を記した次にこの文がある。

【問題】 二十六回「心もとなきもの人のもとにとみのものぬひにやりて待つほど物見に急ぎ出でゝ今や今やとくるしう居いりつつあなたをまもらへたる心ち子産むべき人のほど過ぐるまでさるけしきのなき十四回「遠き所三十二回以下全部より思ふ人の文を得てかたくふんじたるそくひなど放ちあくる心もとなし」物見に急ぎ出でて事なりにけりとて白きしもとなど見付けたるに近くやり寄するほどわびしうおりてもいぬべき心地こそすれ知られじと思ふ人のあるに前なる人に敎へて物いはせたるいつしかと待ち出でたるちごの五十日百日などの程になりたる行末いと心もとなし十四回「とみの物縫ふにくらきをり針に絲つくるされどわれはさるものにてありぬべき所をとらへて人につけさするにそれも急げばにやあらむとみにもえさし入れぬをいで只なすげそといへどさすがになどてかはと思ひ顔にえ去らぬはにくささへ添ひぬ」何事にもあれ急ぎて物へゆくをりまづわがさるべき所へゆくとて只今おこせむとて出でぬる車待つほどこそ心もとなけれ大路いきけるをさなりけると喜びたれば外さまにいぬるいとくちをしまして物見に出でむとてあるに事なりぬらむなどいふをきくこそわびしけれ（百四十一段）（明治三十四年第十四回本試驗。大正元年第二十六回本試驗。大正七年第三十二回本試驗）

【解說】 まち遠いもの（これは題）人の許へ至急にいる物を縫ひにやつて待つ間が心もとない。祭などの見物に急いで出てもう來るかもう來るかと、待ち苦しく棧敷に入りこんで、くる方を見つめてゐる心地。子を產む苦の人がその時期の過ぎるまで產むやうすのない。遠ざから愛する人の手紙が屆いて、かたく封じた縫飯をとり放ちあけるのがじれつたい。物見に急いで出て、「練物が渡る時刻になつた」と見えて、警固のため先驅をする看督長（檢非違使に屬する官人）のもつ白い杖などを見つけたのに、自分の車を物見の棧敷近く引きよせさす間は、つらくて、車からおりてまあ驅出しさうな心地がする。自分のこゝに居ることを知られまいと思ふ人の來た時に、自分がかくれて居て、前に居る人に指圖して、不在の挨拶を言はせたのは、うまくいつたか、結果が心許ない。早くと待つて生れた乳兒の五十日百日などの頃になつた前途、大層待遠い。急の仕立物を縫ふに暗い時、針に絲を通すのが、待遠い。しかし自分が通すときの心もとなさは、勿論のこととのけて置いて、針のありさうな縫掛けた所を抑へて、他の人に絲を通させると、その人も氣がせくからでせうか、急にまあ通し得ないのを、自分がはがゆく感じて、「いやもう、そのまゝ絲をすげないで下さい」といふけれども、「でもどうして、折角の依頼をそのまゝで置かれようかい」といふ面もちで、よう立ちのかないのは、じれつたいうへに憎さまでもが加はる。祭行幸其他何事にもあれ、急いで出かけようとする折に、朋輩が來て「あなたより先に、私が或る所へ行くから、貸して下さい、すぐよこしませう、御迷惑はかけません」と言つて乘つて出ていつたその車を、くるか來るかと待つ間が待遠い。大路を通つたのを、「あゝ還つて來たのか、やれうれしや」と喜んでゐると、すうつとほかの方へ過ぎてゆく、それは甚だくちをしい。まして物見に出ようとしてゐる時に、「行列がわたります」などいふのを聞くのが、何よりもつらい。

【備考】 「さるものにて」はいふに及ばずの意。口譯は鈴木脳の雅語譯解によつた。この文婦人の觀察だけに、縫物やお產や乳兒や針に糸を通す事など男子の考へにくい方面に筆を染めてある。しかし愛人の手紙や牛車のことが一段と奇拔で、實に最後のなどはよくいつてある。「外ざまにいぬるいと口惜し」目の前に見るやうに感ずる。そこへ「事なりぬらむ」云々は、千鈞の重みが

ある。

【問題】　宮に始めて參りたるころ物のはづかしき事數知らず涙も落ちぬべければ夜々まゐりて三尺の御几帳のうしろにさぶらふに繪など取り出でゝ見せさせ給ふだに手も得さし出づまじうわりなしこれはとありかれはかゝりなどのたまはするに高坏に參りたるおほとの油なれば髪のすぢなどもなか〳〵畫よりはけさうに見えてまばゆけれど念じて見などすいとつめたき頃なればさし出ださせ給へる御手のわづかに見ゆるがいみじうにほひたる薄紅梅なるは限なくめでたしと見知らぬさとび心ちにはいかゞはかかる人こそ世におはしましけれと驚かるゝまでぞまもり參らする曉にはとくなど急がるゝ葛城の神もしばしなど仰せらるゝをいかで筋かひても御覽ぜられむとて臥したれば御格子もまゐらず女官參りてこれはなたせ給へといふを女房聞きてはなつを待てなど仰せらるれば笑ひてかへりぬ。

【解說】　中宮樣の御殿へ御奉公に始めて參上いたした時分は、何かにつけて恥しいことが、數の知れぬ程多くあつて、涙もこぼれさうなので(男まさりの清少が初々しさの告白はかはいらしい。)畫は引込んでゐて夜な夜な參つて、中宮の御側の三尺の御几帳の後に伺候してゐると、中宮樣が繪など取りだしてお見せ遊ばすそれさへ、私は手もさし出し得ない程、無暗に恥しい。(「さし出づ」は自動詞だが他動に意譯した。)「この繪はかうある、あの繪はあゝある」など、仰せられるに、たかつきに灯した燈火であるから、低く近くて、髪の毛筋なども晝間に比べて、それよりも却つて、あらはに見えて、恥しいけれどこらへて、その御繪を見などする。(中宮御齢十六、清少二十四五又は六位、初參の清少の機嫌をおとり遊ばす御志、君臣水魚の交り、もうこの時から表れてゐる。)甚だ冷い時分なので、御出し遊してゐられる御手が、袖口からほんのちよつと伺はれるのが、ひどく美しい薄紅梅色なのは、この上なく結構だと、まだ見馴れない田舍人なる私の心持に、どうしてかうまで御綺麗であらう。かういふ美しい方が、ほんに世の中におあり遊ばしたわいと膽をつぶすまでに、じつとお見詰め申上げる。(清少の辭を極めて中宮を賞讃景慕する其の一、しかもその最初)曉になると早く部屋へ下りたいと念がれるよ。(連體形どまりは餘情を籠めたので、こゝは清少の心中、その心が表振に見えたと思しく)中宮は「夜のみ姿を現す葛城の神(清少が夜だけ伺候するので、戯れ遊されたお言葉。)も今しばし」など仰せられるので、(「を」は接續助詞。ここは順態の意。)辭し兼ねて、「どうかしてせめて眞正面でなく、筋交ひでお目に入らう。」と思つて臥してゐるので、御格子もまだあげない。女官が參つて、「これ(格子)おあげなさいませ」といふのを、女房が聞いて、あげるのを中宮は「待て」など仰せになるので、女房は、少しの間でも清少を、お側に置きたい中宮の御心を合點して、笑つて立ち去つた。

【備考】　高坏。平安朝の高杯の形は唐より來たものと見える。京大考古學陳列室に、朝鮮のと唐のと二種類あるが、前者は似てゐない。全く唐の高杯そのまゝの形をしたのが、平安朝の高杯である。これを上と下と反對にして(ころげない爲めに)油を入れたのである。「けさう」は顯證「ん」を略し、拗音を直音に唱ふ。葛城「かづらき」江戸時代からは「かつらぎ」と發音し、今紀州でもかくいふが、古は「づ」を濁り「き」を清む。言の泉は新しい方により、大日本國語辭典は古の方による。謠曲鞍馬天狗でも後者に發音する。意味は春曙抄頭註參照。

【問題】　わろき物は詞の文字あやしくつかひたるこそあれただもじ一つにあやしくもあてにもいやしくもな

るはいかなるにかあらむさるはかう思ふ人よろづの事にすぐれてもえあらじかしいづれをよきあしきとはしるにかあらむさりとも人をしらじたゞさうちおぼゆるもいふあり難義の事をいひて其の事させむとすといはむといふをと文字を失ひてたゞいはむずる里へ出でむずるいへばやがていとわろしまして文をかきてはいふべきにもあらず物がたりこそ惡しう書きなどすれば言甲斐なくつくりびとさへいとほしけれなほす定本のまゝなど書きつけたるいと口惜しひてつくるまになどいふ人もありきもこむといふ事を見むとみないふめりいとあやしき事を男などはわざとつくろはでことさらにいふはあしからずわがことばにもてつけていふが心おとりする事なり(二百四十三段)(昭和二年高等教員試驗問題解釋)

【問題の見方】　「わろき物は」といふのが題であるか、否かを見る。もし之を題とするならば次々へわるい物を並べたてる筈である。然るにこの文は徹頭徹尾詞の遣方と文字とに關したことだけで他に何物もない。そこでこれは題でなくて提示格である。力を入れる爲めに初に提げ出したのであつて、意味は「詞の文字あやしくつかひたるこそ、わろきものにこそあれ」と解すべきである。春曙抄本文の傍に小く「わろくあれと也」と註してあるのが良い。次に「あやしくもあてにもいやしくもなるは」の三つを並列に取扱つて解釋してあるのを見受けるが、それは誤である。あやしくもは程度副詞で「あてにも」及び「いやしくも」の兩方にかゝるのである。「不思議に思ふ程上品にも又變に思ふ程いやしくも」といふ意味に解くべきである。これも春曙抄本文の傍に細字で「心得がたくおもふ心也」と註があるのに從ふべきである。「まして文をかきては」云々の前は詞づかひを述べ、その後は文字の書き損じについていひ、「もとむといふ事を」云々から又詞づかひの話になるのである。それを誤解して「一つ車」などと本文を變更したのが、武藤元信である。發音の方にとつたのであるが、それはいけない。文字の書き間違の話である。

【解說】　詞の文字を變につかつたのが、何よりわるいものである。(提綱)たゞ文字一つで不思議な位上品にも又いやしくもなるのは、どういふわけであらうか。文字の力は恐しいものである。詞の文字一つの穿鑿をするが、しかしそれはかう思ふ人が、萬事にすぐれてゐるのでないよ。だからどれを善いわるいとは知らうか、それは知らない。だが人の上は關係しない。主觀的にたゞそのやうに思はれる人がさういふやうた。(自分を第三者の地位に置いて、人といつたから、「めり」を用ひた。)大切な難義の事をいつて、次にそれを「させんとす」又はこの事を「いはんとす」といふのを、「と」文字を略してたゞ「いはんずる」「里へ出でんずる」などいふと、そのまゝで他を聞かなくても甚だわるい。以上は詞づかひですが、ましてあと〳〵へ殘る文字を、そんなに惡しく書いては言語道斷のことである。物語などを間違つて書き寫しなどすると、實になさけなく、物語の作者に對してまでも氣の毒である。「こゝは間違つたから直す」とか、「定本(原本)のまゝにして置く。(實は詞のつゞき方が怪しいが)など物語本に書きつけてあるのが、甚だ殘念である。讀みつゝ本文に秘點をつける間に間違つたなどいふ人もあつた。それ等が書き誤りの一因である。「求む」とつかふべきところに「何々を見む」とみな人が言ふやうだ。甚だ變なことを男などは、わざと構はないで、知つてゐながら殊更に言ふのがわるくない。いやしい詞を我が常の詞にしていふのが、思ひ劣りする事である。

【備考】　「詞の文字」詞とは纏つたもので、その一つ一つは文字である。文章又は談話の單語といふほどの意、文字は、とくに亘

爾波（助動詞・助詞）を指す場合が多いが、さう狭くとるに及ばぬ。「もたげよ」を「もちあげよと」いふは文字一つあまる。下衆の詞には必ず文字あまりしたり」（四段）の文字もこの意味であらう。「ひて」はもと「かくし點」より發達し來たもので、漢文の讀方を人にかくして心覺えに送假名を書いたものである。文敎温故山崎美成著乾二十七枚參照。それが「ヲコト點」となり、文章の右側あたりに點をつけるのもいつたものである。こゝは漢文でないから、物語を讀んで、その妙所等に點をつけた批點と解する。「もとむといふ」云々「もとむ」と「見む」とは意味の似てゐるから誤用するのである。例へば「かの人を求む」といふべきを「かの人を見む」といふのである。

なほ枕草子で讀むべき箇所を左に掲げて、この文を終る。但し前の問題の段は全部讀まれたい。

七　上にさぶらふ御猫

二〇　涼殿の丑寅の隅の

二四　憎きもの　「下」わが使ふ者など「おはする」「の給ふ」などいひたる、いと憎し。こゝもとに「侍る」といふ文字をあらせばやと聞くこそ多かめれ

右の本文に前田家の枕草子（四六四頁）や校註日本文學大系第三卷の枕草子（六五四頁）には「わが使ふ者などの」と「の」文字がある。そこで召使が「おはする」とか「のたまふ」とかを主人の聽いてゐる所で自分のことや第三者のことにいふのが最憎い。「おはする」といふところに「侍る」と使はせたい。自分はかう解釋する。大方の批正を仰ぐ。

三二　小白河といふ所は

六四　職の御曹司に

六九　御佛名のあした

九〇　淑景舍春宮に參り給ふ

一〇三　正月に寺に參りたるは

一一〇　關白殿の黒戸より

一一六　故殿の御爲に

一二四　故殿などおはしまさで

一三九　羨ましきもの

一四四　この三月晦日

一九九　硯きたなげに

二三五　嬉しきもの

二三六　御前に人々あまた

二三七　關白殿二月二十日の程に

（段は金子元信氏の校註枕草子（明治書院發行）による。）

以上

增鏡より出てたる問題の解說

【問題】承平の將門天慶の純友康和の義親いづれも皆猛かりけれど宣旨にはかたざりき保元に崇德院の世を

みだり給ひしだに故院の御位にてうち勝ち給ひしかば天てる御神もみもすそ川のおなじ流と申しながらなほ時のみかどをまもり給はする事は強きなめりとぞふるき人々も聞えし又信頼の衛門督おほけなく二條の院をおびやかし奉りしも遂に空しきかばねを道のほとりに捨てられけるかゝればふりにし事を思ふにもなほさりともいかでか上皇今上あまたおはします王城のいたづらに亡ぶるやうやはあらむと頼もしくこそおぼえしにかくいとあやなきわざの出で來ぬるはこの世ひとつの事にもあらざらめどもまよひのおろかなるまへにはなほいとあやしかりし　（新島守）（明治四十二年第二十三回豫備）

【解説】　承平（朱雀天皇の御時の年號）の平將門や、天慶（同上）の藤原純友や康和（堀河天皇の年號）の源義親、これ等の謀叛人は、いづれも皆猛かつたが、しかし勅命には勝たなかつた。（皇威の強い事實をいふ、その一）保元年間に崇德上皇が兵を起して、世間をお亂しになつたのでさへも、故後白河院が當時現在の御位の力でお勝ちなさつたので、天照大神も同じ皇統とは言ひながら、やはりその時の天皇をお守り遊ばす事が強いやうだと古老達も申し上げた。（皇威の強き事實の第二。）又藤原の信頼といふ衛門府の長官が身分不相應にも、二條天皇を驚かし申したが、つゞいて果敢ない屍を道傍に捨てなされた。（皇威の強い第三の事實。）この通りだから、以上三つの古い例を思ふにつけても、やはりいかに北條方が強くても、上皇や帝の數多おはします王城がどうしてわけもなく負けて、亡びるやうなことがあらうか、さういふことが決してないと、何よりもたよりにおもつたのに、案に相違して、この通り甚だ道理の立たぬことの出來たのは、これも前世の因緣で、この世だけのことでも無からうが、心に迷のあるおろかな私には、やはり甚だ不思議に思ひましたよ。

【備考】　增鏡のこの評論は、甚だよく出來てゐる。親房の民治より打算する功利論の淺薄なのに比して、ずつと上である。「だに」平安朝以來「すら」の意に用ふ。將門純友義親に對して崇德院を比較し奉つた「だに」である。強い崇德院にすら勝ち奉つた。まして將門等の如き人臣には勿論の意である。「御裳濯川」伊勢の内宮の前を流れる川で、皇統にたとへいふ。崇德上皇も後白河天皇も同じ皇統であるがといふ意。川と流とは緣語。「給はする」の「する」は敬語助動詞で下二段活用、多くの場合は「給ふ」の上に置き、「せ給ふ」となるが、とゝは下に置いたのである。「聞え」いふの敬語動詞。事柄くも皇室に關したから「聞ゆ」を用ひた。御噂を申上げたの意。「おほけなく」大膽にも又は身に不相應にも、僭越にも大それた尊の意。「捨てられ」上に「屍を」とあり、衛門督ともあるから、敬語助動詞に解いて置いた。「さりとも」「さり」は「しかあり」でこゝは空しく指す。北條の強いのを指す意に解いて置いた。「いかでか……やは」反語の副詞と助詞二つ重ねた強い語氣であるから、「決して無い」と譯して置いた。「こそ」最強提示の助詞、「何よりも」と譯して置いた。「あやなし」筋の立たぬ意。末尾「あやしかし」と「り」を脱した本がある。

【問題】　初秋風のたちて世の中いとさものがなしく露けさまさるにいはむ方なくおぼしみだる故郷をわかれ路におふるくずの葉の秋はくれどもかへる世もなし

たとしへなくながめしをれさせ給へる夕暮に沖の方にいと小き木の葉の浮べると見えて漕ぎ來るをあまの釣舟かと御覽ずるほどに都よりの御消息なりけり墨染の御衣夜の御ふすまなど都の夜さむに思ひやり聞えさせ給ひて七條院よりまゐれる御文ひきあけさせ給ふよりいといみじく御胸もせきあぐる心ちすればやゝためら

ひて見給ふにあさましくもかくて月日經にける事今日明日とも知らぬ命のうちに今一たびいかで見奉りてしがなかくながらは死出の山路も越えやるべうも侍らぬなむなどいと多く亂れかき給へるを御顏におしあてゝ

垂乳根の消えやらで待つ露の身を
　風よりさきにいかでとはまし

八百萬神もあはれめたらちねの
　われまちえむとたえぬ玉の緒

初雁のつばさにつけつゝこゝかしこよりあはれなる御消息のみ常は奉るを御覽ずるにつけてもあさましうみじき御涙のもよほしなり　（新島守）（大正十二年第三十八回口述）

【解說】　初秋の風が吹きそめて、世の中が一層何となく悲しく、草葉にもまたわがみ袖にも、露や涙が置きまさるにつけて、言ひやうもない程に、後鳥羽上皇が悲歎になやみ遊ばされる。

くずの葉、それはわれ古里の戀しき人々と離れたあの別れ路に生えてゐたくずの葉が、秋風に吹かれてかへるだらう。それにわれはまあ、夏からこの隱岐の島に來て、その夏も過ぎ、秋がくるけれども都に還る時がない。（故郷を別れといふ助詞をわかれぢと名詞によみこんだのである。くずの葉が初秋の風にくるくるかへる。「葛の葉」と「かへる」とは緣語である。その秋が來れども、葛の葉ならぬ我が身はかへらずの意）から歌をおよみになつて、たとへやうもなくじつと見詰めておん物思に沈み遊ばす夕暮に、海上遙か沖の方に甚だ小い木の葉が浮んでゐるかと見えて此方へ漕ぎ來るのを海人の釣舟かさ疑ひ思つて御覽になるうちに、近づけばさにあらで、それは都から御たよりを齎した舟であつたわい。あの北の寒い島で墨染の僧衣を纏ひ、お粗末な夜具を用ひての院の御生活などを都の夜寒につけて、思ひやり申上げて、御生母七條院から奉つた御手紙を、院はひきあけ遊ばすや否や甚だひどく悲しくて御胸もこみあげる心地がするので、暫く間を置いて御覽になると、「わが身ながらあきれるほどにもかう悲しい思をして月日をすごし來たことよ。今日死ぬか、あすか分らないやうな老の身の、まだ生きてゐる中に、も一度如何にもして、お目にかゝりたうございます。このまゝでは、死出の山路も心殘りがして越えられさうもございません。」など甚だ多く亂れ（お心も亂れたのでお筆も）書きなさつたのを、御顏におしあてながら、

母上が死なずにわれを待ち給ふ露にも比すべき果敢ない身を、御存命中にいかにもしておとひ申したい。

多くの神々樣もあはれんで下さい。母上がわれを待ち得ようと絕えずに居るその心根を、あはれんで、命を加護し給へ。

初雁の渡り來るたよりにつけても、都のそこゝから感慨無量の御消息ばかりいつも奉るのを、御覽になるにつけても、あきれるほど悲しく、ひどく御涙を催す種である。

【備考】　「死出の山路」冥途にありといふ山みち。「垂乳根の」母の枕詞で、こゝは母の意となる。「消え・露・風」みな緣語。靈を散らす風の吹くよりさきにとは死なぬうちにといふ意。「まし」は假定の助動詞に用ひるが、こゝは意思である。母上を思慕遊した滿腔の熱誠を「いかでとはまし」で表はしたのである。「とはうものを、どうも覺束ない」と解しては不可。「雁の翼」は前漢の蘇武の故事、雁が匈奴に居る蘇武の手紙を持つて、上林苑に居る帝のお目にとまるやうに落したといふ。「常は」常にの意に用ひる。平家物語に多いつかひ樣である。

【問題】　さても源大納言通方の預り奉られし阿波院の宮はおとなび給ふまゝに、御心ばへもいときやうさくに、御かたちもいとうるはしく、けだかくやむごとなき御有樣なれば、なべて世の人も、いとあたらしき事に思ひ聞えけり。大納言さへ、暦仁の頃うせにしかばいよいよ心に仕う奉る人もなく、心細げにて、何を待つとしもなく、かゝづらひておはしますも、人わろくあぢきなう思さるべし。御母は、土御門の内のおとど通親の御子に、宰相の中將通宗とて、若くてうせにし人の御女なり。それさへかくれ給ひにしかば、宰相のはらからの姫君ぞ、御めのとのやうにて、瞿曇彌の釋迦佛養ひ奉りけむこゝちしておはしける。（三神山）

（大正五年第三十回豫備）

【解說】さてまあ源大納言通方がお預り申上げなされた阿波院樣（土御門上皇）の皇子（後嵯峨帝となられる御方）は御成人遊ばすにつれて、御心操も至つて聰明に、御容貌も最も端正に、上品で貴い御樣子であるので、阿波院樣御ゆかりの方は勿論のこと、世間一般にこのやうな御境遇を甚だ惜しいことに思ひ奉つた。ところが肝腎の大納言までも、暦仁（四條天皇の年號）の頃になくなつたから、今迄とても世から見離されてゐたが、一層忠實に御仕へ申上げる人は誰一人として無く、心細さうな御有樣で、何を期待するといふ事もなくて、さりとて出家もなさらずに、この世にかゝりあつてお出でるのも、皇子は外見わるくつまらなくお思ひなさることであらう。（後の御幸運を申上げる伏線として、抑へた筆づかひである。）御生母は土御門内大臣通親の御子の參議で近衛中將を兼ねた通宗といふて、若いうちになくなつた方の御娘である。（通子と申上げる。）その方までもまたお亡くなりなさつたから、宰相中將通宗の御同胞の姫君が、御乳母のやうな有樣で、恰も瞿曇彌がお釋迦樣をお育て申上げたやうな慈愛に滿ちた心もちで、お養ひ申上げました。

【備考】　「奉られし」の「れ」は通方に對する崇敬助動詞「る」の連用形。「きやうさく」は警策と書く。カウザクともいふ。もとは詩文の句のよいことで、轉じて物事のすぐれてよきことに用ひる。「策の馬を警しむるが若し」の字義で、人の注意を惹き、文勢を盛ならしめる語句をいふのが、原の意である。「うるはしく」麗麗といふ方よりも、むろしキット威嚴が備つて、端正な意味である。「聞え」崇敬助動詞「奉る」と同じく、自分が思ふのであるが、皇子に關係する上の敬語で、これを關係敬語といふ。奉る・まゐらす・拜む・上ぐ・申す等である。「瞿曇彌」「けうどんみ」とよむ。釋尊の姨母。憍曇彌とも書く。一に大生主又大愛道ともいふ。生母摩耶夫人は釋尊生後七日で逝かれたので、憍曇彌は御乘育申上げられた。その愛育至れり盡せりで實子の如く勢り、釋尊も亦母同樣に敬愛したといふ。大生主・大愛道の名のある所以である。

通親
- 通宗――通子――後嵯峨院
- 通方
  - 承明門院
  - 土御門院（「新島守」の「うき世には」の歌の少し前のところ參照。）

【問題】　春の初はおしなべてほどほどにつけたる家々の身の祝など心ゆきほこらしげなるにむ月の五日より内のうへ例ならぬ御ことにて七日の節會にも御帳にもつかせ給はねばいとさうぐしく人々おぼしあへるに九日の曉かくれさせ給ひぬとてのゝしりあへるいとあさましともいふばかりなし皆人あきれ惑ひてなかなか涙だにいでこず女御もいまだ童遊の御さまにていとうたていみじければうちしめりくむじて居たまへるいと

幼げにらうたし大殿の御心のうちおもひやるべし御せうとの若君も殿上し給へるただ御門のおなじ御ほどにて騒しきまでの御あそびのみにてあかしくらさせ給ひけるにかいひそみてむらがりゐつゝ鼻うちかみうち泣く人より外はなしかくのみあさましき御事どものうち續きぬるはいかにもかの遠き浦々にて沈みはてさせ給ひにし御歎どもの積りにやとぞ世の人もさざめきける。（三神山）（大正十四年第四十二回口述）

【解説】　仁治三年四條天皇御齢十二で崩御遊ばされた一節である。春の初は一般に、身の程々に應じた家々での身の祝など、思ふ存分に得意の樣子であるのに、正月五日の目出度い時から、主上が御不例で七日の白馬の節會にも御帳臺の玉座に御着き遊ばされないので、甚だ淋しく皆々禁中のさるべき方が思ひ合つて居るのに、九日の曉崩御遊ばしたといつて、大聲で騒ぎあつたのはひどくあきれるとも何とも言ひやうがない。皆の人はたゞあきれ途方に暮れて、却つて涙さへ出て來ない。女御（彦子）もまだほんの童遊をする程の幼稚な御有樣でこのあまりひどい悲みにあつたのだから、元氣なくしをれてゐられるのが、甚だ子供らしくかはゆらしい。大殿道家の御心中が思ひやられる。御兄の若君（忠家）も昇殿をしてゐられたのが、ほんに御門と同年輩で、騒しい程の御遊戯ばかりして、これまで朝な夕なを過ごして賑やかに居られたのに、崩御に際して、以前の陽氣な騒の面影もなく、禁中の誰もが、ヒツソリと隅などにひとかたまりになつてゐて、鼻をかみ涙を流す人より外のことはない。ほんにこんなに呆れ返るやうな不吉な御事（藻壁門院、後堀河帝四條帝と打つゞいての崩御）の續いたのは、どう考へても、あの遠島で御果て遊ばされた後鳥羽院土御門院の御歎の積つた御怨靈の祟であらうかと、世間の人も小聲で話した。

【備考】

良經――道家――教實――忠家
　　└彦子
　　└藻壁門院（後堀河天皇の皇后 四條天皇の御母）

【問題】　院の上鳥羽殿におはします頃神無月の十日頃朝覲の行幸し給ふ世にあるかぎりの上達部殿上人仕うまつるいろいろの菊紅葉をこきまぜていみじう面白し女院もおはしませば拜し奉り給ふを太政大臣見奉り給ふに喜の涙ぞ人わろきほどなる。

ためしなき我が身よいかに年たけて
　かゝるみゆきにけふ仕へつる

げに、大かたの世につけてだにめでたくあらまほしき事どもを我が御末と見給ふおとどの心ちいかばかりなりけむ來し方もためしなきまで高麗唐土の錦綾をたちかさねたり太政大臣ばかりぞねび給へれば裏表白き綾の下襲を着給へるしもいとめでたくなまめかし。（烟の末々）（明治二十年第三回試驗問題）

【解説】　後嵯峨院樣は鳥羽殿にお居り遊ばす頃、即ち十月十日頃、後深草帝は鳥羽の離宮へ朝覲の行幸をなされる。官途に仕へてゐる限りの上達部や、殿上人は御供に奉仕する。その裝束は時節柄、色々の菊や紅葉の模樣を打ち交へてひとく面白い。女院（姞子）も鳥羽離宮に居られるので、御對面になる前に、御拜の御禮をなさるのを、太

政大臣(實氏)が見奉りなされるにつけ、たゞもう嬉し涙で、人前のわるい程である。

ためしの無い程どんなに幸福な我が身であることよ。年老いてかういふめでたい行幸に今日御供をすることは。なるほどその歌の通りで、帝の御外祖父・女院の父君といふことから離れて、一通りの世につけてすら、結構で位人臣を極め理想的な事どもであるのに、まして、女院も帝も我が御子孫として御覽になる大臣の心地は、どれ程であつたであらう。さて主上院をはじめ奉り人々の裝束どもは、過去に例のないまで、高麗や唐土の最もすぐれた錦や綾の織物を着飾つてゐる。その中で太政大臣だけが、年を召して居るので、裏も表も白い綾織の下襲を着なされてゐるのが、甚だ結構に優美である。

【傳考】

公經――實氏――大宮院(姞子)――(後嵯峨皇后)――後深草院

「大かたの世」特別の關係を離れた、ひと通りおしなべての世「來し方もためしなきまで」云々、「たちかさねたり」と敬語を省いてゐる文から推すと、主上院女院の御裝束殿の外一般の人をも含む。「着給へるしも」皆が濃艶な中に表裏共に白いのが優雅に見えたのである。「しも」は「それが」の意。飛鳥川の卷に實氏失意のところと對象すると一段おもしろい。

【問題】　夜更け行くほどに御遊はじまる樂のひま〳〵に太政大臣公相土御門大納言通成など朗詠したまふ忠輔公顯聲加へたる程面白し川浪も更けゆくまゝにすごう月は氷をしける心地するに嵐の山の紅葉夜の錦とは誰かいひけむ吹きおろす松風にたぐひて御前の簀子にて御酒まゐるかはらけの中などに散りかゝるわざと艶なる事のつまにもしつべし若き人々は身にしむばかり思へりうち亂れたるさまに各御土器ども數多たび下る明けゆく空も名殘おほかるべし。(山のもみぢ葉)(大正十三年第四十四回口述)

【解説】　夜がふけ行く時に、管絃の御遊がはじまる。管絃の隙間隙間に太政大臣公相、土御門大納言通成などが、朗詠をなさる。それに忠輔や公顯の同吟した有樣が面白い。川浪も夜のふけゆくにつれて凄く、九月十三夜の月が恰も凜々として氷をしきつめたやうに冴えわたり、嵐山の紅葉の錦のうつくしさ。夜の錦で賞翫する人がないなどと誰が間違つて言つたことだらう。その紅葉が吹きおろす松風に伴はれて、院の御前の緣端で、御みきを酌み交す人達の盃の中などに散りかゝるのは、格段に風流な事のゆかりともすることが出來る。若い人々はそれを眺めて、身にしむ程うれしく思つた。うち亂れた有樣に皆が御盃を何度も頂く、かうして明けゆく空に對してもあまりの面白さに心殘りが多いであらう。

【備考】　九月十三夜(弘長三年)龜山殿の棧敷殿で御歌合を遊されて、その後の管絃の御遊の一節である。「月は氷をしける心地」

和漢朗詠集秋、八月十五夜(付月)秦甸之一千餘里凜々氷鋪漢家之三十六宮澄々粉飾。シンテンノ一千餘里、リンリントシテ氷シキ、カンカノ三十六宮、チョウチョウトシテ粉カザレリ。長安八月十五夜賦。(公乘億。)秦甸は周代の秦の地長安の四周をいふ。畿內千餘里の意。禮記王制にいふ。千里之內曰ゝ甸。甸服のこと。今宵八月十五夜の淸い月に照された、こゝ長安の都の有樣をいふと、秦の時の畿內千里の地は、氷をしき詰めたやうに冴えわたり、漢の時の三十六の宮殿は白粉を裝うたやうに澄みわたつて見えることよ。作者公乘億は魏の人賦に長ず。凜々は寒きさま。澄々は明かに澄んで見える形容である。この詩は枕草子二百六十段にも引用せられてゐる。八月十五夜の月の詩ではあるが月のゆかりで九月十三夜の當夜に應用したのである。忠輔公顯の同吟、公相通成の朗詠もこの詩などでなからうかと思はれる。「夜の錦」張合がない意。見る人もなくて散りぬる奥山の紅葉は夜の

錦なりけり。古今集秋歌下紀貫之。「誰かいひけむ」語氣の強いところを味へ。「夕べは秋と何思ひけむ」に似た言ひ方である。これほど持て囃れてゐる光榮ある紅葉を指して、誰が夜の錦などと、誤り唱へたであらう意である。「わざと」こと更に、とりわけての意にて「しつべし」にかゝる副詞。林間煖酒燒紅葉石上題詩掃綠苔これは白樂天が仙遊寺に題とある詩の聯句で秋興の題で和漢朗詠集秋の部にある。リンカンニ酒ヲアタタメテ紅葉ヲタキ、石上ニ詩ヲ題シテ綠苔ヲハラフ。酒と紅葉とは風流の緣であ（タイ）る。夜の紅葉どころか、殊更に求めて風流の緣にしようと思へば出來る風情である。白樂天の詩を頭に思うて言つた文である。

【題問】　まことやこの年頃前内大臣爲家の大納言入道侍從二位行家光俊の辨入道など承りて撰歌のさたありつる只今日明日ひろまるべしと聞ゆるおもしろうめでたしかの元久のためしとて一院みづからみがかせ給へば心ことに光そひたる玉どもにぞ侍るべき年月にそへてはいよいよほかざまにわくるかたなく榮えのみまさらせ給ふ御ありさまのいみじきにこの集の序にも大和島根はこれ我が世なり春風に德を仰がむとねがひ和歌の浦も亦我が國なり秋の月に道をあきらめむとかや書かせ給へりけるげにぞめでたきや。（山のもみぢ葉）（大正十三年第四十回口述）

【解說】　ほんにまあ、この五六年このかた、前内大臣基家や爲家の大納言入道や侍從二位行家や光俊の辨入道などが、勅命を蒙つて、歌集を撰するとりきめがあつた。それがもう今日あすに世に發表するだらうと噂があるのも、おもしろく結構である。この撰集はかの元久に後鳥羽院が御精選遊ばされた例に倣ふのだといつて、後嵯峨院御自身歌を御精選なされるから、格別に立派な和歌などであらう。（みがく・玉は緣語）年月のたつにつれて。一層外の御方に分けることなく、一院の御一筋だけに榮華を獨占なされる御有樣の素晴らしいにつけ、この撰集の序にも「日本國はこれ我がみ心のまゝの世である。春風の萬物を長養するを見ては、それに倣うて仁慈の德を施すこと古の聖王に仰ぎつがうと願ひ、和歌の道も亦わが力のうちにある。皎々たる秋の月の照れるを見ては、そのやうに敷島の道を明かにしよう」とかやお書き遊ばされてあるわい。實に結構なことであるよ。

【備考】　「侍從」「おもとひと」ともいふ。主上の御側に近侍する官で、多く大納言や中納言參議が兼ねた。大寶令では八人が定員であるが後冷泉帝の頃から人員が增して二十人程にもなり、要職ではあるが、位の卑い人もなる場合もあつた。「辨入道」太政官の辨官でゐたものの入道したるもの。「撰歌」續古今集なり。「元久のためし」增鏡おどろの下の卷にあり。

【題問】　今上（龜山）の若宮（後宇多）六月二十六日親王の宣旨ありて同じき八月二十五日坊に居給ひぬかく花やかなるにつけても入道（實氏）殿はあさましくおぼさる故大臣（公相）の先立ち給ひしなげきにしづみてのみ物し給へどかゝる世のけしきをかしこく見給はぬとおぼしなぐさむ中宮（嬉子）は御服の後も參り給はす萬ひきかへ物うらめしげなる世の中なり一院（後嵯峨）は御本意遂げ給はむ事をやう〳〵おぼすその年の九月十三夜白河殿にて月御らむずるに上達部殿上人例のおほく參りつどふ御歌合ありしかば内の女房ども召されていろ〳〵の引物源氏五十四帖のこゝろさまざまの風流にして上達部殿上人までも別ちたまはす院の御製

われのみや影もかはらむあすか川おなじ淵瀨に月はすむとも

かねてより袖もしぐれて墨染のゆふべいろます峰のもみぢ葉

この御歌にてぞ御本意の事おぼしさだめけりと皆人袖をしぼりて聲もかはりけりあはれにこそ民部卿入道爲

家判ぜさせられけるにも身をせめ心をくだきてかきやる方も侍らずとかや奏しけり。（あすか川）（大正十三年第四十回口述）

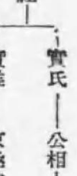
【解説】　今上龜山帝の若宮（御母は京極院佶子で宮は後に後宇多帝と申奉る）は六月二十日親王の宣旨を賜つて、同八月二十五日に春宮に立たれた。このやうに實雄の御孫に當る若宮の華麗な御さまにつけても、入道實氏殿（實雄の兄）は自分の方が榮えないので、心外にお思ひになる。實氏がその子（故大臣公相）自分より先に死んだ歎に沈んでばかり居られたが、「よくこんなつらい世の模樣を公相が早く死んで見なさらぬのが都合よいことである」と實氏が思ひ慰める。（實氏極度の悲歎のさまをいふ。）實氏の孫になる中宮嬉子は父公相の御服があいた後も、宮中に參上なされず（龜山帝の寵が嬉子を去つて、佶子に移つたのである。）萬事公相在世の時とは引きかはつて、實氏にとつて何となく恨めしさうな世の中である。（以上實氏の失意を叙す。）

後嵯峨院は出家の御本意をとげ遊ばすことを、段々お思ひになる。その年の九月十三夜、白河殿で月を御覽なさるにつけ、上達部殿上人いつもの如く多く參集する。その夜御歌合があつたので内（院に對していふ）の女房どもをお召になつて、いろ〳〵の贈物源氏五十四帖の意味をくさ〳〵の品物にかこつけて、風流な物につくり、上達部殿上人までにもわけ與へになる。院の御製

かはり易い飛鳥川の淵瀬には、たとひ同じ月かげがすみやどるにしても、自分だけは、在俗の姿も、かはるであらう。

峰のもみぢ葉が時雨で色のますやうに、自分が出家せぬ前方より墨染の衣を著ると思へば、名殘をしさに悲しい涙が出る。この御歌で、御出家のお思召をおきめなされたことよと、皆人袖をしぼつて聲もかはつた。あはれ悲しいことである。民部卿入道爲家に歌の優劣を判せしめられたにも、爲家は「わが身の上のやうに思ひ引きあて、斷腸の悲に堪へず、判の詞かきやるすべもございません」とか奏上した。

【備考】



「墨染」の　夕の枕詞で、墨染の衣の意を含めたのである。「夕いろます」峯の紅葉は、夕ばえするよりかくいふ。

【問題】　故時頼朝臣は康元元年に頭おろしてのち忍びて諸國を修行しありきけりそれも國々のありさま人の愁など委しくあなぐり見聞かむの謀にてありけるあやしのやどりに立ちよりてはその家ぬしがありさまを問ひ聞きことわりあるうれへなどのうづもれたるを聞きひらきては我はあやしき身なれどむかしよろしき主をもち奉りしいまだ世にやおはすると消息奉らむもてまうでゝ聞え給へなどいへばなでふ事なき修行者の何ばかりかはとは思ひながらいひあはせてその文をもちてあづまへ行きてしかじかと致へしまゝにいひて見れば入道殿の御消息なりけりあなかまあなかまとて永く愁なきやうにはからひつ。（草まくら）（明治四十三年第二十四回豫側）

【解說】　故時賴朝臣は康元元年に剃髪して後、人目を忍んで諸國を佛道修行をして遍歷した。さうしたわけも、國々の政治などの有樣や人民の愁歎などを委しく搜り求め見きかうとの計畫であつたよ。(深い內情まで探ぐるには、執權としての堂々たる旅では、決して効がないからである。)賤しい宿にたち寄つては、その家の主人のありさまを尋ね聞き、道理のある愁訴などの、わるい役人が妨げて上聞に達せず、表へ得もち出さずに居るのを聞き出しては、「自分は賤しい身だが、昔かなりな主人をもちました。その主人がまだ存命して居るかと思ふから、手紙を差上げよう。この手紙を持つて參上して、事情を申上げなさい」など言ふと、「何といふ大した事もない修行者が何程の事が出來ようか否駄目だらう」とは思ひながらも、互に協議して、その手紙をもつて、鎌倉へいつて、これ〳〵と時賴朝臣の敎へた通りに言つて見ると、それを聽いた役人は「これは入道殿の御たよりであるわい。あゝ大變なことだ」というて、永く心配の無いやうにとり計らつた。

【備考】　「故」コとよむ。死んだ人の名稱に冠らせていふ接頭語。朝臣　アソンとよむ。アソミの音便。姓の下にある場合はカバネを意味し。名の下にある時は敬稱となる。先代舊事本紀、序に「大臣蘇我馬子宿禰等奉勅修撰」とあるは僞書たる證據だといふ。本當ならば宿禰はカバネだから姓の下に置いて、「大臣蘇成宿禰馬子」とすべきであるといふのである。敬稱としては、公の次は卿で卿の次は朝臣である。四位から五位の人の敬稱である。後鳥羽帝の時に六位の人に朝臣をつけてはならぬといふ禁止の令が出たのを見ても、濫用したらしい。時賴は正五位下相模守であるから、濫用でない。康元元年、康元は建長の次の年號である。年三十で剃髪、三十七で卒した。愁、上古語としては四段の動詞より出來た名詞ウレヒなれども、中古語としては下二段に活用す。故にその連用形ウレヘである。ナゲキウツタヘルコト愁訴。「あなぐる」穴といふ名詞にクルがつきて生じたる動詞と思ふ。搜索穿鑿、揀擇。「ありける」連體形どまりは餘情を含めたのである。「ひらきては」上に「うづもれたる」とあるよりかくいふ。啓蒙の義。謠曲鉢の木佐野源左衞門常世などはこの例。「奉りし」連體形で形は切れて、意味がつゞく。「それは」と下へつゞく。「なでふ」品詞としては副詞といへぬ。體言につゞく副詞は少數の程度副詞だけである。句(連語)とすべきか。「何といふ」である。「入道殿の御消息なりけり」を地の文と見ないで獨語と見るを良いと思ふ。殿及び御の敬稱より考へる。

【問題】　四月の末つ方より法皇(後宇多)御惱み重くならせ給へば天下のさわぎ思ひやるべし。御門もいみじくおぼしなげき御修法どもいとこちたくまた〳〵はじめ加へさせ給へどしるしもなくて日々におもらせ給へば夜晝となくいかに〳〵ととぶらひ奉らせ給ふ若き上達部などは直衣に柏ばさみして夜中曉となく遙けき嵯峨野を寮の御馬にて馳せありき給ふめり今はむげにたのみ少きよし聞こゆれば大覺寺殿へ行幸あり萬の事ども聞こえさせ給ふうへの一つ御腹の二品法親王性圓と聞こゆるをいとかなしきものに思ひ聞こえさせ給ひて此の大覺寺にそこらの御莊御牧などをよせ給ふ法のあるじとしておはしますべくおぼしおきてけりさやうの事など見給へざらむあとうしろめたからぬさまなどぞ聞こえさせ給ひける。(春のわかれ)(第四十回大正十三年豫備)

【解說】(イ)【語釋】　「べ」し可能の助動詞。「れる」又は「できる」。「御修法」ミシホとよむ。ミシュホフの略。密敎である加持祈禱の法式である。國家の爲に降伏の御修法を行うたのは、新島守の卷に後鳥羽上皇が關東調伏の爲になされ、又あすか川の卷に元寇に對して異國調伏の爲に東寺の講堂で始められた。しかし多くは貴顯の方の病を癒さうとして行ふ。北野の雪の卷では西園寺の太政大臣公相の爲めに、あすか川の卷では後嵯峨法皇の御爲めに、又同じ

巻に「春宮(御宇多)例にもおはしまさで、日頃ふれば、内のうへ(龜山)御胸つぶれて御修法や何やと騒がせ給ふ」ともある。つげの小櫛の巻に龜山法皇の御爲めに、うら千鳥の巻に「内のうへ(後二條)例ならずおはしますとて、さま〴〵の御修法、五壇・藥師・愛染いろ〳〵の祕法ども」とあり、又中宮御産の前に行はれたのは、内野の雪の巻後深草天皇御誕生のところに稍詳しく書かれてある。當時の上流社會に密教が如何に重んぜられたか、又修法の效驗が多大の期待を以て迎へられたか、よくわかる。然れば下の文に「しるしもなくて云々」と承けたのである。「柏ばさみ」、文官が内裏燒亡など非常の時、又は急用の御使を承る折にする。老のなみの巻に日吉の社の訴訟勅裁がないとて、山法師が紫宸清涼兩殿へみこしをふり棄てたので、宇多天皇は腰輿で、近衛殿へ行幸された。その時殿上人ども柏ばさみして仕うまつたとある。非常時のしるしである。そのさまは國文學講座第六册江馬講師の有職故實三四頁の圖を參照されたい。白木ではさんだ、白と木と合字にすると柏になる。こゝは非常の急使を意味する。かの兵飛が十二の金子牌を奉じたのも、十二回の急の勅使をうけたことで、趣が似てゐる。「めり」實際その事を見ずに、幾分か、その材料を基本として想像したのである。「やうだ」と譯す。「行幸あり」後醍醐帝が。「いとかなしきもの」最愛のもの。「此の」=「大覺寺へ行幸あり」と上文にある。大覺寺での御詞ゆゑ「この」といふ。「牧」マキとよむ、ムマキ又はウマキの約、牛馬などを放ちがひにする處。「おぼしおきてけり」後宇多法皇が。「見給へさらむあと」崩御の後を今からいふ、故に「む」と未來の助動詞を用ふ。「たまへ」と下二段の自卑敬語を用ひたのは後宇多法皇が後醍醐帝に申された御言葉だからである。「うしろめたからぬさま」氣がかりにならぬやうに御願申上げたいなどの意。さまの下に詞を省いたいひ方である。「聞え」いふの敬語。帝に向つて申上げる意。「させ給ふ」後宇多法皇に對する增鏡作者の敬語の助動詞である。

(ロ)【通釋】　正中元年四月の下旬の頃から、後宇多法皇が御病氣重くおなりなされるので、日本中のさわぎは想像される。後醍醐帝もひどく御歎きなされ、御祈禱の儀式など、大層仰山にまたまた行ひ加へ遊ばすけれども、その効驗もなくて、日に日に重くなられるので、主上が夜となく晝となく、「御容態はいかゞあらせられますか」と使をもつて御見舞申上げなされる。年の若い公卿(大臣・大納言・中納言・參議)などは直衣の服裝に頭に柏ばさみをして、夜中となく曉といはず、禁中から遠い嵯峨野をば寮の御馬に乘つて、馳せあるき(御見舞に往來)するやうである。もはや一向に賴み少い趣を奏上するので主上は大覺寺殿へ行幸遊ばされ、御對顏になります。すると、法皇は色々の御物語を主上へ申される。主上と御同腹(該天門院)の二品法親王性圓と申す御方(法皇の第三子・主上の御弟)をこの上もなく、かはゆい方にお思ひ申上げて、この大覺寺にたくさんの御領地や御牧場を寄附せられる。そして性圓法親王が大覺寺の法主として、あらせられるやうに御きめ置き遊ばされた。さういふこと(可愛い性圓法親王の將來のこと)など、御自分のなくなりました後、氣がゞかりでないやうに、よろしく願ひ上げるなど、主上へ申上げなされた。

(ハ)【主意】　子の可愛さは貴きも卑きも同じこと。後宇多法皇が崩御に臨み主上へ法親王の御事を遺言遊ばされたこと。

【問題】　かの島におはしましつきぬ昔の御跡はそれとばかりのしるしだになく人のすみかもまれにおのづか

ら海人の鹽やく里ばかりはるかにていとあはれなるを御覽ずるにも御身の上はさしおかれてまづかのいにしへの事おぼしいづかゝる所に世をつくし給ひけむ御心の中いかばかりなりけむとあはれに辱くおぼさるゝにも今はた更にかくさすらへぬるも何によりて思ひ立ちし事ぞかの御心のするや果し遂ぐると思ひし故なり苔の下にもあはれとおぼさるらんかしとよろづにかきあつめつきせずなむ。（久米のさら山）（第二十九回大正四年豫備）（第三十三回大正八年豫備）

【解說】　後醍醐帝が隱岐の島に御着き遊された。昔後鳥羽院の居られた御跡は、それがかの御遺跡であると、しのぶだけのしるしさへもなく、人の家とても稀で、自然お目にとまるものとては、海士の鹽をやく里だけが遠くに在つて、この大層物悲しい景色を御覽なされるにつけても、わが御身の上の憂さは、自然第二として、眞先にあの後鳥羽院の御事が思ひ出し遊される。このやうな所で（「に」の下に「て」を省くは、平安文法に多くある格である。）一生涯を終へられたその御心中を想像すると、（けむ）どれ程悲しくあられたであらうと感慨無量に勿體なくお思ひになるにつけても、今御自分もまた、新にこのやうに遠島へ漂浪したのも、何が原因で決心した事ぞ（自問自答）後鳥院の御志の一端が、果し遂げるかと思つたからである。今の我が境遇を院も苔の下でかはいさうに思召すことであらうと、あれやこれや色々に物のあはれを集め、それからそれへと、追憶の絲を盡きせず辿る。

【問題】　安福殿の釣殿に床子立てゝ東面におはします上達部は簀子の高欄にせなかおしあてつゝ殿上人は庭に候ひあへるもいとえんなり池の御船さしよせて左右の講師隆資爲冬のせらる御みきなどまゐるさまもうるはしきことよりは艶になまめかし人々の歌いたくけしきばみてとみにも奉らずいと心もとなし照る月なみもくもりなき池のかがみにいはねどしるき秋のなかばげにいと異なる空のけしきに月もかたぶきぬ明方ちかうなりにけりうへの御製

鐘の音もかたぶく月にかこたれて
をしと思ふ夜は今宵なりけり

と講じあげたるほど景陽の鐘もひゞきをそへたるをりからいみじうなむいづれもけしうはあらぬ歌ども多く聞えしかど御製の鐘の音にまされるはなかりしにや（秋のみ山）（大正十一年第三十六回口述）

【解說】　秋のみ山の卷には後醍醐天皇御即位以後七ケ年間の事が書かれてある。この一節は帝の勝れ遊ばされてゐる事を御歌合について申上げ奉つたので、元亨元年の八月十五夜の事である。次に翌年正月三日朝覲の行幸の時に、帝躬ら御笛を吹かせられたそれもお勝れ遊された一つ、又みな月のころ中殿（清涼殿）で作文せさせられ、その時「うへの御琵琶の音、いひ知らずめでたし」。と作者が評し奉つてゐる。同年七月七日乞巧奠の御製。それから正中元年三月の二十日あまり石清水の行幸、四月十七日賀茂の社の行幸と、英明の主上が氣鋭く、進取的に華美にテキハキ遊ばす所を寫して以て北條御討伐が當然の歸結である事を匂はせたそも〳〵最初の皮切は、即ち安福殿の

釣殿の一節である。そのつもりで讀まれたい。安福殿は禁中紫宸殿の西南にあつて、東春興殿と大庭を隔てゝ相對する御殿である。當時は二條萬里小路に里内裏があつて、（鐘の音の御製の奥七八行の處にその記事がある。）その寢殿を紫宸殿に、西の對を清涼殿に西南の釣殿を安福殿に擬したのである。をりしも仲秋三五の月、皎々と空に照り耀き、清涼殿では衛士のたく火が、月の名たてにやとて、左右に部署された歌人を打つれて、安福殿へ渡御なられたのである。月あり豈に水無かるべけんや「殿上のかみの戸を出でさせ給ひて、無名門より右近の陣の前を過ぎさせ給へば遣水に月のうつれるいとおもしろし」と前文があつてこの文がつゞいてゐる。

安福殿に擬してある二條萬里小路殿（里内裏）の釣殿に玉座に當てる床子（腰掛）を据ゑて、東に面して御着座遊ばされる。上達部は東の縁の欄干に背を凭らせ西向きに殿上人は縁の下の庭にずつと伺候しあつてゐるさまも甚だ雅致に富んでゐる。池にある御船をさしよせて、御歌合の左右の講師なる隆資と爲冬とをその御船にお乘せになる。御酒を召しあがる樣子も、端正と申上げるよりも、却つて優雅に風流である。（空に月あり、池に水あり、船あり、殿中に帝おはしまし、簀子と庭上とに歌人あり、艶の一語がよく表現してあると思ふ。）人々の題に對する歌をつくるのも甚た容子ぶつて早く奉らない。（例の只内々御歌合あるべしとて、侍從の中納言爲藤召されて、俄に題たてまつる、と前文にある）。甚だ待遠しく思はれる。空に照る月も曇なく澄み、それが拭へる如き池の丁度鏡にもたとへられる面に映じ、月そのものがいはないけれど秋のもなかなることは明にわかつて、かの源順の詠んだやうに、なるほど甚だ格別に美しい空の月げしきで、その月も西に傾いた。明方近うなつた。その時の帝の御製、

曉告げる鐘の音も傾く月を惜む心から慨かれて

まことに惜しいと思ふのは、秋のもなかの今宵であるわい

と讀みあげた丁度その時、曉告げる鐘も響を添へたのが折ふさはしく甚だ趣がある。その夜どれもわるくはない歌が多くあつたが御製の鐘の音に優つてゐる歌はなかつたであらうかと思はれる。

【備考】「上達部と殿上人」この二つの間には、劃然たるしきりがあつたことを、常に頭に置くの必要がある。いくら狹い場所であるからとて、決して同じ處に雜居し無い。それが所謂禮である。枕草子小白河八講のところもこゝと同樣、「廂のみす高く卷きあげてなげしの上に上達部、おくに向ひてながゝとゐ給へり。その下には殿上人わかき公達云々」とある。表袴にしても上達部には八ッ藤とか重散の模樣があるが、殿上人のには模樣が無い。石帶を見ても參議以上は白玉、瑠璃象牙斑犀など。扇の骨などにしても、上達部は二十六本、殿上人は二十四本である。「隆資」忠臣で後に隱岐へ御供申上げ、又月草の花の卷の終に、還俗したことが記されてある。四條家の人である。「爲冬」後成定家爲家爲氏爲世とつゞいた、その爲世の三男で爲藤の弟である。父から愛されて爲藤の死後嫡子で甥の爲定との間に問題が起りかけたことが、春のわかれの卷にある。「照る月なみ」拾遺集秋、源順の「水の面に照る月なみを數ふれば今宵ぞ秋の最中なりける」といふ名歌がある。或る本に面を上と間違へて引用してゐる。上では歌がすつゝまづくなる。なみは水の緣語の浪と並とをかけたので、水面に照る月のうつくしいことよ。あまりの美しさに月の次第を數へて見ると、美しいのもその筈、今宵ぞ秋の眞中の夜であるわいの意。本文の「なみ」は池の緣語と歌の出典との外、別に意味には關係が無い。「曇なき」上の月なみと下の鏡と兩方にかゝつて居る。形修語と述語と兩方を勤めてゐる語である。「げに」此の語の用ひられた處には古歌か故事かがあるのが多いことに注意を要する。たゞものでない。枕草子「清涼殿のうしとらのすみ」の段に「げにぞちとせもあらまほしげなる」とある（國文講座第二冊枕草子四三頁）その「げに」もこゝと同樣で、裏に大納言のうちよみ給へる「月も日も」の歌を受けたのである。なるほど月も日もひさにふるとおよみになつたそ

の通りにといふ意。今日用ひる「げに」よりも意味が深い。こゝも源順の歌の通りなるほど美しいといふ意である。「鐘の音も」調子に於て勝れた御製である。「カ」の頭韻三つ重なりて上の句にあり、オの頭韻二つと、ヨの二回反覆音が下の句にある。その音韻關係に注意を要する。外國人には音韻の微妙なことがわかるまいと思ふ。たゞ意味をさるだけに過ぎぬ。バイロンの詩なども日本人が賞美するほど英國ではほめないさうである。音韻が粗であるから日本人にはそんな微妙な響がほんとにわからないゆゑであらう。漢文漢詩も趣が似てゐようと思ふ。われ等はせめて和歌の微妙な音韻ぐらゐは理解したいものである。「景陽の鐘」曉告げる鐘の意。景陽は支那の宮殿中の樓の名。その樓に鐘を置いて夜明三鼓五鼓に限つて鳴らした。それは南齊の二代目の天子なる武帝が宮内の奥深く遊びまはつてゐるのに知らす爲である。南史卷の十一列傳第一・后妃上十九番目にある武穆裴皇后の傳の中に見えてゐる。武穆裴皇后諱は惠昭、河東の聞喜の人也。……昇明三年齊世子の妃となり、建元元年皇太子の妃となる。武帝位に即く。もと顯陽昭陽の二殿は太皇皇后の居る所なりき。永明(建元の次の年號)中太后皇后無し。羊貴嬪は昭陽殿の西に居り、范貴妃は昭陽殿の東に居り、寵姫荀昭華は鳳華栢殿の宮内に居り、御所を添昌壹殿の南閤におき、白鷺鼓吹二部を置き、乾光殿の東西の頭に鐘磬を置き、兩廂は皆宴樂する處也。上(武帝)しば〳〵諸苑囿に遊幸し給ひ、宮人を載せ、後車を從へ、宮内深く隱れ、端門の鼓漏(時を知らす)の聲聞えず、(そこで)鐘を景陽樓上に置き、五鼓及三鼓に應ず。(はしの門の三更五更の時を知らす聲と一緒にならす。)宮人鐘聲を聞きて早く起きて粧飾す。車駕屢々琅邪城に幸す、宮人常に從ふ。早く發し、湖北埭に至り、雞始て鳴く。故に呼んで雞鳴埭と爲す。(原漢文)「註」鷺は舞をまふ者の持つて指隱するにつかつたもの、鷺の羽でつくる。白鷺は樂隊の名。

【問題】　こや野より出でさせ給ひて武庫川神崎難波住吉なと過ぎさせ給ふとて御心のうちにおぼすすぢある

べし廣田の宮のわたりにても御輿とどめて拜み奉らせ給ふ葦屋の里雀の松原布引の瀧など御覽じやらるゝもふるき御幸どもおぼしいでらる生田の森をばとはで過ぎさせたまひぬめり湊川の宿につかせ給へるに中務宮はこやの宿におはしますほど間近く聞き奉らせ給ふもいみじうあはれにかなし宮

いとせめてうき人やりの道ながら
同じとまりと聞くぞ嬉しき

福原の島より宮は御船にたてまつる御門は和田のみさき苅藻川を打ち渡して須磨の關にかゝらせ給ふかの行平の中納言「關ふきこゆる」といひけむは浦よりをちなるべしあはれに御覽じわたさる源氏の大將の「なくねにまがふ」とのたまひけむ浦浪今もげに御袖にかゝる心ちするもさまざま御涙のもよほしなり(久米のさら山)(大正十一年第三十六回口述)

【解說】　後醍醐帝は攝津の國昆陽野の宿から御出發遊ばされて、武庫川や神崎・難波を經て住吉などを御通過になるとして、靈驗あらたかな住吉明神に對ひて、御心のうちで御祈念のことがあらう。廣田の宮の邊でも同樣に御輿を止めてお拜みなされる。それから葦屋の里、雀の松原・布引の瀧など御覽じやられるにつけても、後嵯峨院などの此の處に御幸なされた事などお思出し遊ばされ、今の我が御身とおくらべになり、憂き旅ならずばと感慨無量の事である。生田の森をば御立寄なされずにそのまゝ素通り遊ばしたやうである。湊川の宿にお着きになつたところが、(ここまで天皇の御事で、この次から宮が主になる)。丁度中務ノ宮尊良親王が土佐へおこしの途中昆陽の宿に御滯在遊ばす折で、父帝が間近く湊川の宿に御座あるとお聞きになるのも、甚だ身に泌みて悲しくお思になる。そ

とで宮の御歌。

甚ださし逼つてつらい人からやられる悲しい旅の道ではあるが父帝もともに同じ宿におはしますと聞くのがうれしい。

福原の島から宮は御船にお乘りなされる。一方帝は和田の岬や苅藻川をお渡りになつて、須磨の浦にさしかゝりなされる。かの行平の中納言が「關吹きこゆる」とうたはれたであらう處は、須磨の浦より遙か遠方であらう。あゝと感慨無量に遠く御眺めになる。光源氏の大將が「なくねにまがふ」と仰せられた浦浪が近くきこえて枕浮くばかりになつたとあるが、なるほどその通り今もわが御袖にかゝる心地のするのも、いろ〳〵さま〳〵御涙を誘ふ種である。

【備考】　住吉明神は神功皇后征韓の際に大功があり、光源氏須磨謫居の時も、此の明神に立願し、無事に歸洛あつた程の威德があるので、心中に御祈禱遊ばしたのである。「ふるき御幸」天皇には行幸、上皇には御幸といふ。後嵯峨院が建長五年三月に住吉へ御參詣なされたことか「烟の來々」の卷にある。それ等をさしたとする。「問近く聞き奉らせ給ふ」。こゝを間違はぬやうに希望する。「奉る」は關係敬語で、聽く人が假りに尊くなくても、その事柄が天皇とか神佛とかいふ尊い方に關係する爲に生じた敬語である。こゝは天皇の御事を宮が聞かれるので、主語は宮である。本文の初の「拜み奉らせ給ふ」の「奉る」は廣田の神に對しての關係敬語である。拜むのは帝であるが、その敬語で無い。神に關係するから生じたので、奉るのつく主體と主語と別であることを考へると良い。「關ふきこゆる」續古今集卷十羇旅の部にある。この集は龜山帝文永二年の撰集であるが、このは有名なのでその以前既に源氏の須歌の卷にも引かれ、世に膾炙されてゐたのが、この集に拾ひ上げられたのである。「旅人は袂すゞしくなりにけり、關吹き越ゆる須磨の浦風」この旅人は行平自身を指したと解したい。皆誰も須磨邊に旅する好事家もなからうから、主觀詩でそこで「は」がひゞいてくる。「なくねにまがふ」國文學講座第六册問題解說九八頁參照を望む。

【問題】　播磨の國へつかせ給ひて塩屋垂水といふ所をかしきを問はせ給へばさなむと奏するに名を聞くよりからき道にこそと宣はせてさしのぞかせ給へる御さまかたちふりがたくなまめかしけぢかき限はあはれにめでたうもと思ひ聞ゆべし（久米のさら山）（明治四十四年第二十五回豫備）

【解說】　播磨の國へお着きになつて、塩屋垂水といふ處の景色のよいのがお目にとまつて、里の名をお問ひになつたので、「塩屋垂水と申します」と奏上すると、帝は「塩といふ里の名を聞くさへ、辛い旅路である」と洒落を仰せられて、御輿から外の方をお眺めになる御樣子御容貌が昔に變らず若々として優美である。警固のため御輿近く伺候せる限りの人々は、この御樣子を見奉つて、あゝ實に立派におはすると思ひ奉ることであらう。

【備考】　これは前のすぐ續きで、問題は「福原の島より」からであるが、前に解說を濟ませたので省いた。「さなむ」「さ」は上の塩屋垂水を指す。「なむ」は助詞。この下侍るを省く。「からき道」古今集雜上「おしてるや難波のみつにやく塩のからくも我はおいにけるかな」にもある通り、塩からい意味に辛氣な意味を掛けた言葉の諧謔である。「ふり難く」源氏奏の卷に源内侍のすけなりけり、あさましうふりがたくも今めく哉さにくさに」同朝顏の卷「いと昔思ひ出でつゝ、ふりがたくなまめかしきさまにもてなして」とある。奏の卷の方は源氏が紫の上をつれて祭見に出かけた所「はかなしや」の歌のつゞきで、「舊りがたく若く昔に變らざる」意である。又「振り捨て難し、ひと通りならず」の意にもつかふけれども、此處は前のやうに解する。

【問題】　海づらよりは少し入りたる國分寺といふ寺をよろしきさまにとり拂ひておはしまし所に定む今はさ

はかくてあるべき御身ぞかしとおぼししづまるほど猶夢の心ちしていはむ方なしそこら巻りし兵どもゝまかづればかいしめりのどやかになりぬるいとど心細し昔こそ受領どもゝ任のほどその國をしたゝめ行ひしかこの頃は只名ばかりにていづくにも守護といふものゝ目代よりはおぞましきをずゑたれば武家のなびきにてのみおはやけさまの事はよろづ疎にぞしける葛城の大君を陸奥國へ遣むしたりけもかくやとあはれなり（久米のさら山）（明治三十五年第十五回豫備大正二年第二十七回豫備）

【解說】　海邊からは少し奥へ這入つた國分寺といふ寺を、かなり然るべき樣に取り片付けて、帝の御座所に定める。道中はいくぶん氣もまぎれたがいよ〳〵此處へ着いた今となつては、それではこんな處にかうして暮さねばならぬわが御身ぞよと御心の落つき遊ばすその時、やはり前同樣夢の心地がして、何とも言ひやうもなく悲しい。多くついて來た警固の武士どもゝお暇申し退出して都へ還つたから、あとはしんと淋しく、騷しさも沈まつたにつけ、到着當初のがや〳〵騷がしいのに比べて今は一層心細い。昔こそ國の守どもゝ在任四ケ年の間、任國の政治を執り行つたが、この頃はたゞ受領といふ名目だけで、實權は一切武士に移り、どこの國でも鎌倉幕府配下の守護といふもので目代（受領に代つて國務を行ふ者）に比べて恐しい程强悍なのを置いてあるから、いづこも同じくその守護は武家へ靡き從ふばかりで、朝廷への奉仕のことは萬事疎略にした。葛城の大君を陸奥の國へ遣した時に、國司が甚だ怠慢であつたので、王が怒色面に顯はれたと傳へられてゐるさまも、やはりこのやうに疎略であつたのかと感慨深く思はれる。

【備考】　「今は」「は」對照の時につかふ。途中に對したのである。「猶」今までと同じくやはりの意。字義をいへば漢字「猶」は猿の一種で用心深くよく考へはかる獸で、前の事を思ひきり惡くぐず〳〵する。そこで猶豫の意となり、一方はかる意はまを犬にかへて猷の字を生じ、道とか謀とかの意となる。尙ほ加へる意であるから、も一つの意、積極的のことに用ふ。又猶に通じ用ひる例もある。「のどやかに」恭順の副詞靜かにの意で、警固の武士が退出する騷しさに對した語を解する。　いとど程度副詞。　いと〳〵の畧、一層・一入の意。前とくらべてそれよりも程度の一段はげしき意である。「いとどしくすぎ行く方の戀しきにうらやましくもかへる涙かな」。かく語尾をつけてもつかふ。「昔こそこの頃は」相對照したので「昔」の方は客で、「この頃」は主である。漢文では客の方に則を書くことになつてゐる。「おぞまし」「る」をつけると動詞となり、「まし」又は「し」をつけると形容詞になる。もとは「おそ」で清音より次に濁つたので、清濁相通ずる語は多くある。淺む・淺し・あざける。むつる・むつまじ等である。おすし・おぞし・おすまし・おぞまし、悍の字にあたる。語源は恐しなれど意義は恐しい程强いことである。「おほやけざま」朝廷の方「おほやけ」は公家で武家に對した語である。「さま」は方で、長崎の方言に「さん」といふ語を方角の意味につかふ。それは「さま」の撥音便である。「なびき」「まびき」とした本もあつて、目率（マビキ）で眼居（マナコキ）のこと、目色の義となる。　大日本國語辭典はその方をとられた。武家は鎌倉幕府を指す。その本文によると、その强悍な守護は鎌倉の目色を伺ひその監視の下で、公方のことを疎略にする惹となる。本文を「なびき」とすれば、强悍な守護は鎌倉へ靡き從ふだけの意となる。「おろそかにぞしける」の主語を人民と說く註釋書も有るか、それでは次の葛城（かつらぎ）王の話としつくり合はない。此の話は國司が公に不忠實であつたので、人民のことでない。「大君」諸王をいふ。國王の意でない。親王の次に位する皇族で、和文では此の方の用例がむしろ多い。「おほぎみ四の位（よつ）」とか「わかんどうり」とか、藤原氏の勢力ある頃は、攝關よりずつと下にあつかはれたのは畏多いことである。葛城王は姓を賜はりて橘諸兄といひ、橘木氏の祖先である。「かくやと」萬葉集卷第十六安積山影副所見山井之淺心乎吾念莫國。あさか

山影さへ見ゆる山の井の淺き心を吾がおもはなくに。その次にかくいふ。右歌、傳云、葛城王遣二平陸奥國一之時國司祇承緩怠異甚於レ時王意不悅、怒色顯レ面、雖レ設二飲饌一、不二肯宴樂一。於レ是有二前采女一、風流娘子、左手捧レ觴、右手持レ水、奉之王膝一、而詠二其歌一。爾乃王意解脫、樂飲終日。但し擊は擎の誤かと略解の頭註にある。右の歌傳に云ふ葛城王陸奥國に遣さるゝの時、國司の祇承すること(つゝしみ承ること)、緩怠ことに甚し。時に王こゝろに悅び給はず、怒色面に顯れ、飲饌を設くと雖も、肯て宴樂し給はう。こゝに於て前の采女あり、風流の娘子なり、左手さかづきを捧げ、右手水を持ち、之を王の膝にささげて其の歌を詠ずすなはち王のこゝろ解脫し、樂み飲みて日を終ふ。(國文學講座第三册古今和歌集選釋八頁參照)此の國司祇承緩怠異甚を指したのである。そこで「人民が一向武家にのみ靡き從ふ」といふ註は取らない。守護は武家でない、武家の配下である。家といふ觀念には、今少し大きい物でないと該當しない。此の一節「昔こそ」の上は叙事の筆で、それ以下は議論の筆で、叙事の間へ、作者の意見を挾んだのである。

【問題】　大塔の法親王楠木の正成などは猶同じ心にて世を傾けむ謀をのみ廻らすべし正成は金剛山千早といふ所にいかめしき城を拵へてえもいはず武きものども多く籠りゐたり大塔の宮の令旨とて國々の兵をかたらひければ世に恨あるものなどこゝかしこにかくろへばみてをる限は聚りつどひけり宮は熊野にもおはしましけるが大峯を傳ひて忍び忍び吉野にも高野にもおはしまし通ひつゝさりぬべき隈々にはよく紛れものし給ひて武き御ありさまをのみ顯し給へばいとかしこき大將軍にていますべしとて附き隨ひきこゆるものいと多くなり行きければ六波羅にも東にもいと安からぬ事ともて騷ぎて猶かの千早をせめくづすべしといへば兵など上りかさなると聞ゆ正成は聖德太子の御墓の前を軍のそのにしていであひかけひき寄せつ返しつ潮のみちひく如くにて年はただくれに暮れはてぬれば春になりて事どもあるべしなどいひしろふもいとむづかしう心ゆるびなき世の有樣なり(久米のさら山)　(大正十四年第四十二回口述)

【解說】　初に綱領を提げ、以下正成はどう、宮はかうと細說した文である。大塔宮(雲法親王や楠木正成などは、やはり心を合せて、北條氏を滅さうとする謀を、餘念なく工夫することであらう。正成の方は金剛山千早といふ處に、嚴重な城を築いて、一方ならず猛き武士どもが、その城に立籠つた。そして大塔の宮の令旨だといつて、諸國の武士を味方に引入れたから、北條氏に對し不平不滿のある者で、此處彼處に潛み隱れてゐる有りつたけの者は、正成の下に群りついた。大塔の宮の方は熊野にもいらつしやつたが、大峯を傳つて世を忍び〳〵ひそかに吉野にも高野にもお通ひになつて、然るべき都合のよい場所場所には、うまく人目を紛らかしなされて、勇猛な御行動を只管顯しなされるので最とすぐれた大將軍であらせられるにちがひないと言つて附隨し奉るものが甚だ多くなり勝つたから京の六羅にも鎌倉にも、甚だ不安心なさしおかれないことと騷いで、やはりあの正成の籠れる千早を攻め落せと命令(六波羅(客)にも東(主)にもが主語)するので、武士が鎌倉から西上するといふ世の噂である。正成は聖德太子のお墓の前を戰場にして、出でては戰ひ驅けては退き、敵に寄せたり又引きかへしたりして、恰も潮の一進一退する有樣で、年はたゞもう暮れてしまふので、いづれ春になつて一合戰があらう(べしは未來助動詞。年の暮の話でまだ春にならぬ意)など噂し合ふのも、甚だ厭はしく油斷の出來ない世の有樣である。

【備考】　「久米のさら山」のをはりの方にある文である。「法親王」親王の佛門に入らせられたお方を申上げる。親王といふ字は書紀天武天皇朱鳥元年二月の條に見えたのが、最初で、よみは祝詞宣命にあるやうに「ミコ」とよみ、それ以前は皇子をミコとよむ

● 又王もミコと(孝德紀)よみ、又オホキミともよんだ。書紀にはシンノウのよみは見えぬ、その後音讀したものと見える。法親

皇は白河帝の皇子仁和寺の覺行から起る。入道親王とは出家の後に親王號を得させられなのをいふ。「同じ心」二人同じ心、其利斷じ金。同心之言、其臭如蘭。二人心を同じくすれは、其利、金をたつ、同心の言その臭(かをりのこと)蘭の如し。易の繫辭上傳から出たので、斷金之友・同心町・如蘭社等の出たもとで、心を一致さす意である。「謀をのみ」「のみ」はたゞそれのみ、ひたすらにの意。「えもいはず」連語の副詞。得も言はれずの略、形容を絶した程の意。令旨りやうじとよみ、春宮・三宮(太皇太后宮・皇太后宮・皇后宮)中宮・親王の命令を記したる文書。明治になつてからは皇族の御旨を凡てかくいふ。「兵」つはもの「かくろへば」は名詞を動詞化する接尾語。けしきばむ・黄ばむ・よしばむ等である。「かくろへ」は「かくる」の延言。隱れたふりをしての意。「大峯」大和國十津川郷の東にある大山脈で、山伏の修行する靈地。熊野高野と共に人の到り難い地。「いますべし」「べし」を必然の意にとつた。「きこゆる」關係敬語。これは宮に關係した點で出じた語で、こゝの主語は下の「もの」で、それについたのでない。「もて騷ぎて」「もて」は接頭語。動詞より轉ず。「せめくづすべし」「べし」は命令の助動詞。「いへば」主語は形では「六波羅にも東にも」であるが、意味は東の命令と思ふ。「かさなる」こゝは上つた上に又數多く上る。引きつゞいて上るの意である。聖德太子の御墓、一本御堂とある。天王寺をいふ。「いひしろふ」互に言ひ合ふ意である。「しろふ」は始と接尾語とるいふべき動詞で、互にものする意である。引きしろふ。源氏に「つきじろふ」といふ語がある。

【問題】　かの島には春來てもなほ浦風さえて浪あらく渚の氷もとけがたき世のけしきにいとどおぼしむすぼるる事つきせずかすかに心ぼそき御すまひに年さへ隔りぬるよとあさましくおぼさる心ならずもまどろませたまへる曉方夢うつつともわかぬほどに又宇多院ありしながらの御面影さやかに見えたまひて聞えしらせたまふことおほかりけりうちおどろきて夢なりけりとおぼすほどいはん方なくなごりかなし御涙もせきあへず

さめざらましをとおぼすもかひなし源氏の大將須磨の浦にて父御門見奉りけむ夢のここちしたまふもいとあはれにたのもしういよいよ御心强さまさりてかの新發意が御迎のやうなる釣舟もたよりいできなむやと待たるるここちしたまふに大塔の宮よりもあまびこのたよりにつけて聞こえ給ふこと絶えず(月草の花)(大正十一年第三十六回口述)

【解說】　かの隱岐の島には春が來ても、まだ浦風が寒くて、海の浪もあらく、渚の氷も御心のむすぼれと共にとけにくいあたりの景氣に、一入御心の晴れぬことがつゞき、さゝやかに心細い御住居に、都を隱てた上に、年までも踰えた(春來てもと照應す)ことよとあきれる程なさけなく思召す。御疲のため、つひ思ばすもお眠り遊ばした曉方、夢とも現とも區別のつかぬ程度の幻の中に、御父後宇多院の、御在世の時そのまゝの御面影が、はつきりと現れなされて、お告げ申上げなさることが多かつた。後醍醐帝は目をさまして、夢であつたわいとお思ひ遊ばす時、言ひやうがない程、心殘りが悲しい。御涙もせきとめられないで、小町の歌のやうに「夢と知つたら、さめなからうものを、殘念なことをした。」とお思ひ遊ばすのも甲斐のないことである。　源氏物語明石の卷にあるやうに、源氏の大將が須磨に居られた時に、父桐壺帝のお姿を見奉つたと傳つてゐるその夢のやうな心地のなさるのも、甚だ身に泌みて心强う、そのたのもしいみ夢の告げで、尙一層氣强さが增して、かの明石の新發意が源氏の君をお迎へしたやうな釣舟も、ここへ訪ねて來てくれるだらうかと、そゞろに待ち設ける心地が遊ばすに、大塔の宮よりも、海人の釣舟に託して都の有樣を御消息し申さるゝことが絶えない。

【備考】　「月草の花」の卷の冒頭の一節で、全く源氏物語明石の卷の初の方を模したのである。「春來ても」實際春が來てあるけれども の意。假定のてもでない。「いとど」四圍がからりと晴れてさへ、胸がむすぼほるのにかういふ景色では一入。「聞え」關係敬語。言ふの意。「さめざらましを」古今集戀二小野小町「思ひつゝぬればや人の見えつらむ、夢と知りせばさめざらましを」。あなたを思ひ思ひしながら、寢たからそれで御身が夢に見えたのであらうか、あの時夢と知りもしたら覺めなからうものを、誠にをしいことよの意。

徒然草及び十訓抄問題の解説

【問題】　世に語り傳ふることまことはあいなきにや多くはみなそらごと（字眼）となりあるにも過ぎて人はものをいひなすにまして年月過ぎ境も隔りぬればいひたきまゝに語りなして筆にも書き止めぬればやがて定まりぬ（字眼）……且つあらはるるをも顧みず口にまかせていひちらすはやがてうきたることゝ聞ゆ又われもまことしからずは思ひながら人の言ひしままに鼻のほどをどめきていふはその人のそらごと（字眼）にはあらずげにげにしく（字眼）所々うちおぼめきよく知らぬよししてさりながらつまづま合せて語るそらごと（字眼）とはおそろしきことなりわがため面目あるやうにいはれぬるそらごと（字眼）とは人いたくあらがはずみな人の興ずるそらごと（字眼）とはひとりさもなかりしものをといはむも詮なくて聞き居たるほどに證人にさへなされていとゞ定まりぬる（字眼）べし　（大正三年第二十八回講演）

【問題の見方】　これは徒然草七十三段の第一節と第三節との文である。他にまだ第二節と第四節とがある。全體の要旨は「傳說についての態度を如何に定むべきか」を述べてある。傳說には種々ある。信仰に關する傳說としては先づ地獄極樂の存否、淨土の觀念から神社の緣記――梅は飛んだとか、雷に化つたとか、醍醐帝は地獄に落ち給うた。（十訓抄第五の十七）とか性空上人が神崎の遊女に會ひに往つた。遊女は普賢菩薩の權化であつて、すぐ死んだ所が身體から異香を發した。（十訓抄第三の十五）とか、又本書の六十九段の豆殼の話とか、いろ〳〵ある。これに近世科學のメスを入れて信仰を破壞すべきか、如何に態度を決定すべきかは今日でも相當論議されてゐる。否未來永久の懸案であらう。兼好は其の性格にふさはしい不即不離の態度をとつてゐる。先づ大體世俗の傳說と名人の逸話と信仰問題と、傳說をかう三つに分類をして、その世俗の傳說についての所はこの文である。そこで「語り傳ふる」「傳ふる」の「傳ふる」に重きを置いて考へないで、問題の急所が外れる。次に「年月過ぎ境も隔りぬれば」とあるのは「傳ふる」を受けたので、時と所との二方面がある。しかし傳說といへば、時の方が勢力を占めるやうである。世間の傳へ語る事柄には誇張が多い。それは人に誇張本能があつて、言ふにつけても又聞くにつけても、その本能の滿足を求める。事實の儘では興味がないといふ相手の興味の上からと、言ひ手の誇張本能の滿足から、殊に「下ざまの人の物語は耳驚くことのみ」ある。「よき人は怪しき事を語らず」でこれは意思の拘束力がある。しかし時と所とを隔たればその虛言たるを證明する拘束力がない。そこで言ひたい放題。それが虛言の生因である。「虛言」と「定まる」とは字眼で、多く大切な語は、文に度々顏を出す。第三節は虛言の種類を述べて「兎にも角にも虛言多き世なり」と輕妙に小收した頓挫の筆實はにうまいものである。その種類の中で「恐しきもの」は壓卷で「シテ」に當る

「シテ」を出す爲に、泡のやうにやがて消えて罪のない虚言と、うけうりの虚言とをば「ワキ」として置いたものと見える。面目ある虚言は、四天王の隨一たる兼好の經驗ある事であらう。「せん無くて」ここが兼好と屈原との性格の相異る點で、やがて兼好と長明との差、延いては徒然草と方丈記との隔であらう。兼好は羊で、屈原長明は犬、羊は群がり、犬は獨居する。

【解說】　世間で語り傳へることがら、事實の通りでは面白くないのか、大概みな虚言である。（虚言の意味は大袈裟にいふこと、誇張の意。それは「あるにも過ぎて」といふ次の句から考へてもわからう。）たゞでさへ事實以上に、人は大きく物をいひなす性質であるに、まして年月も過ぎてしまひ、又は場所も遠くなりてしまふと、言ひたい放題に語りなして、それを筆にも書きとめてしまふと、そのまゝさうきまつてしまふ。（これ即ち多くは皆虚言であるわけである。）話してゐる一方から、ばけの皮が顯はれるのも顧慮しないで、口角泡を飛ばして、出まかに語り散らすのは、すぐさまその場で浮說とわかる。（これは泡のやうに消えていつて、ほんのその時かぎりで罪がない。）又話手自身も、どうも事實らしくもないとは思はなひがら、鼻のあたりの筋肉が微動していかにも得意げに、人の言つた通りに（誇張し無いで）言ふのはその人の虚言ではない。（誇張しないところが感心である。）もつともらしく話の所々を、ちよつと不分明なやうにぼかし、よくは知らない風をして、それでも話の端ばしをうまく合ふやうに仕組んで語る虚言、こんなのが恐ろしいことである。（菅公の讒言、その他多くの人を陷れるのが、これである。き手にとつて名譽になるやうに言はれた虚言は、その人（一應の辭退はしようが）甚しくは爭はないものである。（これは深い意味がない。世間にそんなにして定まる虚言もある位の意と思ふ。　一座中皆の人が面白がる虚言は自分だけ「そんなふうには無かつたものを、よくまあいへたものだ。」と皆に反して否定するのも、この場合いづれ誰も取り合はぬから、仕方がなくて我慢して聞いてゐるうちに、その話の裏書にまで引張出されて、いよ〳〵その誇張したやうに定まりさうである。（ここはうまい筆である。「みな人の興ずる」といふうちに大袈裟が暗示されてゐる。前の「人の言ひしまま」とちがふことがわかる。）以上は冒頭の「世に語り傳ふること」の種々相を述べて、それ等が定まつてゆくと終つたのである。

【備考】　「あいなし」無愛で、面白味がない、かはゆげが無いの意である。この場合は形容詞としての用例のやうで、「あいなく」と副詞の場合は「あびなく」の音便で、古註ではあじきなくと說くが、宣長はむざとうちつけなりと說いてから、その方が優勢になつた。別の語と思ふ。こゝは連體語であるから、形容詞の無愛の意。「なす」成の字を當て、コレハカウザヤトソレニシテシマフの意なりと雅言集覽（上百四十一頁）に出てゐる。「なす」一、うむ（生）二、かへる（化）三、しあげる（成）と宣長が古事記傳の神代初の卷に述べてあるが、こゝはその二と三との合一した意味で、「拵へる」のでなくて、言うて大きいものにしてしまふ（化成）の意である。「まことしからずは」まことしからずとはの意。「まこと」といふ名詞に「に」といふ語尾がつくと副詞に化り、「し」といふ「語尾」がつくと形容詞に化る。「をこめく」うこめく・うごく・うごかす・うごなはる（祝詞の初にある語）をごく等同系統の語。「うこ」といふ語幹に「く」「めく」「なはる」「かす」といふ語尾がついたのである。「をこめく」は微動の意で自動詞。「げにげにし」「げに」といふ副詞を重ねた意味の強い副詞に「し」といふ語尾がついて生じた語。甚だまことらしの意。うべうべし。「さもなかりしものを」感動助詞「を」は「よ」より強く上に反る意がある。「さへ」まだその上に、、までもの意。

【問題】　能をつかむとする人よくせざらむほどはなまじひに人に知られじうちうちよくならひえてさし出で

たらむこそいと心にくからめと常にいふめれどかくいふ人一藝も習ひ得ることなしいまだ堅固かたほなるより上手の中にまじりてそしり笑はるるにも恥ぢずつれなくすぎてたしなむ人天性その骨なければ道になづまずみだりにせずして年をおくれば堪能のたしなまざるよりはつひに上手の位にいたり徳たけ人にゆるされてさうなき名を得ることとなり天下のものの上手といへども始めに不堪のきこえもありむげの瑕瑾もありきされどもその人道のおきて正しくこれを重くして放埒せざれば世の博士にて萬人の師となる事諸道かはるべからず。（大正七年第三十二回豫備）

【問題の見方】　能を身につける心得を述べてあることは、一回通讀すれは、誰にもよくわかる。次に前後の相聯絡發明してゐる箇所を考へる。「始めに不堪のきこえも」といふところは、最初の「よくせざらむほどはなまじひに云々」に照應してゐる。そしてこの二つは客である。それから「道のおきて正しくこれを重くして放埒せざれば」といふ良い心得が書かれてある。兎角才能のある者は我流を出したがるものである。これと照應したところを考へる。上の「道になづまずみだりにせず」とある。その「みだりにせず」である。そこでこの照應の所を合せて考へる。これは秘傳とか傳授とかいつて、極端にまで規則を重んじた所以で、いくら器用な人でも、道の掟を無視してはいけない。このことは百八十七段に尙ほ詳しく書かれてある。次に同じ語の重なつたのがないかを考へる。習ふは二回たしなむも二回堪能・不堪・その骨が似て居り、「さうなき名を得る」と「世の博士にて萬人の師となる」と照應してゐる。成功のところをいうたのである。「習ふ」も「たしなむ」も似た意味で、反復練習である。たゞ「たしなむ」方は自ら進んで興味をもつてするのである。つまり恒ある意と見てよい。かう考へると、すうつとわかつてしまふ。初に陷り易い弊を戒め之を客として、次に本旨に入つたので、一、本旨は厚顏にはじめからせよ。二、たしなんで恒久につゞけよ。三、頭を働して規則に囚はれるな。四、さればといつて規則を放埒にするな。此の四箇條は主である。堪とか骨とかいふのは客と見てよろしい。

【解說】　藝能を身につけようとする人が「未熟のうちはなまじつか人に知られまい。内々よく練習して上手になつてから人前に出た方が何よりも甚だ奥床かしからう」と常々いふやうであるが、かういふ人は一つの藝も習ひ得る事がない。まだかたなりで不完全な頃から上手の中に交つて、譏り笑はれるのに對しても恥ぢずに平氣で通して、（始は不堪のきこえ。むげの瑕瑾もありきに照應す。）好き嗜む人は、生れつきその調子（天分）が無いけれども、掟に拘泥せず、又その道を疎かにしないで、練習の年をかさねると、器用の不熟心な人に比べて、しまひには上手の地位に達し、身に重みがついて德望も長け、人から認められて無雙だといふ名聲を得るものである。天下の名人といつても、始は不器用だといふ評判もあつた又甚しい缺陷もあつた。けれどもその人が、その道の掟を守ること正しく、之を尊重して、我流を恣にしないので、一世の大家として萬人の師表となる。かういふ事は何の道でもかはる筈がない。

【備考】　「つく」四段他動詞、新しくは下二段にいふ。辭書に無いのは脱落してゐるのである。自分はこの語について多年苦んだ。源氏の中に用ひられてゐるのを發見した時に、辭書の缺陷を知つた。動詞は四段が原で二段へ變化する。垂り・漏り・憂ひは古く四段で、下二段へ轉化したのである。「む・め」現實でなくて心中の事柄であるから用ひる。現代文には無い。「よくしない間

はといふ。古文の方が精緻である。「堅固」かたくて圓滑の境地に達しないこと。「かたほ」「まほ」に對する語。物事の未だ完備せざること。偏の字を當てる。「より」起源を表す助詞。上に名詞を省く。「つれなく」心の動搖を面にあらはさずに怀へる意、平氣といふに當る。「さうなき」無雙。字音の國語化である。無左右といふのは「ためらはず」の意味で區別をするとよい。「あり、あり き」上の「あり」は中止法と稱して下の「き」につゞく。「べからず」推量否定「あるまい」とも說けるが、當然否定「營が無い」の意と見る方が良い。

【問題】　さしたる事なくて人のがり行くはよからぬ事なり用ありて行きたりとも其事はてなばとくかへるべし久しくゐたるといとむつかし人と對ひたればことば多く身もくたびれ心も靜ならず萬の事さはりて時をうつす互のため益なしいとばしげに言はむもわろし心づきなき事あらん折はなか〳〵そのよしをも言ひてむ同じ心にむかはまほしき人のつれ〴〵にて今しばし今日の心靜になどいはむは此のかぎりにはあらざるべし阮籍が青き眼誰もあるべき事なりその事となきに人の來りてのどかに物がたりしてかへりぬるいとよし又文も久くし聞えさせねばなどばかり言ひおこせるいとうれし　（大正八年第三十三回口述及大正十一年第三十六回豫備）

【問題の見方】　この文の終の方に、「その事となきに人の來りて、のどかに物語して歸りぬるいとよし。」とある。それと冒頭の文と矛盾してゐるやうに思はれる。しかし、始のは普通の人で、後のは同じ心の友であることを考へると矛盾が無い。始のは實用向の話、終のは趣味の問題である。阮籍の故事を確に說明するとよろしい。兼好が共鳴してゐる人である。

【解說】　きまつた用事がなくて、人の許へ訪ねゆくのは、よくないことである。（單刀直入法）よし一歩讓つて、用があつて行つたとしても、用のすんだら、早く歸るがよい。久しく對話してゐるのが、甚だいやな氣がする。人と對つてゐると睨みつこも出來ず、自然口數多く體も疲れ心も落着かず、萬事に差支へて時を空費する。さういふことは雙方にとつて何の爲にもならぬ。（厭さうに話をするのもわるい。そこで氣にくはない事のあらう時は、却つて事情をよく言ふがよからう。（ここまでは實益の上に立つての話である。その證據には事といふ語五回、用とか益とか時とかいふ語が見えてゐる。通りいつぺんの實用的の交際で兼好が白眼をするところであらう。）それと趣を異にして、氣心がしつくり合つて自分が對座したく思ふ人が退屈で「もうしばし、今日はゆつくり」など自分にいふ場合があるなら、とく歸れといふ例外であらう。晉の七賢の一人たる阮籍は好きな人には青眼を以て迎へ、嫌な客は白眼もてあしらつたといふ話であるが、さう露骨に出ずとも、好惡の表情は誰にもありさうな事である。青眼以て遇せられるなら、長居してよからうさ。（阮籍云々の一輕妙の筆致味ふべきである頓挫法か）別段定まつた用のないのに人が訪ね來て、ゆつくり話して還つてゆくのは、甚だよい。又手紙もそれと同樣で、永らく御たよりを差上げませんから」など、ほんにそれだけいつてよこしたのは、まことにうれしい。

【備考】　「人のがり」人の許の意。「思ひかね妹がり行けば冬の夜の河風寒く千鳥なくなり」（貫之）宮仕するがりやりて（枕草子卷一）某（なにがし）がり等の時は接尾語で、「人のがり」のときは「がり」を名詞と見るべきである。接尾語は名詞から轉化したもので、これは未だ名詞の面影を存すると見るを至當と思ふ。「人のがり」全體としての取扱は品詞論の任務でない。「いはむも——あらむ——思はむ。——いはむはあらざるべし」「む」と「べし」とは顯現の事實でなくて心中の事柄であるのを示す。假定である。誰もあ

るべき」「あらねばならぬ」では強すぎる。「ある筈」でも強くて不似合。「ありさうな」が適當。「歸りぬる」現に人が歸つて行く客觀的叙述とはちがふ。兼好の心の中に於て行動する人で、漢文では矣をつける所か、かういふときは「ぬ」をタ又はシマフとも譯しかねる。矢張原意の「いぬる」が適當であらう。

【問題】　人のものを問ひたるに知らずしもあらじありのままいはむをこがましとにや心まどはすやうに返事したるよからぬ事なり知りたる事もなほさだかにと思ひてや問ふらむ又まことに知らぬ人もなどか無からむうらうらかに言ひきかせたらむはおとなしく聞えなまし人のいまだ聞き及ばぬ事をわが知りたるままにさてもその人の事のあさましさなどばかり言ひやりたればいかなる事のあるにかと推し返し問ひにやるこそこころづきなけれ世にふりぬる事をもおのづから聞きもらすこともあればおぼつかならぬやうに告げやりたらむ惡しかるべきことかはかやうの事はものなれぬ人のあることなり（二百三十四段）（大正十年第三十五回豫備）

【問題の見方】　事柄は二つで、右側に點を附したところ、前は主意、後は收結である。

【解說】　人が何か問うた時に「知らないで問ふのであるまい。ありの儘に答へるのは馬鹿らしい」と（問はれた人がつむじを曲げて）思つてか、態と心（問うた人の心）を惑はすやうに（なぞ〳〵のやうな）返事をしたのは、よくない事である。（以下よくないわけをいふ）知つてゐる事でも、も一層はつきり知りたいと思つて問ふのかも知れない。又本當に知らない人も、どうして無からうかい。（だから）明かにいひ聞かせてやるなら、穩かに聞えようものを。さういふ返事をするのは惜しいことである。

人はまだ聞き及ばない事を、自分がよく知つてゐるにまかせ、「まあ誰それの件は呆れるよ」などだけ言ひやつた。すると先方で（何の事かさつぱりわからず）「どういふ事があるのか」と推しかへして問ひにやるのが、何よりも氣に食はない。世間に古くなつた事柄でも、自然聞き漏すこともあるから、最初不分明でないやうに告げやつたとしたら（反對を假定す）わるからう事かい。こんな（人に迷惑をかける知らせをする）事は世馴れぬ人のよくやる事である。

【備考】　「まし」反對の場合を假定する助動詞。うらゝかに云ひ聞かせないのが事實である。それを惜んで反對の場合を假想したのである。こゝは此の事柄の小收である。「こころづきなけれ」この主體、何者がかく感ずるか。通信を受けた方の人とも說けるが、その理由を說明した次にある語氣から考へると第三者と見る方が良いと想ふ。「告げやりたらん」「かやうの事は」の語氣はおほやけ腹立ちらしい感がする。「かやうの事は云々」これは二つの事柄の總收とも取れるが、よく讀み味つて見ると、さうでない。あとの事柄の收結である。

【問題】　すべて庶人の振舞は重らかに詞ずくなにて人をもならさず人にもならされず戲を好まずおとなしくさしふるまひて居たれば心の中はしらずよきものかなと見えて人にも恥ぢられ所をもおかるるなりかかれどもこれは懷しく思はしき方にあらずただみだるべきところにはみだれをりにしたがひてたはぶれをもしをかしき事をも笑ひ人のなどりをも惜しみ友にしたがふ心ありてわりなく思はれぬるは德多かるとぞふるき人おほく定められける又人は用意ふかくて出仕の時など心おくれなきをよしとす公事につけて失禮をもしうちあるふるまひにも越度の出で來ぬはるくちをしき事なり（十訓抄一の二八）（大正十一年第三十七回豫備）

【問題の見方】　「かかれども」にて意義一轉す。その前は客にしてその次は主意なり。「又」にて別のことをいふ。形式ばるよりも眞情の流露がよろしといふこと（書經の直にして温に似たり。）と、用意ふかく心劣りのないやうにといふこと也。

【解說】　何事によらず身分の高くない人の行は、重々しくて詞かず少なにたしなんで、人に馴れ〳〵しくせず、また人からも馴れ〳〵しくされないで、戯れごとを好まず穩やかに立ち振るまつてゐると、その人の心の中をば知らず、すぐれた人だなと見られて、人からもうら恥づかしい程だと尊敬され遠慮されるものである。（晏平仲善與レ人交。久而敬之の意也）けれどもこれは懷しく慕はしい方ではない。ほかの場合はともかく、たゞ打ちとけて堅苦しくせずして然るべき場合は行儀もくづし、周圍の事情に適ひ從つて冗談の一つも言ひ、おもしろい事に對しても皆といつしよに賑やかに笑つて座を面白くし、又人との別れをもをしみ、友とよく調子を合はす情味があつて、一方ならず人から思ひ慕はれるのが、利得が多くあるよと古人が大體定められた。又人は心構ふかく諸事に注意して、役所に出勤した時など、人から見さげられることのないのをよいとする。政務や諸儀式につけて、作法も心得ず、違つた振舞をもし、ちよつとした擧動にも越度のできたのは、殘念なことである。

【備考】　刀禰の翁の祭見物の次にある論文である。庶人といつたのは刀禰を受けたからである。身分の高い人程感情を節制するのが嗜みとした時代であるから、身分の賤い人の心得をいつたのでない。又人はといふその人は身分の低くない人を指したと解するが普通である。本文はここで切れて「又」からは二九課になつてゐる。「詞すくなの人はかりに心の中にわるいことを思つてゐても、人は知らない。よい人だと思ふ。之に反して「口あいて五藏見らるゝあけびかな」で詞は慎むべきである。源氏帚木にも「息の下に引き入れことずくなるはいとよくもてかくす（缺點を）なり」とある。「ならす」馴るの他動詞四段。馴れつことになつて敬ひつゝしむ心が減ずるのをいふ。そこで自然侮るといふ意にもなる。「見え」は見られ。「心おくれ」心おとり、豫想外に見下げられること、心とは自分を見る人の心である。この章の末に「いと深く用意して、つひにこゝろ劣りせられず」とある所に照應してゐる。ここが誤り易い大切な所である。心劣り、心おくれ、心まさりは心にかく思ふ意である。

【問題】　およそみめよく品高けれども怪しくいやしきが能あるに立ち並ぶをりはその品そのみめも必ず思ひけたるゝものなり（程度副詞）（主）たとへば花のあたりのときは木はうち見るにたとしへなくさめたれども（程副）春の日數くれ峯の嵐過ぎたる後に緣ばかり殘りてかりの匂留まらざるが如しされば桃李は（主）一旦の榮華なり松樹は千年の貞木なりといへりいみじくありて身の能なきが一人あるを見るだに能あるを思ひ出づるならひなり況や能に並ぶ折のけぢめをやいかに況や同じ樣なるが一人は能ありて一人は能なきをや中にも世の中の變り行く樣昔よりは次第に衰へもて行くにつけつゝ道々の藝能も又父祖には及び難き習なれば藍よりも青からむことは誠に稀なりといへども形の如くなゝとも箕裘の業をつがさらむくちをしかりぬべし（十訓抄第十序論）（大正十四年第四十三回豫備）

【解說】　すべて（議論を言ひ出す初におく詞）容貌よく身分が高いけれども、變に思はれる程賤しい人の藝能をもつてゐるのに並んでゐる時には、その高い身分よい容貌もその人に能がない爲に必ず思ひ劣りせられるものである。譬へると櫻花のそばの常磐木はちよつと見るとたとへられない程に趣がないけれども（身分低くて能あるに譬へ

る)、春のにつすうもくれ、峯から吹く風の花のあたりを通つた後は、花は散々に失せて、緣だけが殘り、あの美しかつたのもほんの一時の假の艶で、それが殘らないのと似てゐる。(身分高く容貌のよいのも花のやうなものでつまらぬ)であるから桃紅李白の艶も一時のさかえである、松の樹は千年萬年たつてもかはらぬ木である。(聖德太子の言)といつてある。身分が高くて身に能のない人がたゞひとり居るのを見るさへも(すらの意のだにである)能のある外の人を思ひ出して、この人にも能があらばよからうと惜しく思ふことがよくある。まして、その人が能ある人(身分の低い人)に並ぶ場合は能ある人との區別が明瞭で思ひけたれるものである。それにまして同じ樣な身分の人が相ならんでその一人は能があつて一人は能のない時は一層目立つものである。(以上能の價値を說く)わけて世の中の變りゆく有樣は何事も昔にくらべてだん〳〵衰へてゆくにつけて、道々の藝能も、父祖ほどは出來ないことであるから、先の人よりも勝れることは實にありにくいことだが、せめて形だけでも、父祖の業をつがないのは、たしかに殘念なことであらう。

【備考】「藍よりも青からむ」荀子勸學篇冒頭の句。「箕裘の業」禮記の學記より出づ。親のすることを見まねて鍛冶の子は裘をつくり、弓屋の子は箕をつくるといふこと。父親の業をつぐ意である。

設問の解說

【問題】 假名の發達に就きて知れる所を記せ　(明治四十四年第二十五回豫備)

假名の發達を次の三期に分ちて考察せん。

一、奈良朝以前の假名にして、原始時代なり。その代表は推古期遺文の假名とす。材料は文學博士大矢透氏の假名源流考に據る。

二、奈良朝の假名にして發達時代なり。此の期を更に小分して三つとす。

(イ)紀記の假名
(ロ)萬葉の假名
(ハ)宣命の假名

三、は平安朝の假名にして大成時代なり。片假名の製作と五十音圖、平假名の製作といろは歌是れ也。

右のうち夙に最も研究せられたるは萬葉假名也。故に茲には之を略し、先づ推古期遺文の假名と宣命假名とを對照せん。ここに所謂宣命假名とは細字書の部分にして助動詞助詞及び用言の語尾の假名のこと也。

推古期遺文の假名を上に書き、宣命假名を括弧の內に書く。數字は宣命中に用ひられたるその假名の回數なり。故に數字多きもの程數多度用ひられし優勝假名にして、やがて片假名と發達しゆくべき運命を象徵せるもの也。

ア阿(阿10安1)　イ伊(伊18)　ウ有(無し。但假名は有れども細字に書く假名は無き也。以下これに同じ)エ無し(衣1)オ意(無し)

【註】 阿行「ウ」は有又にて表し、和行「ヵ」は宇汙にて表す。奈良朝の末まで區別あり阿行の伊也行の以は延喜以前に區別あり。故に夷は十行に汙宇はヵ行に入るを良しとす。

カ加奇宜(加26可17内清4濁13何8我濁音72習濁音6哥1)キ歸支臭(クキ)吉岐(岐50伎49支21枳2弃1)ク久(久350　ケ居悉希義濁音氣介(家20計2祈2氣4内清3濁1)コ己古(己13許3期2清1濁1)サ佐沙作(佐15左1)シ斯自音(之濁205内濁音1志37斯3自13内清5濁8時濁1)ス無し(須70内清67濁3)セ無し(世16西1)ソ巷歌(曾20内清9濁11)タ多陁清音侈(多40)チ知智至遲(知24治1)ツ都(都65豆濁音10川4)テ豆代(天277弖218宣命中の初には豆、二十八詔より天多く出づ)ト等止刀(止572等33登4。祝詞に登多し)ナ奈那(奈137那1)ニ爾(爾436仁177二十八詔より仁多く出づ)。ヌ奴蕤(奴14)ネ尼(禰1)ノ乃(乃343能34祝詞には能の方多し。)ハ波(波192婆濁音23方112との假字案外多し。)ヒ比非(比132備濁19毘濁1)フ布夫(布55不4夫26部1)(俾(倍45内清18濁27部22内清19濁3幣14閉16薄1賣1遍1)ホ賓凡菩(保4富1)マ麻明(麻66末49)ミ彌未(美54彌19味8未8)ム牟(牟98武15无3無5)メ賣牟(米14賣1)モ母(毛188母140初は母の方多かりしが後程毛多く出づ。)ヤ夜移(夜13耶4六詔以外に見えず。也3)ヨ夷(無し)ユ由(由3六詔に1七詔に2)エ無し(曳1十七詔に聞の下に用ゆヤ行也)ヨ已與餘(與19餘4)ラ良羅(良68羅5三詔四詔十二詔に羅あるのみ。)リ利(利106理9里3梨2四十二詔に。)ル留(流98留34)レ禮(禮41例1五十四詔に)ロ里(呂1五十六詔に)ワ和爲(無し)ヰ韋　ウ宇汙(無し)　エ無し(無し)　ヲ乎尾(平462遠12)

推古朝の遺文に據りて原始時代の假名の性質を概觀するに、(一)字音は多し。九十二字の内尾治經尻(チハリタヒシロ)の四字を除く八十八字は字音なり。字音のうち一音のもの多し。足難(スクナ)の二字の外の八十六字は一音を表すものにして音尾を省きたるものは十四にして七十二字は一字一音の漢字とす。一字一音は假字の本義也。

【註】音尾を省きたるものは吉巷漱代等刀蕤俾賓(スヰヘイ)凡明米良禮なり。

(二)ア列に發音する假字多し。後世にてイ列に發音すべきをア列に發音す。奇宜爲(カガ)(ワ)移(ヤ)侈(タ)これはシがチに通じ、それがタとなる)この外英(ア)寧(ナ)明、(マ、ミヤウのウ略、ミヤはマとなる。)

(三)イ列音をオ列にいふものあり。里をロといひ、止をトといふ。これはシはチに通じ、チはトとなる。已はヨとよむ。故に已はヤ行の音也。イとよめはヤ行のヰなり。意を古事記にてもオとよむ。日本靈異記に至りてイとよむに至れり。

(四)カ行サ行タ行相通の現象あり。巷コウはソウとなり、ソを表記す。至シをチの假字に用ふ。止をトとよむこと前にいへり。支シをキとよむ。川センをテンにテよりツとなる。國トコ立命を國ソコ立命ともいふ。

今宣命假名と比較するに、適者生存の法則により不適なるもの皆滅亡せり。不適當なるもののうちには音の相通のものは誤を生ずる故に支止を除き他は殆ど用ひざるに至れり。字劃の多きものは發達せず。意歸舉義斯巷歌遲菩賓羅は消滅す。例へば斯は之に壓倒され、母は毛に等は止に能は乃に遠は乎に羅は良に理は利に豆は天に都は川(後に至りて也)巷歌のソは曾に許は己に所を譲りたるが如し。前の例を見らるべし。

次に翻つて五十音圖より充てたる假字を考察するに先づ音義全書上の一四二頁の五十音圖によれば一字一音のもの四十五を占め、音尾を省きたるもの五、皆エ列のもの也。天門免延禮(テンヘイメンレイライ)これ也。略本和名鈔の五十音圖によれば更に少く禮計天の三字也。字劃も十五劃以上は三字にして十劃以上は十字也。而してこの音圖は書紀の歌の如く殊更に劃の多きものを好みて書ける形跡あり。登禰閇免慧を書き、略本和名抄の方には羅摩咩烏(ア行に誤りて入る)枳計の如し。然るに猶ほ斯の如く少し。故に片假名となるには、

一音の漢字にして字劃の少き假名は優勝す。

右の原則は立てられ得る。原始より優勢を占めたる假字は阿伊加支久介己多知止奈爾奴乃波比牟由與良利留(平假名

となり)流(片假名となる)禮乎(片假名に)二十五字也

後に現れて優勝したる假字は之須世曾川天仁不部保末美毛也(宣命には少し。爾後優勝したる也。)かの萬葉に於ける著しき發達は餘裕派の立場よりかゝる珍しき發達をなしたる也。假字と聯想と關係ありしかと思はる。等止をトに方をハに用ひたるが如し。戯訓など唱ふるは聯想に訴へしものに外ならざれば也。

片假名の發達と五十音圖とを一つに考ふべからず。五十音圖は後に出で來しものにしてその以前にいろ〳〵の片假名が發達せし也。安然所記の五十音、これは貞觀十九年のものなるが、既にア行にウを書けり。ウは宇の略にして宇は王矩の切也。すべて于は羽俱の切ヲ也。故に宇は和行に屬す。ア行のは有と書く。それがア行に書けるは既にア行ワ行混同の證也。其外の所屬は正し。現今に見えざる假名はユ(ア行エ)方(サ)爪(受にしてス)余(ニ)乃(乃の乃をとるノ)乙(ヒ)尸(ホ)尸(民の略ミ)尤(无ム)ヶ(ヤ行イ以の左をとる)彳(ヤ行のエ)ネ(レ禮の左)禾(和の左)于の十四字は異れり。略本和名抄には前にいへる如く烏をア行に入れたれども於はア行に乎は和行にして正し。されど羅行麻行阿行の順になれり。ア行を第一にして今日の片假名を排列したるはいろは歌製作時期と略ぼ等しきを知る。何者也行のイエ和行のウの發音の區別なくなりし時代なればなり。區別なくなりし時代は有宇は奈良朝末より他は天慶前後より寢く混用し天暦の末にて全く混用するに至れるなれば天暦以後のものならざるべからず。いろは歌も四十七字なれば天暦以後のもの也。もしその以前なれば五十あるべき筈なり。殊に「わが世誰れぞ」といふぞの助詞の用法は俗なり、故に片假名平假名が相當早く發達して居り、後に五十音なり又はいろは歌に充當したるものなりと判定す。

【問題】　左の語の種々の用例を列擧せよ。(明治四十四年第二十五回豫備)

べし　らる　や　に　と

【解說】　一、「べし」は動詞の終止形(良變及びこれと等しき活用の語はその連體形)を受く。終止形を承くる助動詞は推量又は咏歎(なり)の意義を有す。これ法則也。故に「べし」は推量を以て本義とす。用例

わがせこが來べきよひなりさゝがにのくものふるまひかねてしるしも衣通姫(古今集遠鏡文獻書院發行四七〇頁。)

【註】　「べし」の「し」は狀態性の意義あり。形容詞の語尾の「し」の意義に同じ。「べ」は意思なり。「む」の轉の「め」の再び轉じたるものと思はる。故に「らむ」「めり」「らし」に比して決定に近き推量キットアラウト思ハレルの譯はよく適せり。アラウは「し」なり。キット思ハレルは「べ」なり。主觀的狀態性の語にして漢文には應の字をあつ。ぶさはしの意なり。

宣長はコヨヒハ必ズ御出ガアラウト思ハルル夜ヂヤと譯せり。これは加變の終止形よりつゞきたる「べし」の連體形の例也。漢文にては可能の意が多けれども、國語は推量の意が最も多きを占め、近古以來「なるべし」「あるべし」として用ひらるる例多し。此の場合はすべて推量と見て誤なきが如し。

安比美受波古非之久安流倍之(萬葉卷二十)

雨ふるなるべし

「べし」に轉義六つあり。適當義務可能許容決意命令也。

今吾所生之子不レ良。猶宜レ白ニ天神之御所一。（古事記上）

いまあがうめりし子ふさはず、なほ天つ神のみもとに申すべし。

宜はモツトモチヤ・ソレガ一番ヨイ・ソレガヨイの意にして、擇レ之而判之之辭と註す。選擇と判斷とを前提とす。やつぱりどう考へても（猶の意義也）天つ神の御許に奏上して指圖を仰ぐは一番適當なる方法といふ意也。「申スガ何ヨリモヨイ」と譯す。すべて「宜しく」を適用して然るべき例は此の義と心得て可也。強き積極的の意義と思ふ。よく引用せらるる例は徒然草三十八段

心あらむ人はうたておろかなりとぞ見るべき（推量にてその結の例）金は山に棄て玉は淵に投ぐべし。（語氣強し投ゲルガ宜イの意。漢文にては玉宜投乎淵也ならん。又不レ如レ投の意也。

義務の意となるは連體形に多し。今日も盛に用ふ。

自分のすべきことをしないで、人をかれこれいふ資格があるか。消極也。道理上せねばならぬ、筈の意。

漢文には當の字を宛つるを以て見分け易し。今日の用例は漢文より來りたるかとも思はるれども、古き用例もあれば確に定め難し。

いかでかゝる事はせさせ給ひたるぞ。いみじからむさかさまの罪ありとも、この人々をばおぼしゆるすべき也。いはむやまろが方さまにてかくせさせ給ふは、いとあるまじく……更にあるべき事ならず。安子のことば。大鏡、師輔傳。語氣強し、當然許すべきである。ある筈でないの意也。宿命思想より出でたる「さるべき」の語は此の意に解すべく、「さるべき人を語らひて」の意は前後の意より見て適當と釋く方穩當なるべし。

可能はデキル・レル意なり。國語にもかなり多く用ひらる。

速須佐之男命。宮可ニ造作一之地。求ニ出雲國一。（古事記上）

はやすさのをの命、宮つくるべきところを

出雲國中宮殿を造作するに適當なる地とも考へらるべけれど、そは前後の意よりの臆測にして、可はユルス意也。造るに障りなき地。ツクレル地の意と見るべき也。なるべくは可を活かして說く方良し。適當は積極的意志ほのめく。故に後には決意と命令との二つを生ず、書紀に宜と書きて命令形に讀める所あり。可能は消極也。ずつと宜い（適當）して可い消極にて可能也。差支ガナイトユルス。「足る」はその物の方よりいひ、「可」は我が判斷よりいふ。主觀客觀の差はあれど、意義相似たり。

彼　談ずるに足る。彼を主としていふ。

彼　興に談ずべし。彼を我が評價していふ。

かく意義相通ずる故に足ると通はして見て良き場合は可能と判定してよし。宣命四十八詔に倍之（ベシ）と二箇所書きて推量に用ひ、又白龜を獻上したるに、その龜について可貴物在と書けり。これ明に可能なり。然るに五十一詔に可（フキヒカサネユ）を推量に用ひたり。日月累往（ヤヨヤヨ）麻爾麻爾悲事乃未之彌可（オヨヽ）レ益加毋永手を弔ふ名高き宣命なり。悲しき事がますであらうの意なり。されば一概に定め難し。この宣命の末にある止富良須（トホラス）之正（ベシ）（とほらすべしと）のべしは命令。安心して往くべき所まで行き達（ヒ）りなされよの意なり。

七尺（しちせ）の屏風（へうぶ）は躍らば越えつべし。（謠曲咸陽宮）

かく現在完了の「つ」と連用する場合は大概可能と見てよし。枕草子のにくきものの中に、忍びてくる人みしりて吠ゆる犬はうちも殺しつべし。(本講座第三册枕草子選釋六七頁終行)殺して差支がない。抗議申込むことが出來まい。殺すに足るだけの罪が犬にあるこ判定したる意ゆゑ「打殺してもしまひたい」と釋かれたるなるべし。されど之を應用して「七尺の屏風は躍らば越えてしまひたい」とは解かれず。そは前後の意相異れば也。

筑波嶺をや高しといふらん、み吉野をや深しといふらん。それ分け盡さば盡すべく、それ分け登らば登るべし。

【註】　この樹木折るに足らず　樹木がつまらぬ。

この樹木折るべからず　差支がある。道理より見て、してはいけない。許されぬ。して可いの反對である。

この樹木折る能はず　自分に力がない。

この樹木折るを得ず　法などでとめられてある。

故に可能といっても「能ふ」と餘程意味がちがふ。「越えつべし」は越えても怪我もせぬ。「殺しつべし」は殺しても批難を受けまい、消極の意。「登るべし」登っても危險がない。自分の能力をいふのでない。

連用形に用ひたる例は中古の歌文に見ゆ。

見渡せば比良の高根に雪消えて若菜つむべく野はなりにけり(續後撰春歌上平兼盛)ツメルヤウニの意。

いそぎつゝ舟出ぞしつる年の内に花の都の春にあふべく。(後拾遺第九羈旅伊豫の國より十二月の十日頃に舟にのりていそぎまかりのぼりけるに式部大輔資業)アハレルヤウニ間ニ合フヤウニ。かく連用形に可能の用例あれど、

鄙の春にゆくべくは、それぞ還城樂の舞　(謠曲高砂)

ここは「ゆくべくあるは」の意にして推量と見るがよし。

まことに武士の龜鑑といふべし。人から問はれなどした答にして(イッテヨロシイ)

許容の例にして「得」の容觀性を主觀化して判定したる意、比較的新しき用例とす。之を可能の中に包括するも可なれども、英語のキヤン(可能)とメイ(許容)との意義より見て、一義を設くるもよしと思ふ。漢文には容の字を用ひ、ニシテヤルの意に釋きべシとよむ。支那にても古くは見えず、後漢書以後用ひらる。書紀に雄略天皇崩御のところ此雖ニ朕ノ家事ニ、理不レ容レ隱とあり。現行文にはこの場合「べし」を用ひずして「得」を書く。法律の許容法と稱するもの皆「……スルコトヲ得」とせり。許容も可能も「して可い」なるが、話を先方よりもちかけたりと假定の時は許容。

士也母空應レ有、萬代爾語續可名者不レ立之而。　(萬葉卷六憶良)

をのこやも空しかるべき萬代に語りつぐべき名は立てずして。

此のをのこは憶良自身を指す也。上の應は字義より言へばふさはしいといふ料度即ち推量なれど、病に沈める時の歌にして、推量よりは強く適當とも解かば解くべけれども、それにては壇上にて演說する調子「諸君よ諸君、世の中の男子といふものは」といふ語氣になりて、憶良內心告白の熱烈は半以上消滅するなるべし。やはり決意と見たきなり。もし自分のことを士をかりて間接に表したりと見ば推量にてよし。下の可は語り繼ぐに足る意にて可能なり。應の字古事記中卷神武天皇の所に、

故其八咫烏引道。從ニ其立後一應ニ幸行。

かれその八咫烏導きなむ。そのたゝむしりより幸でますべし。

「御いで遊ばすがふさはしであらう」の意にして推量なり。宣命五十六詔遣唐使へ宣ふに、其人等乃和美安美應爲久植言部（かの人どものにぎみ安みすべく相言へ）するであらうやうにの意也。應は推量也。やうにの意は、連用形の中より生ず、副修格なれば也。故に憶良の歌の應も本則としては推量なるべけれども、語氣つよくして決意となりたるにこそ。

大夫者名乎之立倍之後代爾聞繼人毛可多里都具我禰　（萬葉卷十九家持）

ますらをは名をし立つべし後の代に聞き繼ぐ人もかたりつぐがね

「名を立てよう」家持主觀の歌にして、壇上にての演說にあらず。諸君世の中の丈夫は名を立てるのが義務であります。又適當してゐます。名を立てるがよろしい。そのやうな微溫湯の歌に非ず。勇士の名を振ふを慕うて熱血迸る歌なれば決意と解するを當れりと信ず。

都流藝多知伊與餘刀具倍之伊爾之蔽由佐夜氣久於比豆伎爾之曾乃名曾　（萬葉二十家持）

つるぎたちいよよとぐべし古ゆさやけくおひて來にしその名ぞ

これは命令と解したし。同じ長歌の終に「親の名立つな」とあり、又同反歌即ちこの引用反歌の前に「心つとめよ」とあり。二つとも語氣強き命令法なり。故にこの歌も「諸共にとがうぢやないか」と決意にするか。或は「とげ」と命令に解するの簡明直截なるに如くはなし。文法家には「べし」に命令の意なし。勸誘や義務の意より命令の如く聞ゆる也と說ける說あり。そはいつの文法を說くにや、現に明治大正昭和の文語に明に命令に用ひたらずや。「べし」の命令こそ活きたる文語の意味にして、他は皆死語の意に非ずして何ぞ。文法は死語の研究に限るべからず。

明日午前九時府の學務課に出頭すべし。

これ命令に非ずして何ぞ。文法は語原學と異ることを忘るべからず。命令といふ語は廣く解し勸誘も請願も含めていふ義門の希求言の意に解するを可とす

をのれをこの度都にまゐらする事は思ふ所多し。本意の如く濟き死をすべし。人にうしろを見えなむには親の顏また見るべからず、今を限りと思へ、賤しけれども義時君の御ために後めたき心やはある。されば横さまの死をせむ事はあるべからず。心を猛く思へ、おのれうち勝つものならば、ふたゝびこの足柄箱根山は越ゆべし。（增鏡新島もり義時の言）

「濟き死をすべし」は命令也。「今を限りと思へ」「心を猛く思へ」と同樣强き語氣にして勸誘又は義務適當と解するはいかゞ。やつぱり千代萩と同じく、死んでくれいといふやうな、胴慾非道な父親も、武士の意氣地か、是非もなや。「見るべからず」可能ユルサナイ意也。「あるべからず」箸也義務也當然なり。あるやうな道理がなし。義時の自信を示したる句也。善惡善果の世に惡しきことをせざる吾の橫さまの死をすることがある道理はない。心を猛く思への意也。「越ゆべし」可能前の「親の顏また見るべからず」の照應の句、ユエラレルの意と解く。「べし」を命令に用ひたるは江戸時代よりと說く人もあれど、前の萬葉も增鏡も命令と解す。命令の語の定めやうなり。

佐保山の柞のもみぢちりぬべみよるさへ見よとてらす月かげ（古今秋下よみ人しらず）

「オツツケ散ラウヤウニ見エルニヨツテ」と宣長は譯したれども、景樹の「散リサウナ、サレバ」の方よろし。「ぬ」

と「べし」と連用したる例は甚だ多し。「ソナ」又は「オツツケ……ソナ」と解く也。咲きぬべき梢（徒然草花は盛にの段）いたう眠りて落ちぬべき時に目を覺ます（徒然草賀茂競馬四十一段）モウチヨツトデ落チル意也。極て近き未來の推量にしてオツツケの意よく當る。

【註】「べし」は時の觀念薄し。狀態を強く感じさす也。時の觀念を加へたるは「ぬべし」なり。オツツケサウナ。極て接近したる未來に此の狀態あるを想像したる也。完了を未來にするは、「てしがな」「にしがな」の過去を希望にすると同じ道理にて、未來を兼ねて完了に言ひ做して想像する也。（廣文法二二〇頁）時の幻覺也。

吾等由ニ君太郎一應ニ當被レ戮　（皇極紀）

われ等きみたらうに由りつみせられぬべし。

君太郎は入鹿のことをその臣がいふ也。この時入鹿既に業（スヂ）に誅戮せられぬ。入鹿に味方せし理由にてオツツケ誅せられソナの意也。合をベシと讀み、ソナの意と思へども、漢文の用例は當に近く當の理をいふに對して恰好よりいふものと見ゆ。

合レ殺者斬應レ原者赦　（敏達紀十年春閏二月の條）

ころすべきは殺しゆるすべきは赦す。

とぶ螢雲のうへまでいぬべくば秋風吹くとかりにつげこせ（伊勢物語文獻書院發行國文學名著集伊勢物語新釋一六一頁）これは可能と狀態との意と思はる。アア螢ハ高ク飛ンデキル。アレ雲ニ近イ。雲ノ上マデモ行ケルヤウデアル。ソレナラ雁ニ言傳ショウカイの意と解す。

この人の御車いるべくば引き入れて御門さしてよ（源氏東屋）これも可能と狀態との意也。

これ等は未然形の用例なるが、命令形はなし。已然形は奈良朝には未だ發生せず。

はしにこそたつべけれ　（枕二一）筈の意。

琴なども習はす人あらばいとよくしいづべけれど　（落窪一）

推量と可能との意。できるだらうが也。

【註】未然も實は下に「ある」を略せりと見れば連用形也。されば「べく」の時は「ヤウ」狀態性副詞の意となる。それが連用形の本性也。ヤウナラバ、ヤウニと說き、前後の機轉にて可能の意などを添加すればよし。

【備考一】漢文にては應（推量）可（可能）宜（適當）當（義務）容（認容）須（命令）の意に用ふ。須の例。（合はうまく國語に一致せず。）

其還レ鄕日、不レ須ニ更報一　（孝德紀大化二年）

さらにつぐのふべからず。（償ふに及ばない意也。）

【備考二】動詞の末然形につゞくは未來。連用形につゞくは完了と過去。終止形につゞくは推量となり（咏歎）と也。それ故に「まじ」は終止形につゞく故に推量を本にしたる否定也。「じ」は未然形につゞくを以て未來を本としたる否定也。和字正濫抄卷一いろは歌の說明のところに契沖は曰ふ。「みじ」とは猶ほ後を指し、「せず」は當位をいへり。鶴峯戊申の語學新書に、九未來格としてず・で・じ・ぬ・ん・なむとせり。受身使役否定の三つは未來と通じたる性質を有す。漢文にては使役を假定に用ふるもその一例也。未然形よりつゞくは受身使役否定未來也。「べし」を指定と說く人あるも、指定は連體形よりつゞく性質の語也。この形に一定の法則あり、それ〴〵意義を有す。品詞篇は形を研究するが主目的にして、形を概括してその意を講究すべき也。連用形は時（未來を除く）の助動詞と希望（たし。その「た」は時の完了より來る。）とにつゞく。

【備考三】　「べし」より使役否定未來の助動詞につゞくには「べから」の形となり。未來の他の時の助動詞につゞくには「べかり」となり、他の推量助動詞「らん」・「らし」・「めり」につゞくは「べかる」の形なり。指定の「なり」には「べき」及び「べかる」よりつゞく。「べし」の下につかざる助動詞はる・らる（受身）たし（希望）たり（時完了）じ・（未來否定）まじ（推重否定）等なり。

【備考四】　「ば」・「とも」は「べく」（未然形）につゞき、「べから」は「ば」につゞき、「とも」は「べかりとも」とつゞく理なれど、その用例を見ず。「べく」（連用）よりは「て」・「して」・「は」・「も」につゞき、終止形よりは「や」につゞきて「べしや」となり、「べき」より「か」・「を」・「に」・「も」・「が」につゞき、「べけれ」より「ば」・「ど」・「ども」につゞく。又「べかれ」より「ば」・「ど」・「ども」にもつゞく。

【備考五】　口語には「べき」を當然の意に用ふれども、固苦しい言方なり。關東房州の海邊には「べー」と發音して決意の意味に用ふ。逃けべー〳〵。又文法の活用として萬葉七に「みべし」古今離別に「みべき人」土佐日記の「われに似べきは」の用例あり。平安朝の末の恠目抄頃より平家義經記等に至り、誤用の例「すへべし」「經るべきか」「かへられべし」「射べきにぞ」「すてべからず」「着かへべき鎧」「似べくも」「すてべけれ」「たづねべき人」「御目にかけべし」「あげべきなり」「つけべし」「すゆるべし」「消えべく」等の用例あり。（國語調査會編纂口語法別記三〇一頁）

一、實際に當りて「べし」の意義に迷はしきもの少からず。試みに問題解說七〇頁源氏帚木の一節大方の世につけての一節について「べし」を考察せられたし。

べし（本義）推量――（轉義）
- イイ――シテ可イ（話ノモチカケラレタトシタ場合ニ許容）――何ヨリ宜イ適當　積極（清極）
- ウ――（キットアラウト思ハレル）六つ
  - 決意（自分ニ）
  - 命令（他人ニ）
  - 義務（道理ヨリ命令サレテシナケレバ氣ガスマヌ）
  - 可能差支ガナイ（決定ニ近キ）
  - 積極

二、「らる」（文語）は四段奈變良變を除く他の動詞の未然形よりつゞいて受身を表すを本義とす。

彼は多くの人に誤解せらる。　（受身）

形容詞及び形容動詞よりは「らる」につゞかず。助動詞は使役以外はこれ亦「らる」に接續せず。

正行櫻井より父に河内へかへら（せ／しめ）らる。（使役の受身）

轉義は一自發二可能三崇敬也。

眺めらるるは古里の空なり　（自發の連體形）

起きむとだに思はゞ起きらる。　（可能）

彼は常に公共事業に奔走せらる。　（崇敬）

「らる」の活用は下二段に等しくして可能自發の時は命令形を缺く。「らる」よりつゞくこと次の如し。

- 使役
- 否定
- 未來
- 完了
- 過去
- 希望
- 推量
- 指定
- 比況
- 咏歎

らる（さす／しむ）　られ（じ／ず）　られ（ん／まし）　られ（ぬ／つ／たり）　られ（き／けり／けむ）　られ（たし／まほし）

べし　まじ　めり　むらし　らるるなり　らるる如し　らるるが如し　らるなり

文法上許容＝罪せらる(本則)＝罪さる(許容)。

三、や助詞を格助詞・副助詞・接續助詞・感動助詞に四分すとせば、「や」は副助詞として一、疑問二、反語の意を添へ、感動助詞としては三、なげき四、列擧五句調の「や」となるべし。

春やとき花やおそきと聞きわかむ　係詞

わが思ふ人はありやなしや　終止形につゞく

「や」は問の場合に多く用ひらる。「か」を問に用ふるには何いくばく等の疑問の語を添ふるに非ざれば使はず。(口語は然らず)これ「か」は自分にて大體の見當つきて疑の意淺ければ也。やは漠然たる意なるを以て「らん」と連用し疑、意を表す。人麿は妹見つらんかと用ふ。これ問にあらずして自分にて考へ込むたり。「や」は耶に當り「か」は歟に似たり。故に「や」には疑の語を要せざりしが、いつしか「か」と混同し「や」にも疑の詞を添へて用ふるに至れり。許容例十四誰にや問はん、幾何なるや、いかなる故にや、いかにすべきや。かく用ふるはもと破格なりしが、許容せらるゝに至れり。「や」は漠然たる意又咏歎の意なれば推量に近くして終止形より接續するを本則とす。(前の解說推量助動詞は終止形につゞく條參照)しかるを「か」と類推の結果、連體形よりつゞけて用ひらるること久しかりき。それを許容したるは許容例の十なり。例としては有ルヤ而白キヤ似タルヤ等なり。

そこひなき淵やはさわぐ　反語係詞　はを伴ふ。

うゑしうゑば秋なき時や咲かざらむ花こそ散らめ根さへ枯れめや。　(古今秋下業平朝臣)

遠鏡根マデガ枯レウカ、根ハカレハセヌ。下のやは反語なり。秋トイフ時ガナイコトガアツタラバコソ、咲カヌトモアラウカシラヌガ、上のやは疑問也。

あぢきなやわが名はたちて、感動助詞なげき、ナヤノ　かくるるまでもかへりみしはや　(同上)

花や蝶やと　感動助詞　列擧のや

津の國のこやとも人を　同　命令形の下のやにして口調を助く

おしてるや、

古池や、いはみのや　同　冠のやにして口調を助く

こゑたえず鳴けや鶯

あさりするうにしもあれや。　命令形の下につきて口調を助く

かく命令形の下の「や」を誂屬と富士谷成章は脚結抄に說きたれども不可なり。誂の意は「や」にあるにあらず、「や」は句調をとゝのふるのみなり。上の動詞の命令形にある也。矣乎を或時にはカナと讀めども、カナの意は矣や乎にあらずして。カナの意の已にある所へ、助けて矣乎を置きしまで也。甚矣人之好レ怪也(原道)惜乎子不レ遇レ時(史記李廣傳)助字といふも其わけ也。されば本講座第三册四三頁契沖の說を採るべき也。語法としてはその方よし。略解・古義は意味をいへるなり。廣日本文典二百十四頁三百十二頁百九十四頁に詞の玉の緒卷四より材料を貰ひたる例あり。疑問咏歎の判定係結の斷續について參考の價あり。

四に、形よりいへば體言に體言を添加すると體言と用言との關係を示すと接續助詞との三つ也。但し上二つは格助詞とす。